

檜原遺跡

第2・3次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第185集



2010

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



ひのき ばら

檜原遺跡

第2・3次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第185集

平成22年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、檜原遺跡の調査成果をまとめたものです。

檜原遺跡は、山形県の南部に位置する南陽市にあります。南陽市は、上杉家代々の湯治場として栄えた開湯900年と言われる赤湯温泉や、大同元年に再建されたと伝えられる宮内熊野大社、あるいは、国指定史跡である稻荷森古墳など、数多くの歴史が息づいています。また、ぶどうを始めとした果樹栽培も盛んで、豊かな自然にあふれた街でもあります。

この度、一般国道113号赤湯バイパス改良事業にかかり、檜原遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、平安時代、中世、近世の各々の時代の遺構や遺物が見つかりました。平安時代では、掘り込まれた穴の壁が焼けている遺構など、その活用が判然としないものもありますが、当時の集落跡の一部と考えられます。また、中世では板塀を巡らせた中に、建物や井戸を配した屋敷の跡が見つかりました。さらに近世の遺構からは、集落あるいは農地として開拓されていく過程がうかがえるなど、多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓蒙や普及、学術研究や教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成22年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 山口常夫

凡　例

- 1 本書は、国道113号赤堀バイパス改築事業に係る「檜原遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 著刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の執筆は、伊藤邦弘が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、鎌上勝則、安部実、阿部明彦、黒坂雅人が監修した。
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系(世界測地系)により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S B…掘立柱建物跡	S K…土坑	S D…溝跡	S E…井戸跡	S P…ピット
S G…河川跡	S X…性格不明遺構	R P…登録土器	R Q…登録石器	
- 7 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。
- 8 遺物実測図中の断面を黒く塗りつぶしたものは、須恵器を表す。断面実測の拓影は、断面の左に外面、右に内面を配置した。
- 9 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

調査要項

遺跡名	檜原遺跡	
遺跡番号	平成8年度新規登録、分24-30-4	
所在地	山形県南陽市大字中落合字檜原	
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所	
調査受託者	財團法人山形県埋蔵文化財センター	
受託期間	平成18年4月1日～平成19年3月31日 平成19年4月1日～平成20年3月31日 平成20年4月1日～平成21年3月31日 平成21年4月1日～平成22年3月31日	
現地調査	平成18年5月9日～9月22日 平成19年5月15日～7月31日	
調査担当者	平成18年度	調査研究部長 尾形與典 調査研究主幹 長橋至 専門調査研究員 伊藤邦弘 主任調査研究員 今田秀樹（調査主任） 調査員 深澤篤
	平成19年度	調査課長 長橋至 整理課長 安部実 専門調査研究員 伊藤邦弘（調査主任） 主任調査研究員 氏家信行 調査研究員 庄司隆志 調査員 山澤謙
	平成20・21年度	整理課長 安部実 課長補佐 黒坂雅人 課長補佐 伊藤邦弘（調査主任）
調査指導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室（平成18～19年度） 山形県教育庁文化遺産課（平成20年度） 山形県教育庁文化財保護推進課（平成21年度）	
調査協力	南陽市教育委員会 山形県教育庁置賜教育事務所	
業務委託	基準点測量業務 新和設計株式会社 遺構測量（傍観撮影）業務 株式会社バスコ	

発掘作業員	阿部國雄	石山正雄	井上芳子	今井絹子	海野吉一	尾形栄一郎
	尾形雄一	小川正二	小川幸保	楠正	桑原壽雄	古塚富朗
	後藤清吉	小林宏	寒河江美代子	斎藤精一	斎藤政彦	斎藤幸彦
	佐藤武彦	佐藤忠一	佐藤昌一	鶴貴新一郎	杉原祐吉	杉原澄子
	高橋人仁	武田一彦	武田正徳	竹田三男	寺島米子	戸田よし子
	富塙和則	中川春雄	西宮伸一	丸森エミ子	丸山いち	渡辺春夫
						(五十音順)
整理作業員	曾田知子	荒井美香	遠藤潤	加藤文子	金田さち子	木村千恵
	小関文子	峯田優子	持留陽子	森山博子	山口洋子	渡辺由美子
						(五十音順)

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経緯	1
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 調査の成果	
1 A区の遺構	8
2 A区の遺物	39
3 B区の遺構	46
4 B区の遺物	67
5 C区の遺構	76
6 C区の遺物	84
IV 総括	93
報告書抄録	卷末

表

表1 調査工程表	2	表5 出土土器・陶磁器観察表2	90
表2 遺跡地名表	7	表6 出土土器・陶磁器観察表3	91
表3 石器・石製品計測表	88	表7 木製品計測表	92
表4 出土土器・陶磁器観察表1	89		

図 版

第1図 調査概要図	3	第11図 S B2500 (3)	19
第2図 地形分類図	5	第12図 S B2606・2607・2609	20
第3図 遺跡位置図	6	第13図 S B2608	21
第4図 A区遺構全体図	12	第14図 S E2093・2094・2126	22
第5図 A区遺構配置図(1)	13	第15図 S E2420・S X2369・2452	23
第6図 A区遺構配置図(2)	14	第16図 S E2572・2199・2439	24
第7図 A区遺構配置図(3)	15	第17図 S K2160・2173・2175	25
第8図 A区遺構配置図(4)	16	第18図 S K2180・2197・2210	26
第9図 S B2500 (1)	17	第19図 S K2015・2026・2042・2043・2101・2102・2103	
第10図 S B2500 (2)	18	2109・2110・2111・2404	27

第20回	S K2127・2139・2158・2160・2162・2163・2173……28	第48回	S X3008・3015・3018・3019・3020……59
第21回	S K2230・2238・2372・2373・2417・2462……29	第49回	S X3025・3032・3041・3042……60
第22回	S P2316・2318・2501・2519・2521・2538・2560 2561・2563・2564……30	第50回	S K2707・2708・2729・2749・2754・279 2798・2799・2806……61
第23回	S P2049・2060・2064・2113・2114・2115・2116 2165・2181・2257・2258・2264・2276……31	第51回	S X2842・2892・2902・2904・2913・2927 2928・2816・2818・2934……62
第24回	S D2495・2169・2170・2171・2494……32	第52回	S X2938・2951・2957・2929・2935・2948
第25回	S D2008・2012・2036・2448・2227……33		2959・2960・2966・3024……63
第26回	S D2036・S K2092・2195……34	第53回	S P2701・2702・2718・2721・2722・2726
第27回	S D2077・S E2107・S D2085・S K2083……35		2728・2791・2810・2811・2812……64
第28回	S D2203・2215・2224……36	第54回	S P2814・2815・2845・2864・2885・2915
第29回	S D2227・2368・2510……37		2916・2952・3002・3023……65
第30回	S D2227……38	第55回	S D2710・S X2711・S D2704・2705・2706……66
第31回	A区井戸跡・土坑出土遺物……40	第56回	B区土坑・S G3026出土遺物（1）……69
第32回	A区柱穴棧板・S E2439井戸跡部材……41	第57回	S G3026出土遺物（2）……70
第33回	S E2439井戸跡部材……42	第58回	S G3026出土遺物（3）……71
第34回	S X2001出土柾（1）……43	第59回	S G3026出土遺物（4）……72
第35回	S X2001出土柾（2）……44	第60回	S G3026出土遺物（5）……73
第36回	S X2001出土柾（3）……45	第61回	S G3026出土遺物（6）・S X出土遺物……74
第37回	B区遺構全体図……48	第62回	B区包含層出土遺物……75
第38回	B区遺構配置図（1）……49	第63回	C区遺構全体制図……77
第39回	B区遺構配置図（2）……50	第64回	C区遺構配置図（1）……78
第40回	B区遺構配置図（3）……51	第65回	C区遺構配置図（2）……79
第41回	B区遺構配置図（4）……52	第66回	C区遺構配置図（3）……80
第42回	S X2709・2756・2789……53	第67回	S K3336・3578・S D3179・3410・3755・3181……81
第43回	S X2714・S D2716・2717・S G2755……54	第68回	S D3152・3751……82
第44回	S X2841・2858・2859・2886・2890・2891 3001・3002……55	第69回	S D3251・3674……83
第45回	S X2920・2921・2922・3003……56	第70回	C区土坑・溝跡出土遺物（1）……85
第46回	S X2931・2999・2943……57	第71回	C区溝跡出土遺物（2）……86
第47回	S X3000・3045・3009・3010……58	第72回	C区溝跡出土遺物（3）……87
		第73回	C区包含層出土遺物……88

写真図版

- | | |
|---|---|
| 写真図版1 A区空中写真 | 写真図版35 S D3152・3751・3179・3305 |
| 写真図版2 B区空中写真 | 写真図版36 S D3674・3315・3674 |
| 写真図版3 C区空中写真 | 写真図版37 S D3753・3755 |
| 写真図版4 A区西側遺構検出状況 | 写真図版38 104-24G・104-26・27G・105-29G柱穴群 |
| A区西側遺構完掘状況 | 写真図版39 108-26・27G・101-102-27G柱穴群
南端低地部完掘状況 |
| 写真図版5 A区西側遺構完掘状況 | 写真図版40 出土遺物4・51・53～55・64・66・67
71～73 |
| 写真図版6 S B2500・E B2003・2025・2050・2052 | 写真図版41 出土遺物1～3・5～10・13 |
| 写真図版7 S B2606・E B2400・S D2091 | 写真図版42 出土遺物14・87 |
| 写真図版8 S E2093・2094・2439 | 写真図版43 出土遺物56・60・61・62 |
| 写真図版9 S E2439 | 写真図版44 出土遺物63・84・85・95 |
| 写真図版10 S E2093・2094 | 写真図版45 出土遺物98・144・152・153 |
| 写真図版11 S E2107・2126・2199 | 写真図版46 出土遺物75・77～83・92～94 |
| 写真図版12 S E2420 | 写真図版47 出土遺物95・97・102・103・106～110 |
| 写真図版13 S D2203・2224・2227 | 写真図版48 出土遺物112・115・120・124・125
131～133・137・143・145 |
| 写真図版14 S D2227 | 写真図版49 出土遺物11・12・15～18・52
57～59・65・68～70・74 |
| 写真図版15 S K2083・2092・2095・2109・2230
2139・2372 | 写真図版50 出土遺物76・128・161・165 |
| 写真図版16 A区東側完掘状況 | 写真図版51 出土遺物86・88～91・99～101
104・105 |
| 写真図版17 B区北側遺構検出状況 | 写真図版52 出土遺物111・113・114・116～119
134～136・138・121～123・126・127・129 |
| B区南側遺構検出状況 | 写真図版53 出土遺物139～142・146～148・151
155・158・159 |
| 写真図版18 B区遺構完掘状況 | 写真図版54 出土遺物154・157 |
| 写真図版19 B区北側遺構完掘状況 | 写真図版55 出土遺物149・150・156・160・162
163・172・173・180 |
| 写真図版20 B区北側遺構完掘状況 | 写真図版56 出土遺物130・164・166～171
174～179・181・182 |
| B区南側遺構完掘状況 | 写真図版57 出土遺物19～30 |
| 写真図版21 S X2709・2713・2714・2715 | 写真図版58 出土遺物31～38 |
| 写真図版22 S X2756・2886 | 写真図版59 出土遺物39～41 |
| 写真図版23 S X2890・2921・2922・2943 | 写真図版60 出土遺物42～44 |
| 写真図版24 S X2999・3000・3002 | 写真図版61 出土遺物46・47 |
| 写真図版25 S X3003 | 写真図版62 出土遺物25・48・49 |
| 写真図版26 S X3009～3012・3015・3018 | 写真図版63 50・S X2001完掘状況 |
| 写真図版27 S X3019・3020・3025 | |
| 写真図版28 S X3041・3042 | |
| 写真図版29 S G2755・3026 | |
| 写真図版30 S G3026・S K2806 | |
| 写真図版31 S K2891・2892・2957 | |
| 写真図版32 C区遺構検出状況・C区遺構完掘状況 | |
| 写真図版33 S D3152 | |
| 写真図版34 S K3578・3314 | |

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

檜原遺跡は、平成8年度に山形県教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査によって発見され、新規登録された遺跡である。

山形県教育委員会では、平成6年に一般国道113号赤湯バイパスの建設計画が示されると、翌7年と8年に、その予定路線内について埋蔵文化財の有無を確認する遺跡詳細分布調査を行った。その結果、計画路線内には、東端部に位置する東畠A遺跡から、西端部の上大作裏遺跡まで、9遺跡の存在が明らかになった。この時点では檜原遺跡は、石器剥片を採取できることと、周辺の地形などから、東西450m、南北220mに及ぶ縄文時代の散布地として遺跡登録された。

その後、県教育委員会では、平成13年から遺跡の範囲と内容を確認するため、順次試掘調査を行った。

檜原遺跡の試掘調査は、平成17年の4月、6月、8月に実施された。調査は、計画路線内に、23箇所の試掘溝を設定し、重機械と人力で掘り下げを行った。試掘面積は805m²である。調査の結果、10箇所の試掘溝から、柱穴、溝跡、竪穴状遺構などの遺構と、縄文土器、土師器、須恵器などの遺物が出土した。このことにより、遺跡の範囲が確定されるに至り、A区・B区・C区の調査範囲が設けられた。

これらの結果を基に、国土交通省と山形県教育委員会との間で協議が行われ、本事業区内における檜原遺跡について、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなった。調査は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが、国土交通省の委託を受け、平成18年と19年の二ヶ年に渡って行うことになった。

発掘調査中の平成18年8月には、県教育委員会により、B区の南側で追加の試掘調査が行われた。4箇所の試掘溝の内、3箇所で遺構や遺物が検出され、B区の調査範囲を拡張して発掘調査を行った。

整理作業は、20年、21年に行い、21年度に報告書を刊行することとした。

2 調査の経過

檜原遺跡の発掘調査は、A・B区を第2次調査として、平成18年5月9日から11月2日までの実働120日間を行い、翌平成19年5月15日から7月31日までの55日間、第3次調査としてC区の調査を実施した。なお、本遺跡の第1次調査は、主要地方道米沢・南陽白瀧線改良工事に伴い、平成18年8月21日から9月22日までの間で行っている。

調査总面积は11,900m²である。調査区別の面積は、A区2,600m²、B区4,800m²、C区4,500m²である。

調査区のグリッドは、国土座標の平面直角座標第X系： $X = -216500$ ・ $Y = -61600$ を起点(30-10)として設定した。単位は5m×5mを1単位とし、東と北に向かって増加する番号を付した。(第1図)。

発掘調査の経過は、調査工程表(表1)に示した。

第2次調査

第2次調査は、5月9日に発掘器材を搬入し、A区の調査区設定に取りかかった。重機械による表土掘削は、11日から19日までの実働6日間行った。その間、遺構検出作業を進める中で、調査区外にも遺構の広がりが推定されたことから、関係機関と協議の上、調査区の一部拡張を行っている。

遺構検出後、掘り下げと並行して写真撮影、断面図作成などの記録作業を進めた。

A区は主要地方道米沢・南陽線を挟んで東西二つの区域に分かれ、西調査区の道路寄りでは遺構の分布が希薄になり、東調査区でもその大部分が上川の旧河道であることから、遺構の分布は一部に限られた。遺構の状態によっては、道路部分の調査も検討されたが、これらのことにより、道路部分の調査は必要ないと判断された。

7月10日にA区の精査を完了したが、12日に予定していた遺構測量写真と俯瞰写真の撮影は悪天候に阻まれ、18日まで延期しなければならなかった。

A区の現地引き渡しを、7月24日に行い、25日からは道路建設工事が始まった。

I 調査の経緯

B区の表土除去は、遺構検出面がA区よりも浅かったため、土量が少なく6月21日から27日までの実働5日間で終了した。遺構検出は、天候不順が続き、7月21日から始めて8月7日までの期間を要した。

8月29日には未買収地区であった、B区の南側について、県教育委員会の試掘調査が行われた。3箇所の試掘溝からは、いずれも土色変化が見られ、遺跡範囲が広があると判断された。その結果を基に、9月6日から8日までの3日間、再び重機械による表土除去を行い、1,240m³を抜取した。

また、一部畠地として残っていた農道南側についても、10月3・4日に表土を除去し、調査を行った。

8月7日から開始した遺構掘り下げは、記録作業と併行して行い、11月1日に精査を完了した。その間、10月25日には、現地において調査説明会を開催し、約50名の参加を得た。30日には、空中写真撮影を行い、11月2日に発掘器材を撤収して現地調査を終了した。

第3次調査

第3次調査は、5月15日に発掘器材を搬入し、調査区の設定に取り掛かった。重機械による表土除去は、5月16日から6月5日までの実働15日間である。遺構検出は、5月18日から6月18日までの期間で行った。この作業期間内に、基準点測量と格子点の設置、排水溝の設置や遺構配置図の作成、検出遺構の登録などの作業を進

めた。

遺構精査は、6月19日から開始し、7月30日まで行った。調査区南東側に集中する柱穴と土坑から、順次掘り下げを始め、これらの記録を進めながら、溝跡の掘り下げを行った。

7月24日には、現地において調査説明会を開催した。当日は、同じ事業で調査が行われてきた、上大作裏遺跡の説明会も計画され、同日開催の運びとなった。

調査終盤の7月27日には、遺構測量のための、空中写真撮影を実施した。30日には、遺構の精査と記録をすべて完了し、31日に現地調査を終えた。

6月中旬から7月の初旬にかけて、雨天の日が多く、調査の進捗に若干の影響を及ぼしたが、7月中旬以降は天候に恵まれ、当初の計画通りに終了した。

整理作業

整理作業は、18年度から21年度にかけて実施した。18・19年度は発掘調査終了後、出土遺物の洗浄、注記等の基礎整理と、復元、実測等の作業を行った。また、検出遺構の図面や写真等の記録類を整理した。

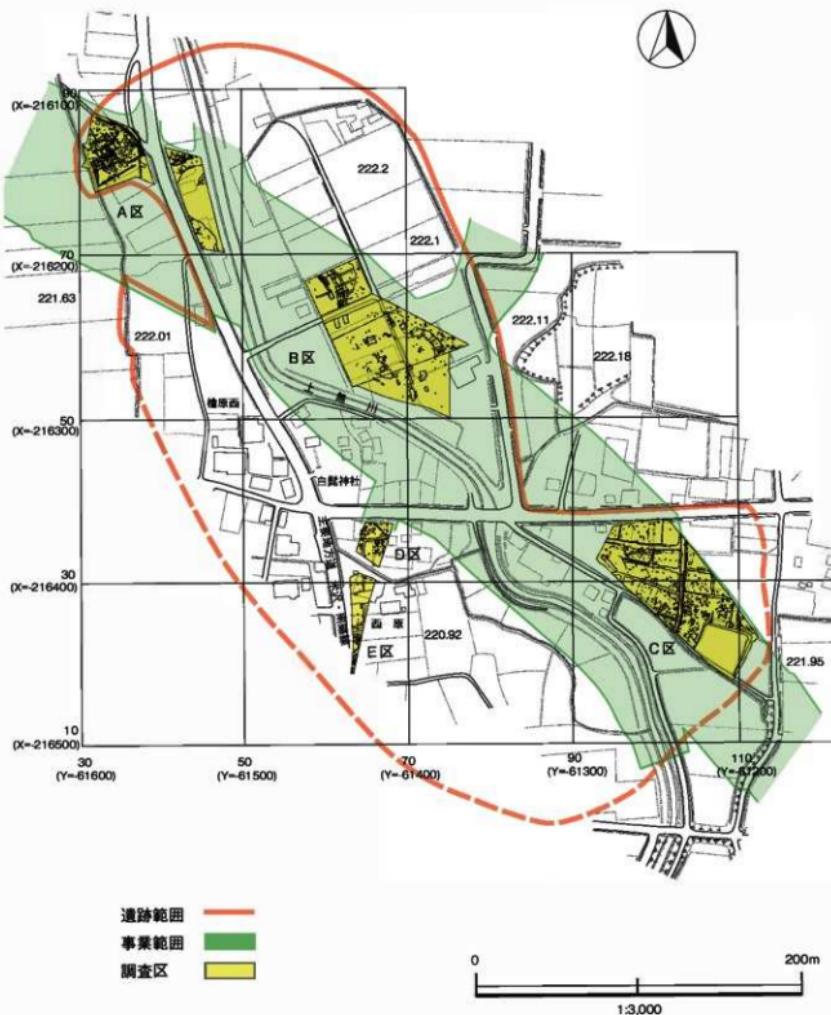
20年度は、報告書に掲載する遺構の抽出及びトレースと、遺物トレース、遺物観察表作成、仮版組等の作業を行った。木製品の保存処理も実施した。

21年度は、遺物写真撮影、遺構図版・遺物図版・写真図版等の版組、原稿執筆を行い、報告書を刊行した。

表1 調査工程表

平成18年	5月				6月				7月				8月				9月				10月				11月			
	週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25		
A区	表 土 除 去																											
	基 準 点 測 量																											
	遺 構 検 出																											
	遺 構 精 査																											
	記 録																											
B区	空中写真撮影																											
	表 土 除 去																											
	基 準 点 測 量																											
	遺 構 検 出																											
	遺 構 精 査																											
C区	記 録																											
	空中写真撮影																											

平成19年	5月				6月				7月				
	週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
A区	表 土 除 去												
	基 準 点 測 量												
	遺 構 検 出												
	遺 構 精 査												
	記 録												
B区	空中写真撮影												



第1図 調査概要図

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

檜原遺跡は、山形県南陽市大字中落合字捨原他に位置する。今回調査した地点の緯度及び経度は、北緯38度3分7秒、東経140度7分47秒である。

本遺跡が所在する南陽市は、山形県南部の置賜地方にある。置賜地方には、米沢・長井・小国・三盆地があり、南陽市は、その中の米沢盆地北部に位置する。米沢盆地は、南側が吾妻山系、東側が奥羽山脈、西部は玉庭丘陵によって囲まれている。その規模は、南北約24km、東西は、北部で約18km、南部で約6kmである。地形的な特徴は、新第三紀時代の海底火山活動により、米沢盆地から山形盆地の方向で、奥羽山脈寄りに火山性の大規模な陥没が生じたことによると言われている。地質は、主に河成堆積層や泥炭堆積層から成る。

檜原遺跡が位置する宮内扇状地は、吉野川と織機川によって形成された。宮内扇状地は、宮内南部、塗山南部、梨郷南部、沖郷、赤湯西部の地域に広がり、南陽市の平地の大半を占めている。扇状地には、これらの河川が流路変動を繰り返しながら作ってきた自然堤防が、下方に向かって放射状に発達している。

本遺跡は、宮内扇状地の扇尖部に織機川と上無川が作り出した自然堤防上に立地する。自然堤防の周辺には河間低地と後背湿地が広がり、沃野を形成する（第3図）。

気候は内陸型に属し、寒暖の差が大きい。最高気温の平均は35℃前後、最低気温の平均は-11℃前後である。年間の降水量は、全国の平均値に近い1,500mm前後であるが、積雪は比較的多い。

檜原遺跡の標高は、約222mである。現況は、畑地や果樹園が多くを占める。遺跡の範囲は、東西約400m、南北約500mの不整格円形を呈し、面積は約110,000m²と推定される。遺跡範囲の中央を北西から、南東にかけて上無川が蛇行する。上無川は南陽市池黒に発し、矢野目川などを集めながら、川西町北東部で松川に合流する。流程約7kmの小河川である。今回調査を行ったA区は、上無川右岸にあり、B・C区は左岸に位置する。

2 歴史的環境

南陽市には、現在までに200箇所以上の遺跡が確認されている。その内訳は、旧石器時代2、縄文時代85、弥生時代8、古墳時代21、古代67、中世65である。

旧石器時代の遺物として、稻荷森古墳の調査の際にナイフ形石器が出土している。同古墳が立地する長岡山丘陵に当該期の遺跡が存在することを想起させる。

縄文時代では、織機川上流の大野平遺跡から出土した沈線文土器が、田戸下層式に併行する「須刈田式」として、山形県における早期の標準土器となっている。白竜湖周辺に広がる湿地帯に立地する高畠郡出遺跡からは、打込柱平地式住居や彩漆土器、豊富な木製品など前期の貴重な資料が出土した。

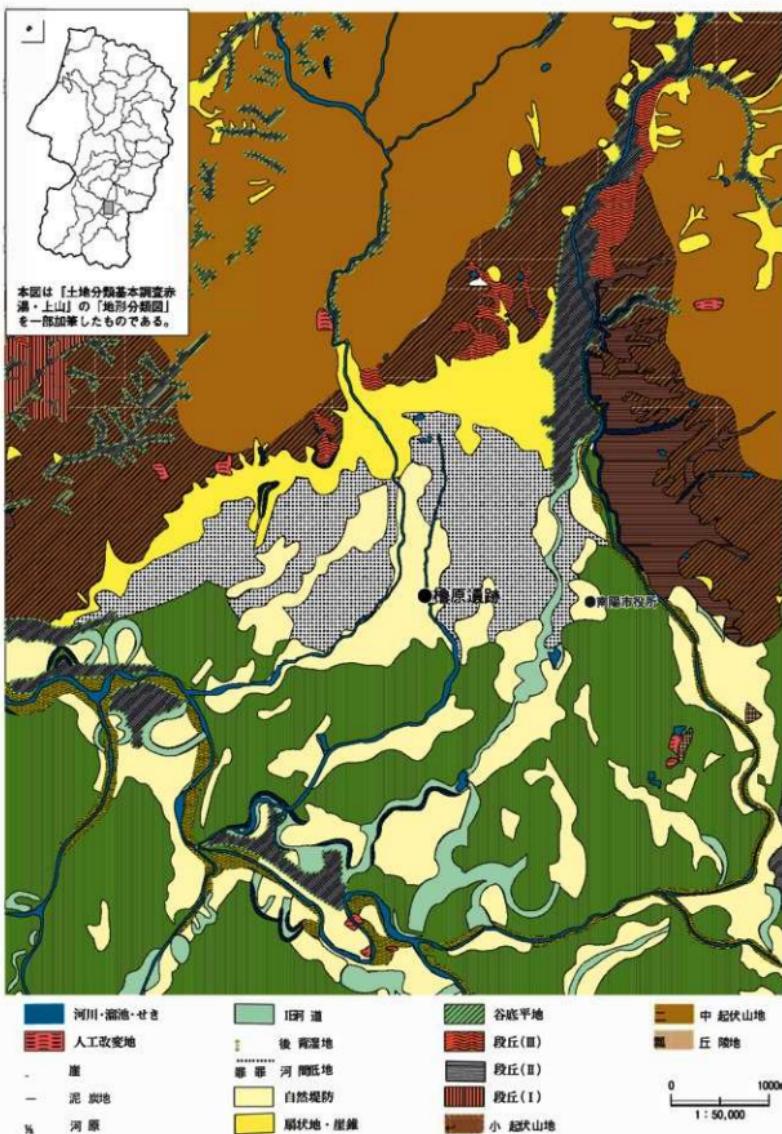
弥生時代の遺跡としては、墓跡と考えられる遺構から中期の土器がまとまって出土した百刈田遺跡、県内2例目となる後期の堅穴住居跡が見つかった庚塙遺跡、中期後半の土器が一括出土した上大作裏遺跡などがある。

古墳時代では、県内最大の前方後円墳である稻荷森古墳をはじめ、近年の発掘調査により、4世紀の円形周溝3基が見つかった天王遺跡、同じく円形と方形の周溝が15基見つかった大塚遺跡などがある。また、宮内扇状地の北方山麓には、経塚山古墳群、天王山古墳群、蒲生田古墳群、二色根古墳群などの終末期の古墳群が点在する。庚塙遺跡や百刈田遺跡からは、古墳時代の遺物が出土しており、集落跡の存在を示唆するものである。

奈良・平安時代の遺跡では、末端官衙の一つと考えられる中落合遺跡や円面鏡などを出土した庚塙遺跡、条里遺構の一部と考えられる矢野目館遺跡がある。生産遺跡では、須恵器を生産した平野窯跡がある。

中世では、単郭式方形館と考えられる屋敷跡を検出した鶴の木館跡や、方形館と集落跡を検出した天王遺跡、掘立柱建物跡と区画溝を検出した檜原遺跡の第1次調査などがあげられる。

本遺跡に近接する遺跡には、前述した庚塙遺跡、中落合遺跡等がある。



第2図 地形分類図

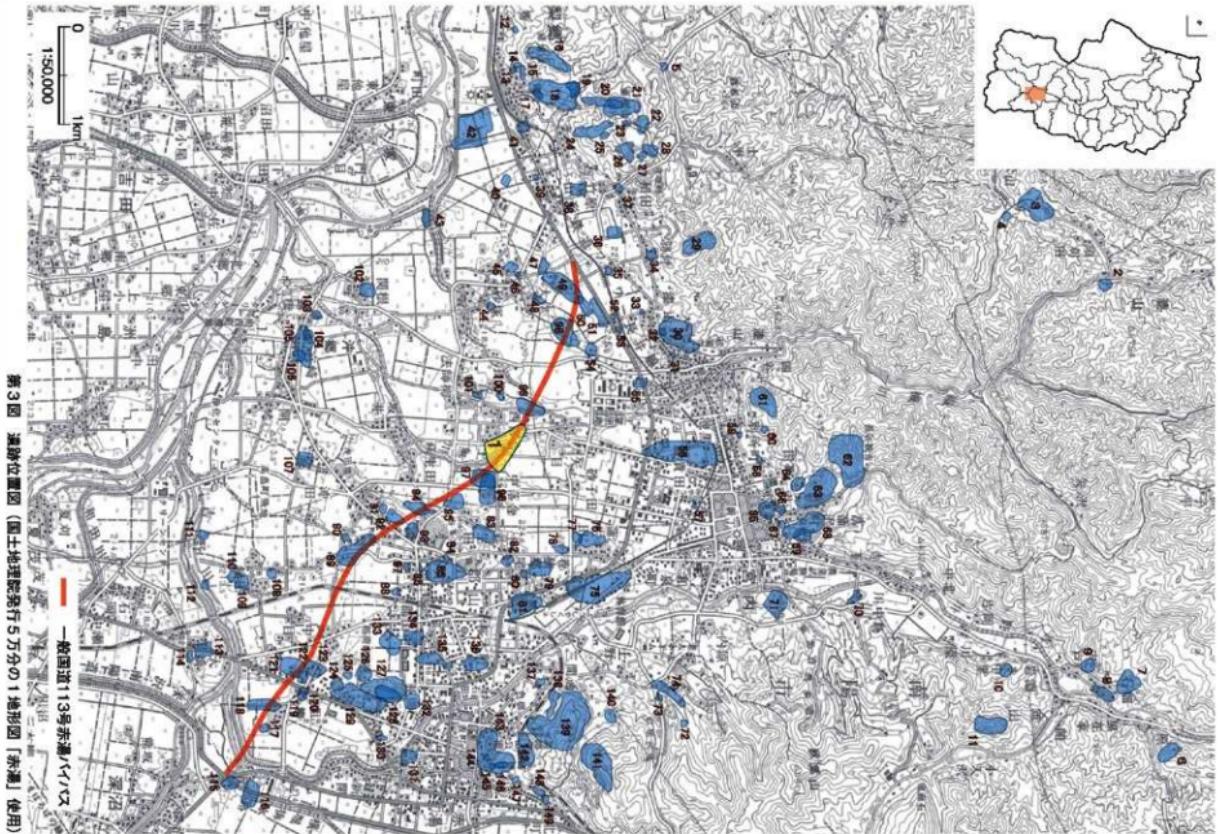


表2 遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	
1	神社 鳥落跡	平安～近世	51	高山原 集落跡	縄文	101	長静館 城館跡	中世
2	傳後館 城船跡	中世	52	四百馬 散布地	縄文	102	間根館 城館跡	中世
3	大寺平 集落跡	縄文	53	大阪在家 散布地	平安	103	幕橋A館 城館跡	中世
4	小須畠田 敷布地	縄文	54	大仏 散布地	縄文	104	露頭D館 城館跡	中世
5	長峰 散布地	縄文	55	東高屋 散布地	弥生・平安	105	植木場 露頭跡・集落跡・鐵塔	古墳・平安～近世
6	御嶽山物見 城船跡	中世	56	富岩田 集落跡	縄文・奈良	106	宮崎館 城館跡	中世
7	金剛館 城船跡	中世	57	大清水 散布地	縄文・平安	107	出田館 城館跡	中世
8	石屋 集落跡	縄文	58	劉所A 散布地	平安	108	大星敷 散布地	平安
9	天狗山船 城船跡	中世	59	劉所B 散布地	縄文	109	櫻内城館 城館跡	中世
10	三入山 敷布地	縄文・平安	60	劉所山莊塚 紅綿	平安	110	櫻内田 散布地	平安
11	地藏岩物見 城船跡	中世	61	劉所館 城館跡	中世	111	大野原館 城館跡	中世
12	經塚山南 敷布地	縄文	62	北跡 城館跡	中世	112	窪田丸 散布地	平安
13	小山B 敷布地	縄文	63	宍沢城 城館跡	中世	113	人稀城 城館跡	中世
14	小山西 敷布地	平安	64	宮内南第 城館跡	中世	114	御殿跡 城館跡	中世
15	小山A 敷布地	縄文	65	内小字牧家山 集落跡	縄文・平安	115	舟入 散布地	平安
16	經塚山古墳群 古墳群	古墳	66	内小字大和山 散布地	縄文・平安	116	杵出 集落跡	縄文
17	吉城填墓 火葬堆墓	平安	67	久保 集落跡	縄文	117	大網B 散布地	平安
18	柴鄉上殿 城船跡	中世	68	慶應山第 城館跡	中世	118	東畑A 集落跡	奈良・平安・近世
19	福山古墳群 古墳群	古墳	69	瓦松公園内 散布地	縄文	119	水上 散布地	奈良・平安
20	毫勝山古墳群 古墳群	古墳	70	平倉 城館跡	中世	120	熊の前庭 城館跡	中世
21	毫勝山船 城船跡	中世	71	丸山館 城館跡	中世	121	鶴ノ木鹿塚 集落跡・城館跡	古墳・平安～近世
22	海畑 集落跡	縄文・奈良・平安	72	山居沢A 散布地	平安	122	内城館 城館跡	中世
23	雨沼B 集落跡	縄文・奈良・平安	73	山居沢B 散布地	平安	123	中ノ日下 散布地	奈良・平安
24	大王山古墳群 古墳群	古墳	74	瀧牛山古墳群 古墳群	古墳	124	長岡西森 散布地	縄文・古墳
25	ヌゲッポ 集落跡	縄文	75	觀音堂 散布地	縄文・平安	125	長岡西田 散布地	縄文
26	石ヶ座A 集落跡	縄文・奈良・平安	76	牛生田舎 城館跡	中世	126	稻荷森古墳 散布地・古墳	汨石野・縄文・古墳
27	金山 敷布地	縄文	77	南筋船ノ内 散布地	縄文・奈良・平安	127	長周山 集落跡	汨石野・縄文・古墳
28	牛ヶ首A 集落跡	平安～中世	78	当時作 散布地	縄文・奈良・平安	128	長周館 城館跡	中世
29	赤松山船 城船跡	中世	79	若林郷原 城館跡	中世	129	長岡山東 散布地	中世
30	津山館 城館跡	中世	80	中屋敷 散布地	奈良・平安	130	太子堂 散布地	平安
31	津山 集落跡	縄文	81	青越 集落跡	縄文・奈良・平安	131	門屋館 城館跡	中世
32	津山(学校付) 集落跡	縄文	82	西田 散布地	平安	132	赤の木 鬼城跡	縄文・平安
33	敷布地	縄文	83	桑生田 集落跡	弥生・奈良	133	早畠田 散布地	奈良
34	片岸館 城船跡	中世	84	島貴 集落跡	古墳・奈良・平安	134	久の日館 城館跡	平安・中世
35	西高田 敷布地	平安	85	糸田 集落跡	縄文～平安	135	東六角 集落跡	縄文・平安
36	柴鄉新館 城船跡	中世	86	鷹山中堤 散布地	奈良・平安	136	瀧訪前 散布地・集落跡	縄文・古墳・平安
37	羽里堂 敷布地	縄文	87	沢田 集落跡	奈良・平安	137	瀧沢 散布地	縄文・平安
38	剣田館 城船跡	中世	88	粟々ノ上 散布地	奈良	138	二色板古墳群 古墳群	古墳
39	蕨庭 散布地	奈良	89	白刈山 集落跡	縄文・中世	139	二色板館 城館跡	中世
40	松木原 敷布地	平安	90	前小屋 散布地	縄文	140	瀧沢山古墳群 古墳群	古墳
41	柴鄉小窓 城船跡	中世	91	村柴煙草 散布地	奈良・平安	141	上野山古墳群 散布地・古墳群	弥生・古墳
42	柴鄉南館 城船跡	中世	92	西上中 集落跡	奈良・平安	142	中野山館 城館跡	中世
43	北堀田 敷布地	縄文	93	古屋敷 宇安	143	上野山館 城館跡	中世	
44	下八ツ口 敷布地	縄文	94	大坂 集落跡	縄文・古墳・平安	144	島帽子山古墳群 古墳	古墳
45	塙蓋前 敷布地	縄文・共生	95	梅ノ木 散布地	奈良・平安	145	島帽子山經塚 經塚	平安
46	塙蓋 集落跡	縄文	96	中落合館 城館跡	中世	146	上ノ山 散布地	縄文
47	清永ノ下 敷布地	古墳	97	中落合 集落跡	古墳～平安・近世	147	瀧村前 散布地	縄文
48	中野 敷布地	縄文・平安	98	上大作裏 集落跡	縄文・共生・奈良	148	北町 散布地	縄文
49	天王 集落跡	古墳・奈良・平安	99	夷坂 集落跡	縄文・平安・近世	149	夷平 散布地	縄文・中世
50	猪在家 集落跡	縄文・共生・奈良	100	北前 散布地	縄文			

III 調査の成果

1 A区の遺構

A 遺構の分布

A区で検出された遺構は、625基を数える。A区は主要地方道米沢・南陽線を挟んで東側と西側に分けられ、遺構の大半は西側から検出されている。

東側の調査区では、南北の端から柱穴、溝跡、土坑等の遺構を検出しているが、中央部では全く見られない。遺構が検出できる地区と土質も異なる。東から大きく弧を描いて落ち窪むこの部分は、上無川の旧河道と考えられ、後に埋め戻されたことがうかがえる。

西側の調査区では、中央部に柱穴、土坑、井戸跡等が密集する。北側から東部にかけては、柱穴が數を減らし、土坑、溝跡が多くなる。南側に至っては、遺構の数が激減する。表土から遺構検出面までの深さは、北側がやや深く80cmあり、遺構が密集する辺りは約50cmである。

B 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、西側調査区で5棟検出された。

S B2500 (第9~11図)

東側調査区のやや北寄りにある東西棟である。主軸方向は、北から67° 東へ傾く。東西4間、南北2間を身合とし、南と北に1間の縁を有する。規模は、東西が約9.9m、縁を含めた南北が約6mである。東西面の柱間距離は、北側が西から2.9・3.0・2.6・1.4m、南側は3.3・2.3・2.7・1.6mを測る。南北面の柱間距離は、東側の北から0.9・2.2・2.0・0.9m、西側は0.9・2.0・2.0・1.1mを測る。柱穴の掘り方は、楕円形もしくは隅丸方形で、大きさも径50cmから80cmと一様ではない。検出面からの深さは、40cm前後である。良好な状態で観察できるE B2002や2481の埋土の状態から、径12cm前後の柱材が使われたと推測される。出土遺物は、E B2476から須恵器系陶器壺の破片が2点出土している。また、E B2003・2021・2025・2058・2471・2476(19~26)には礎板と考えられる木片が残る。

S B2606 (第12図)

東西2間、南北3間の南北棟である。主軸方向は、北から31° 西へ傾く。規模は、東西5.6m、南北3.3mである。柱間距離は、東西面が西から1.6・1.7m、南北面が北から1.9・1.9・1.8mを測る。掘り方は、径30~60cmの楕円形を呈する。北東角のE B2389が、S B2500を構成するE B2387に切られることから、建物間の新旧関係は、S B2500がS B2606より新しいことがわかる。

S B2607 (第12図)

S B2608と重複する東西2間、南北2間の建物跡である。主軸方向は北から63° 東へ傾く。規模は、東西4.8~5.0m、南北4mを測る。柱間距離は、東西面の北側が西から1.8・3.0m、南側が2.1・2.9m、南北面は北から2.4・1.6mである。掘り方は、径40~60cmの楕円形または不整形を呈する。S B2608との新旧関係は、直接の切り合いが無いため不明である。E B2141から壺器系陶器の壺片が出土している。

S B2608 (第13図)

東西4間、南北3間の規模を持つ東西棟の建物跡である。主軸方向は北から62° 東へ傾く。南面と東面に幅約1mの縁を設ける。縁を含めた大きさは、東西9.4m、南北5.5mである。身合部分の柱間距離は、東西面の北側が西から3.1・2.9・2.4m、南側が3.0・2.9・2.5mあり、南北面の西側が北から1.8・2.5m、東側が2.6・1.8mを測る。掘り方は、径20~60cmの楕円形及び不整形のものが多いため、遺存状態が良好な柱穴は、深さ60cm程の掘り込みが確認できる。E B2618から壺器系陶器の壺片が出土している。この破片は、E B2141出土のものと接合し、同一個体であることを確認している。

S B2609 (第12図)

東西2間、南北1間の東西棟である。主軸方向は、北から68° 東へ傾く。規模は、東西3m、南北1.8mであり、本調査で検出した建物跡の中で最も小規模なものである。柱間距離も狭く、東西面で1.2~1.6mの範囲内に収まる。掘り方は、径40cm前後の楕円形である。

C 井戸跡

西側調査区の中央部付近に集中して、7基の井戸跡が検出された。この地区では、北東から南西方向に走る、幅約5m、長さ約35mの砂礫層を確認している。7基の井戸跡は、この旧河道と考えられる砂礫層の中と近接する場所に掘られている。

S E2093（第14図）

33-81グリッドに位置する。平面形は、ほぼ方形を呈する。大きさは東西約1.5m、南北約1.4mである。掘り込みは約20°の角度があり、比較的浅く、検出面から90cm程度である。埋土には少量の炭化物とシルトや粘土をブロック状に含み堅く締まっている。S D2088・2376、S E2094と重複する。新旧関係は、S D2088・2376が古く、次いでS E1093→2094の順で新しくなる。

S E2094（第14図）

33-81グリッドに位置する。平面形は、東西約1.4m、南北約1.1mの東西にやや長い楕円形を呈する。掘り込みの角度は、垂直に近い10°前後で、検出面からは約1.4mの深さがある。埋土にはブロック状になった黄褐色のシルトが多量に混入していることから、人為的に短時間で埋め戻されたものと推測される。重複するS E2095より新しく、前述したS E2093、S D2376との新旧関係から、この地区での最も新しい遺構といえる。

S E2126（第14図）

西側調査区中央付近の34-81グリッドに位置する。平面形は東西に長い崩れた楕円形を呈するが、西側を除く三方に直線的な面がうかがえる。また、東側の掘り込みが約20°の角度を持つのに対し、西側は約50°の緩い角度であることからも、本来は方形に掘られたものが、西側の崩落によってこの形になったと考えられる。現状の大きさは、東西1.8m、南北1.4m。検出面からの深さは、約1mである。埋土に炭化物の混入は認められるが、ブロック状の土の混入は少なく、安定したレンズ状の堆積が見られるため、自然堆積と考えられる。他の遺構との関係では、S E2126が埋まった後に、S B2608を構成するE B2620が掘られたことを確認している。

S E2199（第16図）

34-83グリッドに位置する。平面形は、南北が幾分長い楕円形である。本来は円形を呈したが南側の崩落に

よって現状の形になったと考えられる。大きさは、東西1.4m、南北1.8mを測る。検出面からは約60cmの深さしかない。掘り込みは緩やかで、30~40°の角度を持つ。埋土の2層下部から3層目に径10cm前後の小砾を多量に含む。

S E2420（第15図）

33-83グリッドにあり、旧河道による砂礫層の中央部に位置する。平面形は、東辺と南辺に方形の痕跡を僅かに留めた楕円形である。大きさは、東西1.8m、南北1.9mを測る。検出面からの深さは約60cmである。掘り込みの角度は約40°と緩く、全体の形は擂鉢状を呈する。埋土には黒色土に混じて周辺の粗砂を多量に含む。S D2036が埋まつた後で掘り込まれたことが、平面と断面の観察からうかがえる。底面は旧河道の粗い砂礫層がであり、現在でも常に水が湧き出る状態である。

S E2439（第16図）

砂礫層の南に接する33-82グリッドに位置する。本調査の中で唯一、井戸枠の構造が残っていた井戸跡である。平面形は、一辺1.5mの方形と推定されるが、北東角が大きく変形しているため不整形を呈する。検出面からの深さは約90cmである。最下部にのみ残っていた井戸枠は、長さ約70cm、厚さ約5cmの角材4本（31~34）と、幅15~30cm、厚さ2cmの板材4枚（35~38）である。角材は腐食が著しいものの、端部にほぞとほぞ穴を認めることができる。のことから、縦板と横桟の構造による井戸と推測できる。土層断面では、掘り方の土が不明瞭であり、残された部材以外は抜き取られたと考えられる。

北東角から姿系器陶器の片口鉢（8）が出土している。僅かに残っていた縦板の外側から出土しており、掘り方内からの出土と判断される。この片口鉢は、13世紀代の所産と考えられ、井戸が作られた時期を示すとともに、出土遺物が少ない本調査区において、遺構の年代を考える上で重要な意味を持つ。

S E2572（第16図）

32-79グリッドに位置する。S B2608の南西角付近にあり、7基の井戸跡の中で最も砂礫層から離れた地点にある井戸跡である。開口部の平面形は、東側に広がった楕円形を呈する。大きさは、東西約1.5m、南北約1.2mである。底面は、径約70cmの円形である。検出面からの

深さは約80cmを測る。掘り込みの角度は、垂直に近い10°～13°である。埋土には炭化物と黄褐色土の塊を斑状に含む層があり、人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。重複関係にあるS D2510とS P2575はS E2572が埋まつた後に掘られている。

D 土 坑

S K2015 (第19図)

31-84グリッドに位置する。平面形は、長軸1.1m、短軸0.9mを測る、南北に長い楕円形である。検出面からの深さは、約30cmを測る。底面は平坦で、長軸80cm、短軸40cmの楕円形である。掘り込みの角度は25°～30°で、断面形は逆台形を呈する。埋土には黄褐色の粘土塊を含む。底面からは、板材が敷かれた状態で出土したが、腐食が進んでおり、性格は不明である。

S K2026 (第19図)

31-81グリッドに位置する。平面形は、長軸1.1m、短軸1.0mのほぼ円形である。検出面からの深さは、約30cmを測る。掘り込みは丸味をおび、壁と底面の境が不明瞭である。埋土はやわらかく、炭化物を含む。

S K2042 (第19図)

41-81グリッドに位置する。平面形は、長軸2.1m、短軸1.1mの楕円形である。遺構検出面からの深さは8～20cmあり、南から北に向けて深くなる。埋土には、砂や粗砂を多量に含む。

S K2043 (第19図)

33-85グリッドに位置する。平面形は長軸90cm、短軸70cmの南北に長い楕円形である。深さは、遺構検出面から16cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦なため、断面形は箱型を呈する。

S K2092 (第26図)

33-81グリッドに位置する。平面形は、径80cmの円形である。壁は垂直に近い約10°で掘り込まれ、検出面からの深さは62cmを測る。底面は平坦で、径50cmの円形を呈する。埋土には、黄褐色の粘土塊等が多量に含まれ、1～3層までは人為的に埋め戻されたと推測される。S D2036・2088より新しい。

S K2095 (第14図)

33-82グリッドに位置する。前述したS E2094と重複する。平面形は、長軸1.3m、短軸1.1mの南北に幾分長

い楕円形を呈する。検出面からの深さは、最深部で40cmを測るが、底面の形状は凹凸があり、不安定である。埋土の2層目に見られる灰黃褐色の粘土は、周辺に無い土であることから、他所から運び込まれた可能性が高い。遺構間の新旧関係は、古い順からS D2376→S K2095・S E2093→S E2094と考えられる。

S K2101・2102 (第19図)

33-82グリッドに位置する。平面形は2基とも楕円形を呈する。各々の規模は、S K2101は長軸80cm、短軸60cm、深さ40cm、S K2102は長軸90cm、短軸70cm、深さ20cmである。S K2101の土層断面観察の結果、柱痕跡と見られる土質の違いが認められた。

S K2109 (第19図)

34-83グリッドに位置する。平面形は、径1mの円形である。検出面からの深さは、約30cmを測る。壁から底面まで丸味をおびた形態である。

S K2110 (第19図)

34-84グリッドに位置する。平面形は、長軸1.6m、短軸1.3mの楕円形である。壁の中程に傾斜変換点を有し、2段階に掘り込まれ、底面は丸味をおびる。深さは30cmである。重複するS K2404が埋まつた後に、掘り込まれている。

S K2139 (第20図)

33-80グリッドに位置する。平面形は、長軸1.1m、短軸1mのほぼ円形である。底面は平坦で、径60cmの円形である。深さは50cmを測る。

S K2160 (第17図)

35-82グリッドに位置する。長軸2.2m、短軸1.9mを測る、東西にやや長い楕円を呈する。深さは約10cmしかなく、埋土も1層のみである。この周辺は比較的大きな土坑の集中する地区だが、検出面からの深さはいずれも10cm前後しかない。底面は平坦である。遺構間の新旧関係は、古い順にS K2158→S K2160→S K2161と考えられる。

S K2161 (第17図)

35-82グリッドに位置する。長軸0.9m、短軸0.7mを測る、東西にやや長い隅丸方形に近い楕円形を呈する。底面は径20cm程の円形である。壁の中程に傾斜変換点を持ち、2段階に掘り込まれる。遺構検出面からの深さは約40cmである。埋土には、砂や粗砂を多く含む。遺構間

の新旧関係は前述したとおりである。

S K2158・2162・2163 (第20図)

34-82・35-83グリッドに位置する。S K2160・2173を含めて重複する関係にある。S K2158は径1.7mの円形、2162は径2.4mの円形、2163は径約1.2mの梢円形を呈する。検出面からの深さは、8~10cm程度で極めて浅い。遺構間の切り合いは、古い方から S K2162→2163→2173→2158→2160となる。

S K2176 (第17図)

36-82グリッドに位置する。平面形は、長軸2.8m、短軸2.1mを測る梢円形である。底面は2段に掘り込まれ、1段目は20cm、2段目は38cmの深さがある。2段目の掘り込みは、長軸1.2m、短軸1mの梢円形で底面は平坦である。

S K2372 (第21図)

調査区西端、31-81グリッドに位置する。平面形は、長軸1.2m、短軸1.1の梢円形を呈する。底面も平坦で、長軸80cm、短軸70cmの梢円形である。壁の角度は30~35°である。検出面からの深さは45cmを測る。

S K2373 (第21図)

調査区西端、31-80グリッドに位置する。平面形は、径1.1mの円形である。検出面からの深さは約20cmを測る。底面は平坦で径約80cmの円形である。埋土には、粗砂を多く含む。

S K2417 (第21図)

調査区の東端、37-81グリッドに位置する。平面形は、長軸1.2m、短軸1mの梢円形を呈する。検出面からの深さは26cmである。東側の壁は緩く掘り込まれるが、それ以外は30°程の角度を持つ。底面は、長軸70cm、短軸60cmの梢円形を呈し、平坦である。

E 柱 穴

建物跡として構成できなかったものも含めて約500基の柱穴を検出している(第22・23図)。平面形の多くは円形もしくは梢円形を呈する。径は小さいもので30cm前後、大きいもので60cm前後のものである。深さは、10~50cmと開きがあるが、浅いものは検出面の状態が影響を及ぼしていると考えられる。土層断面からは、柱痕跡が認められるものも少なくなく、今回確認できた建物跡は、全体の中の極一部である。

F 溝 跡

溝跡の分布は、調査区の北側のものと、建物跡などが集中する中央部に掘られたものとに分けられる。前者は主に東西方向に掘られているが、後者は建物を取り囲むように掘られているのが特徴的である。

S D2495 (第24図)

32-86~37-81グリッドにかけて、約30mの長さを検出した。平面形は、北西から南東方向へ緩く湾曲し、両端とも調査区外へ伸びる。幅は、上面で約2m、底面で約50cmを測る。掘り込みの角度は、概ね40~45°である。底面は平坦なため、断面形は逆台形を呈する。埋土には黄褐色土等を混入するが、比較的均質で堅く締まっている。建物の向きとの関連性、他の遺構の分布状況などから、建物跡を中心とした屋敷地を区画する溝と考えられる。埋土から壺器系陶器の鉢(10)等が出土していることもあり、建物跡や井戸跡と同時期と判断される。

S D2227 (第29・30図)

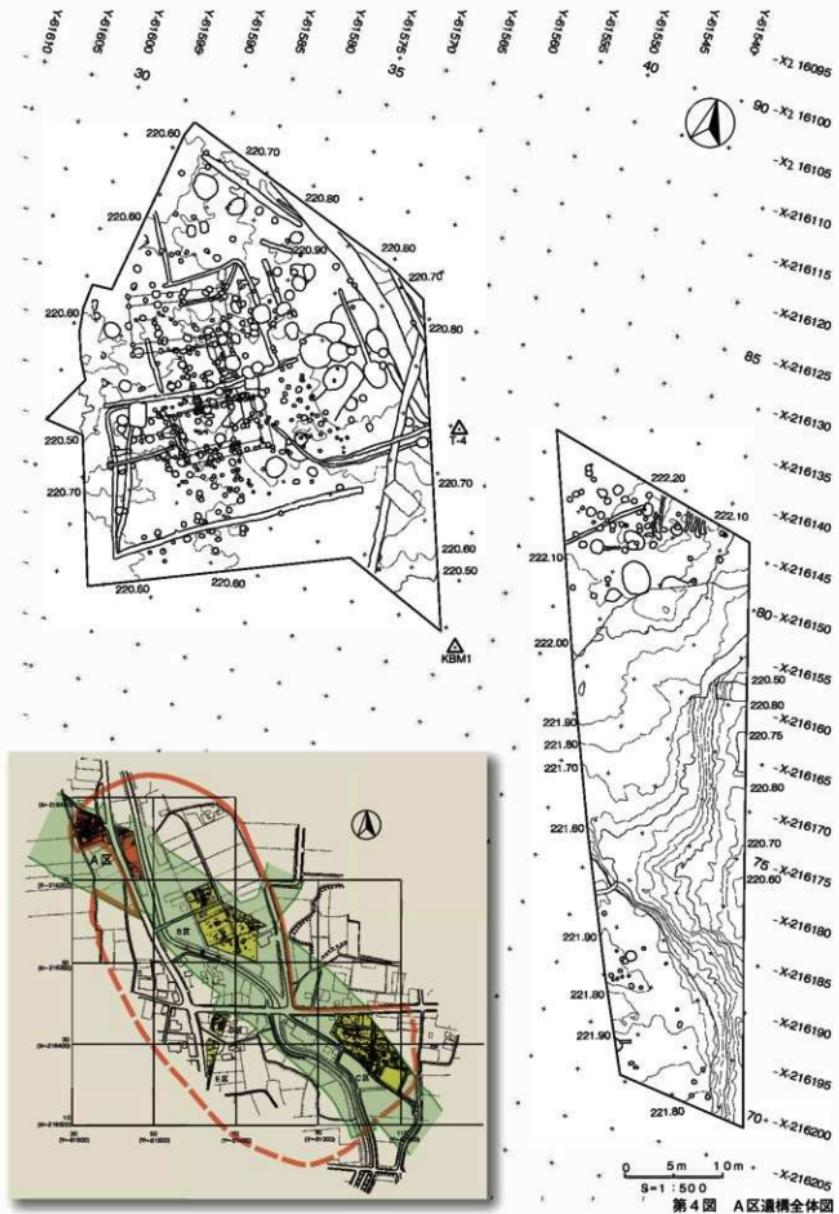
31-80~37-80グリッド他に位置する。南面、西面、北面があり、S B2608を囲むように矩形に設けられている。南面は26.5m、西面は16m、北面は3mあり、全長は45.5mを測る。南西角は約70°の角度で北に折れ、北西角は約100°で東へ折れる。南面と北面はほぼ平行である。幅は40~60cm、深さは20cm前後を測る。

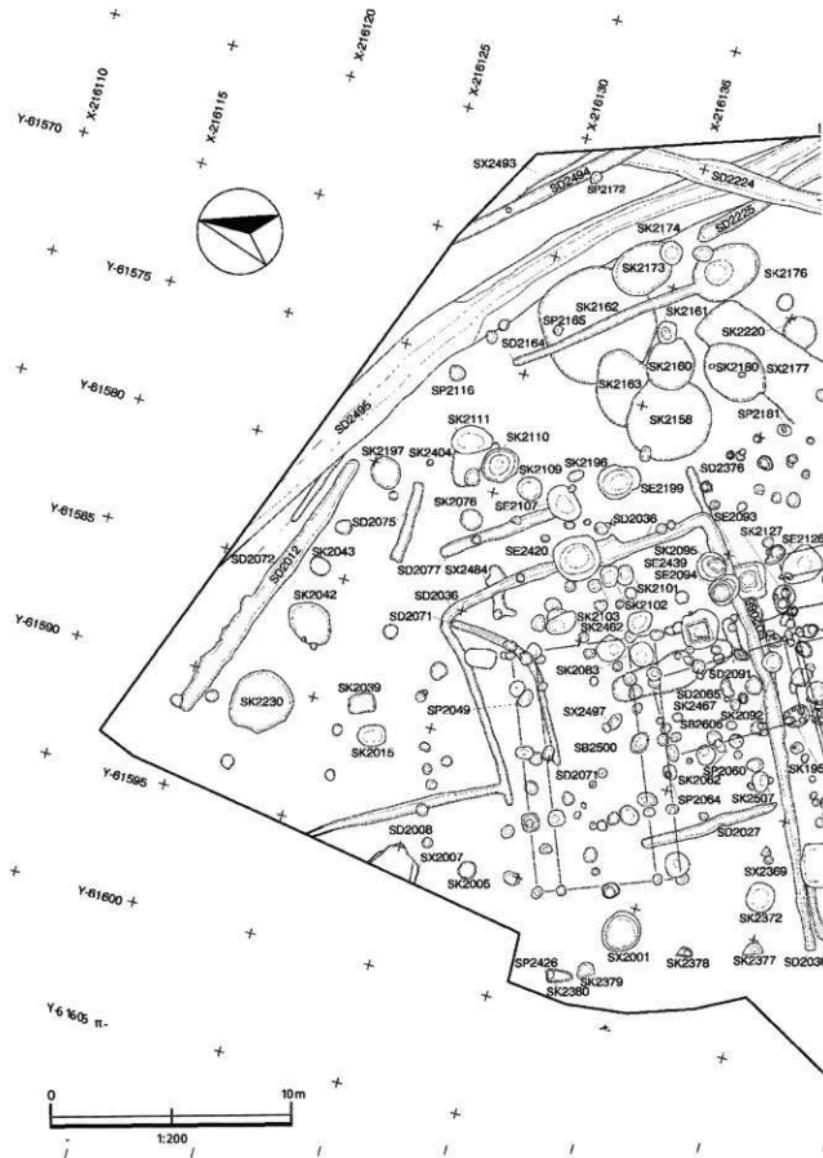
6~8cm掘り下げたところ、南面と西面の一部で溝の中央部に黄褐色土を含み、周辺より粘性のある土を検出した。この土の平面形は凹凸を繰り返した形状で、土層断面には、柱穴に見られるような埋土状況が確認できた。これらのことから、S D2227は溝跡ではなく、垣根あるいは板塀状の圍繞施設の可能性も考えられる。他の溝跡では、この土色変化を確認できなかったが、同様に建物を取り囲むように配されたS D2036も、圍繞施設の可能性は十分に考えられる。

S D2036

南面18.5m、東面12m、北面8.5mあり、全長は39mである。南東角、北東角ともほぼ直角に折れ、S B2500を取り囲む。幅は50cm前後、深さは20cm前後を測り、形態もS D2227と共通する。S D2227と同時に存在したかは、検討する必要がある。

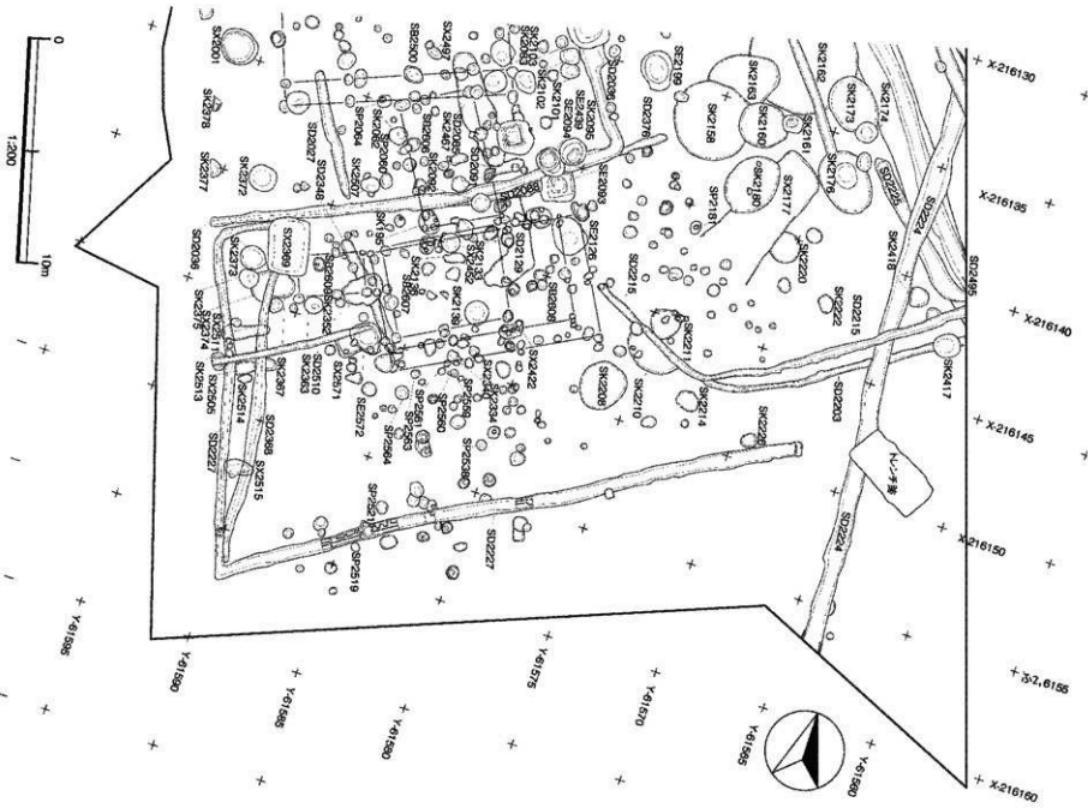
III 調査の成果

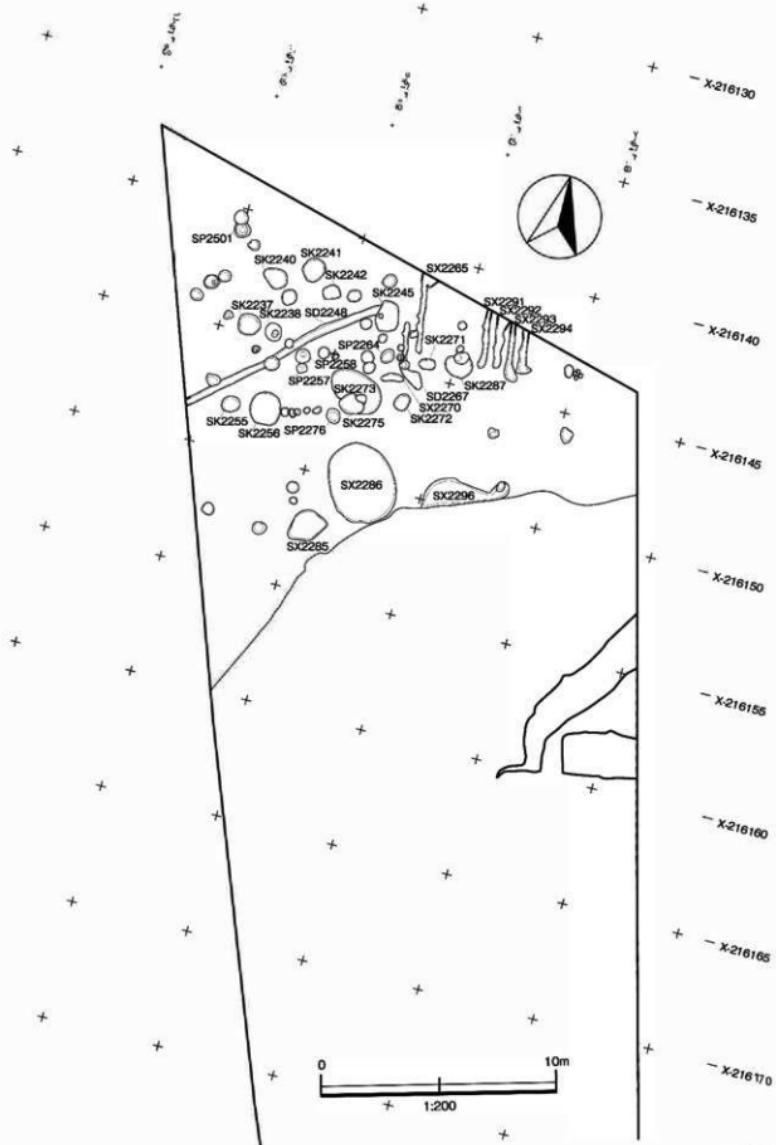




第5回 A区遺構配置図(1)

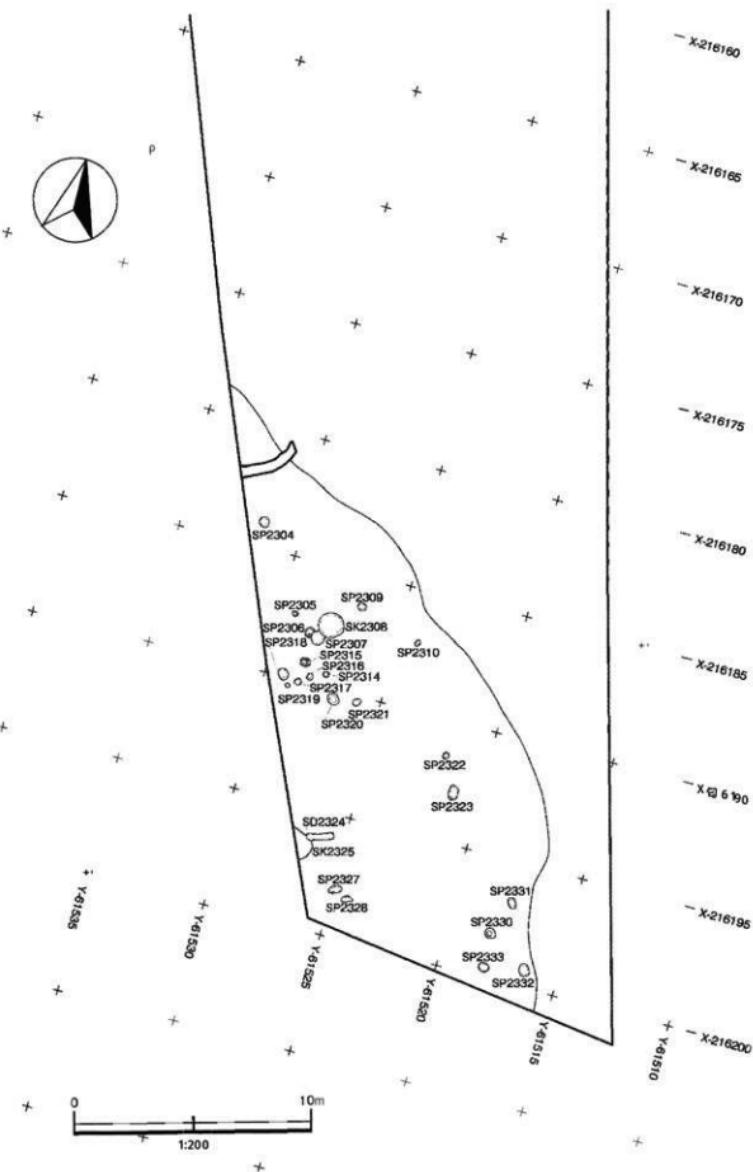
第6図 <区画地図(2)



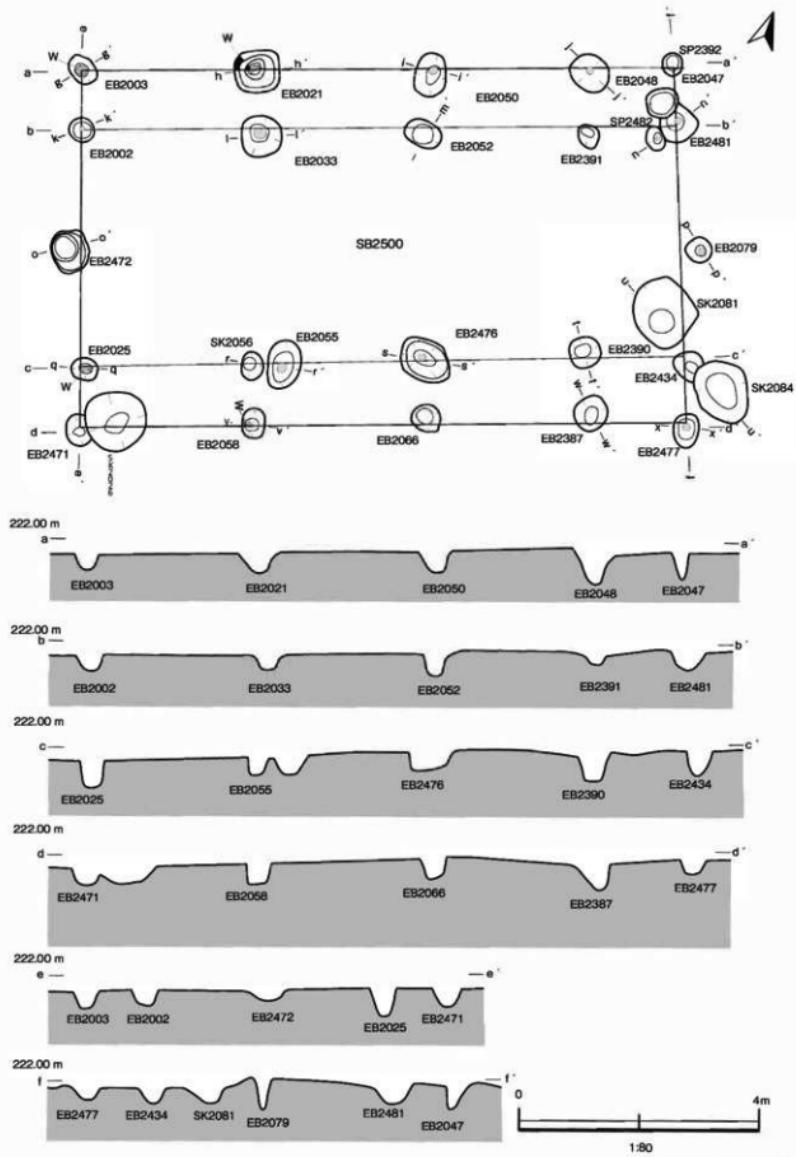


第7図 A区構造配置図(3)

III 調査の成果



第8図 A区遺構配置図(4)

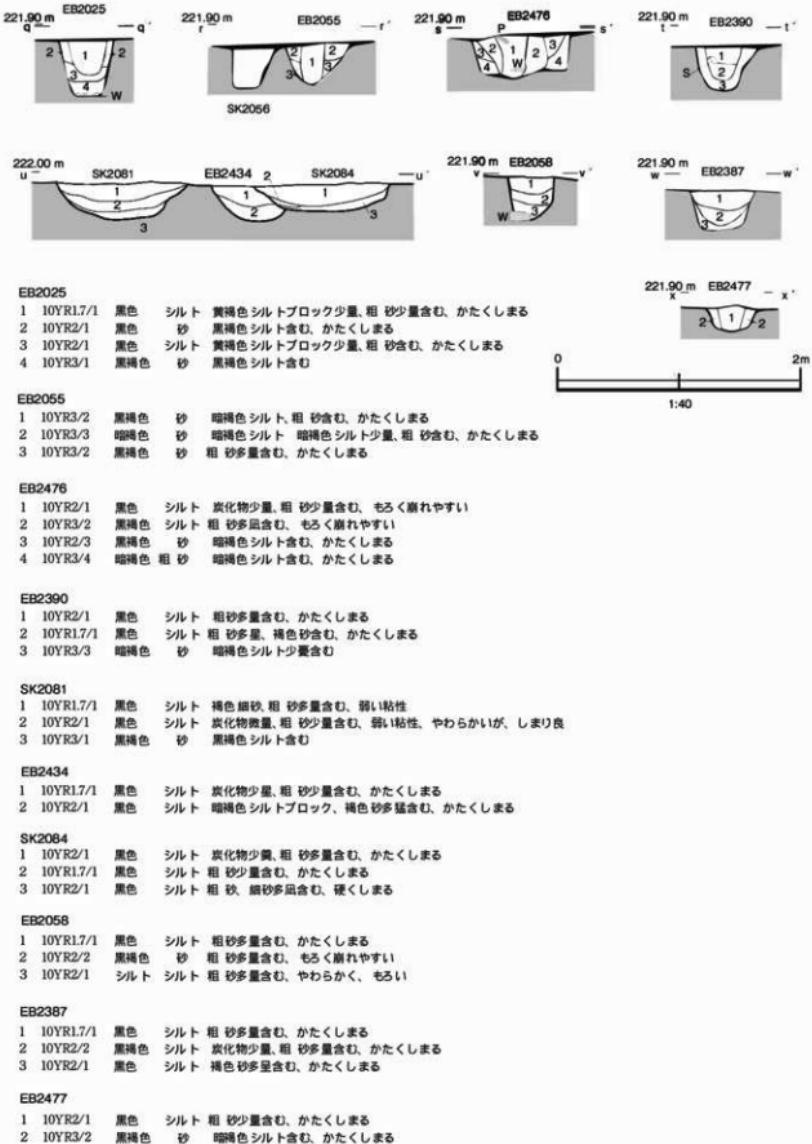


第9図 SB2500(1)

III 調査の成果

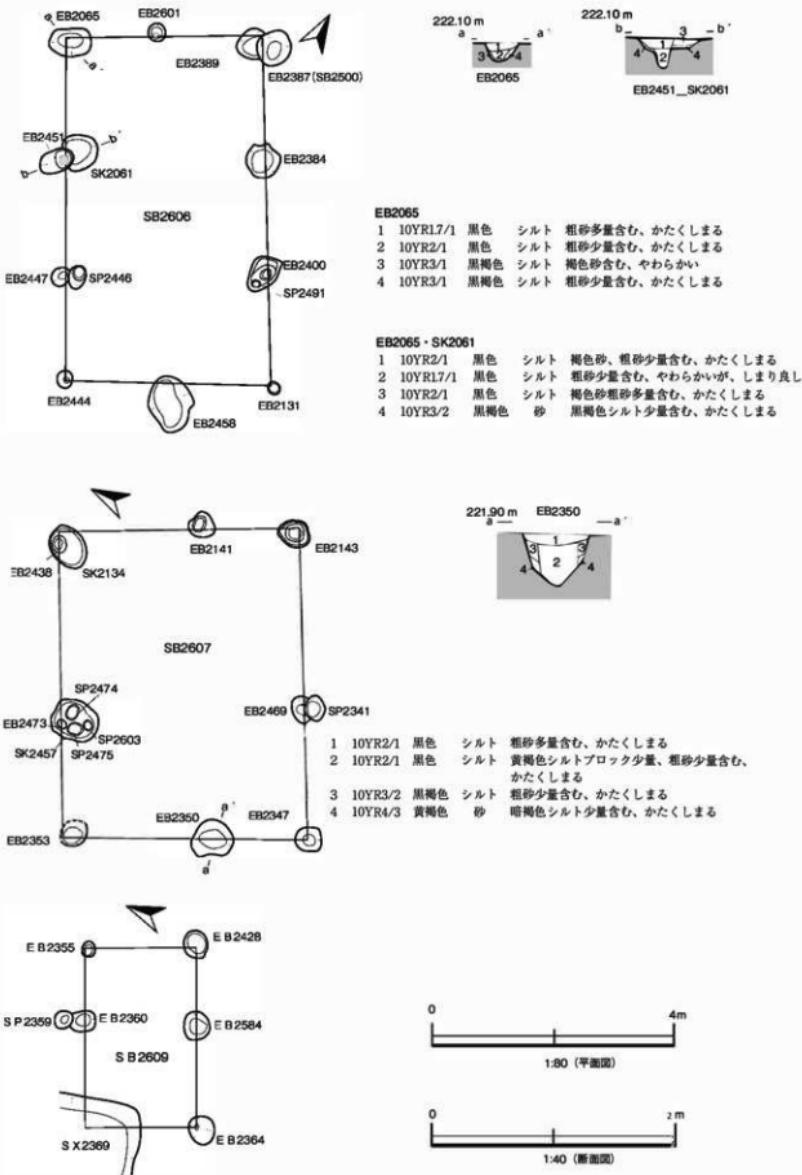


第10図 SB2500(2)

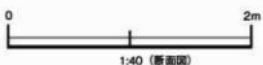
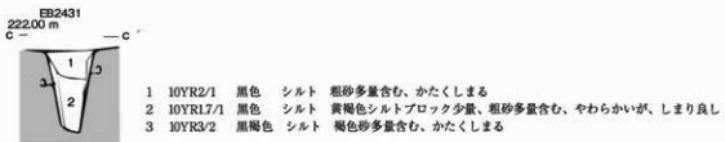
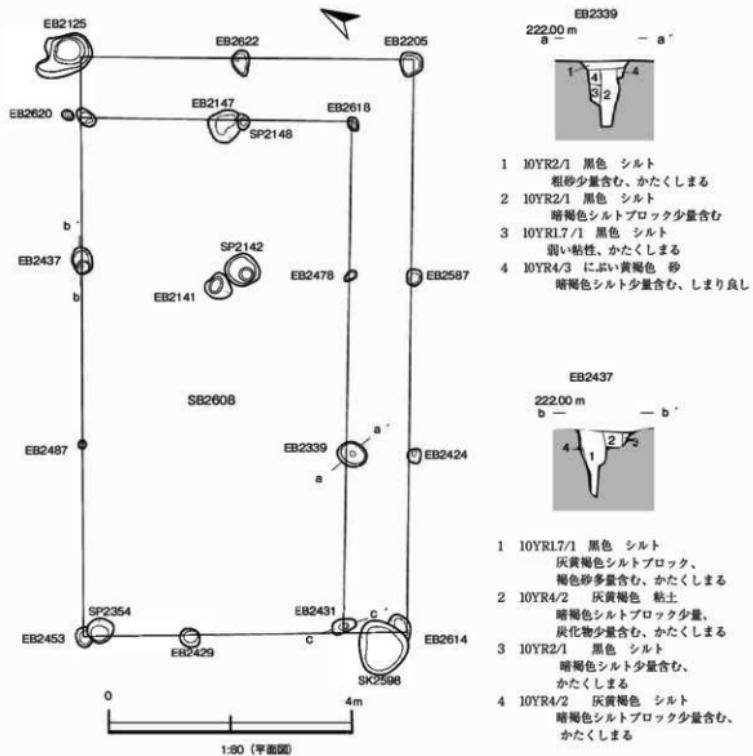


第11図 SB2500(3)

III 調査の成果

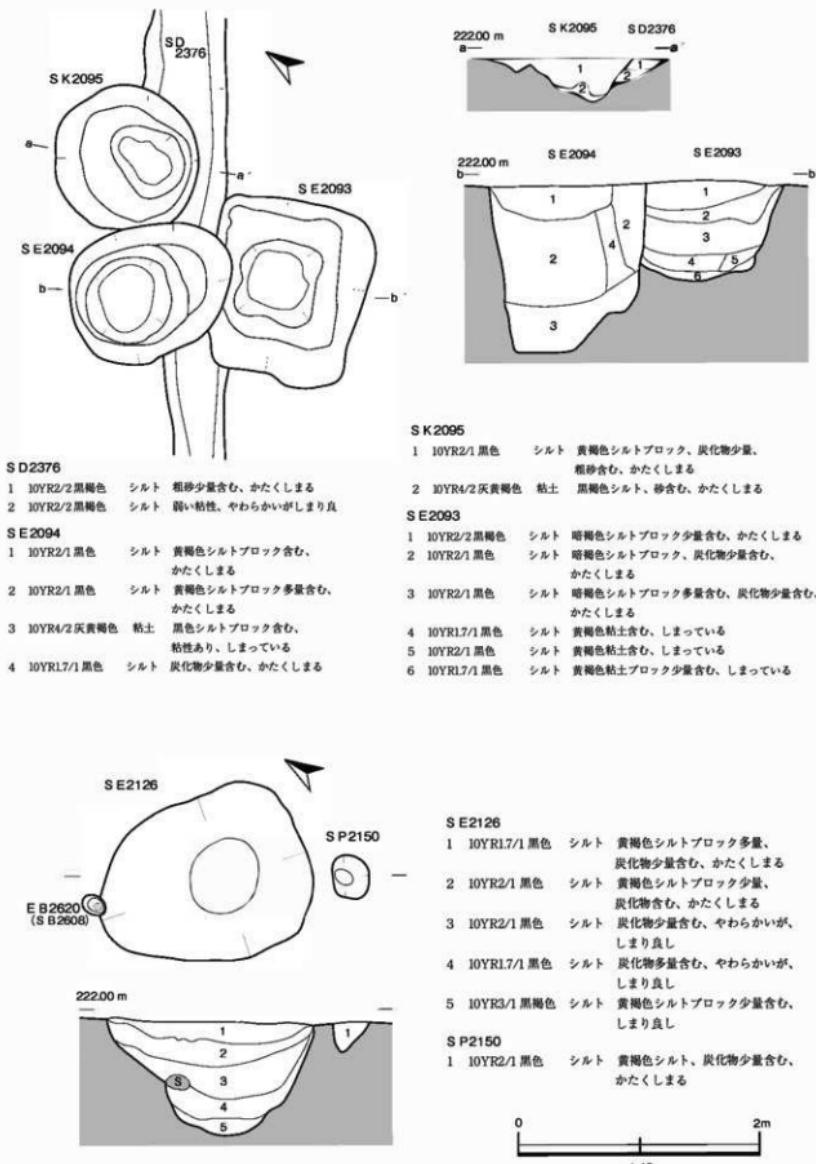


第12図 SB2606・2607・2609

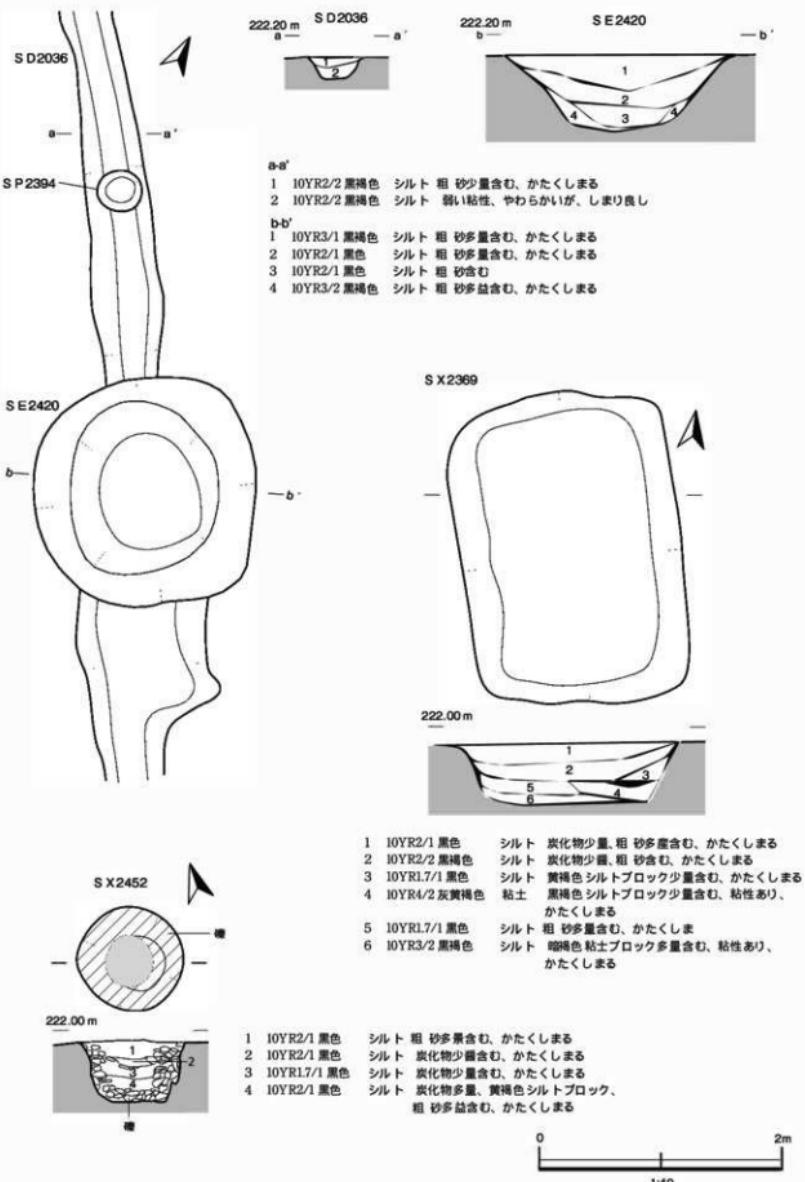


第13図 SB2608

III 調査の成果

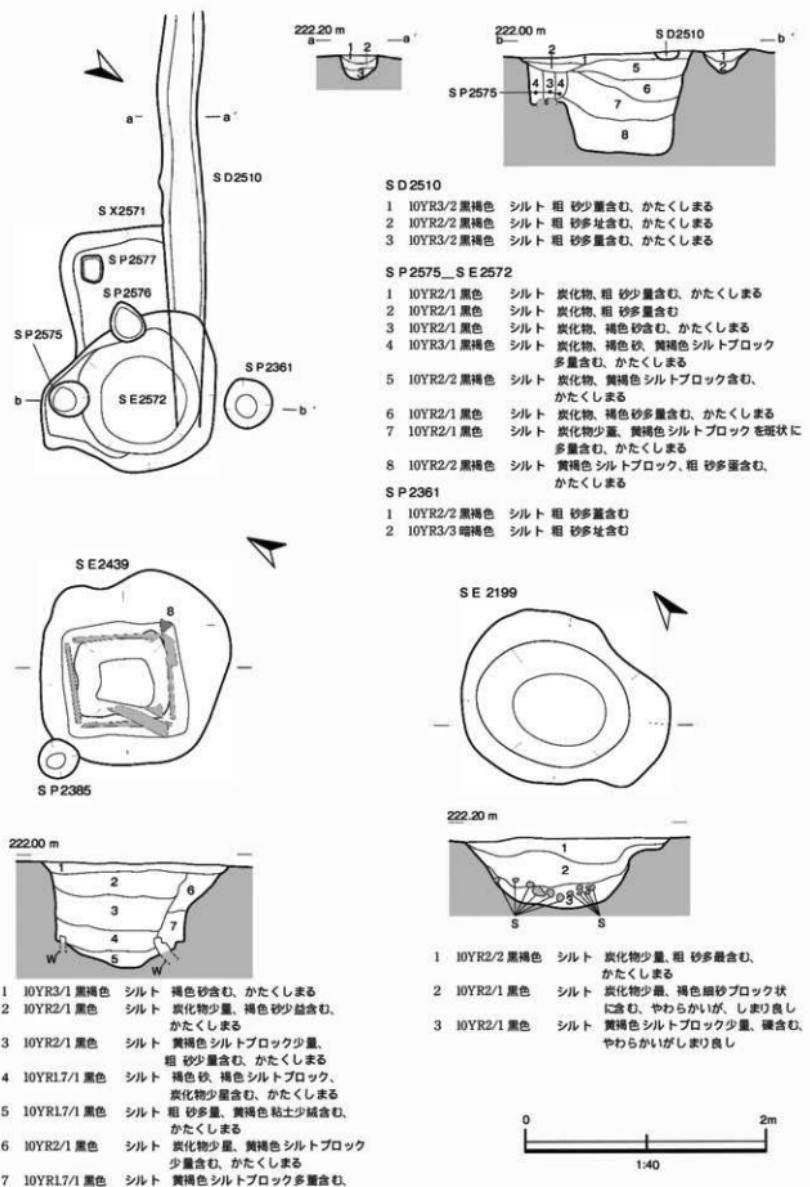


第14図 SE2093・2094・2126

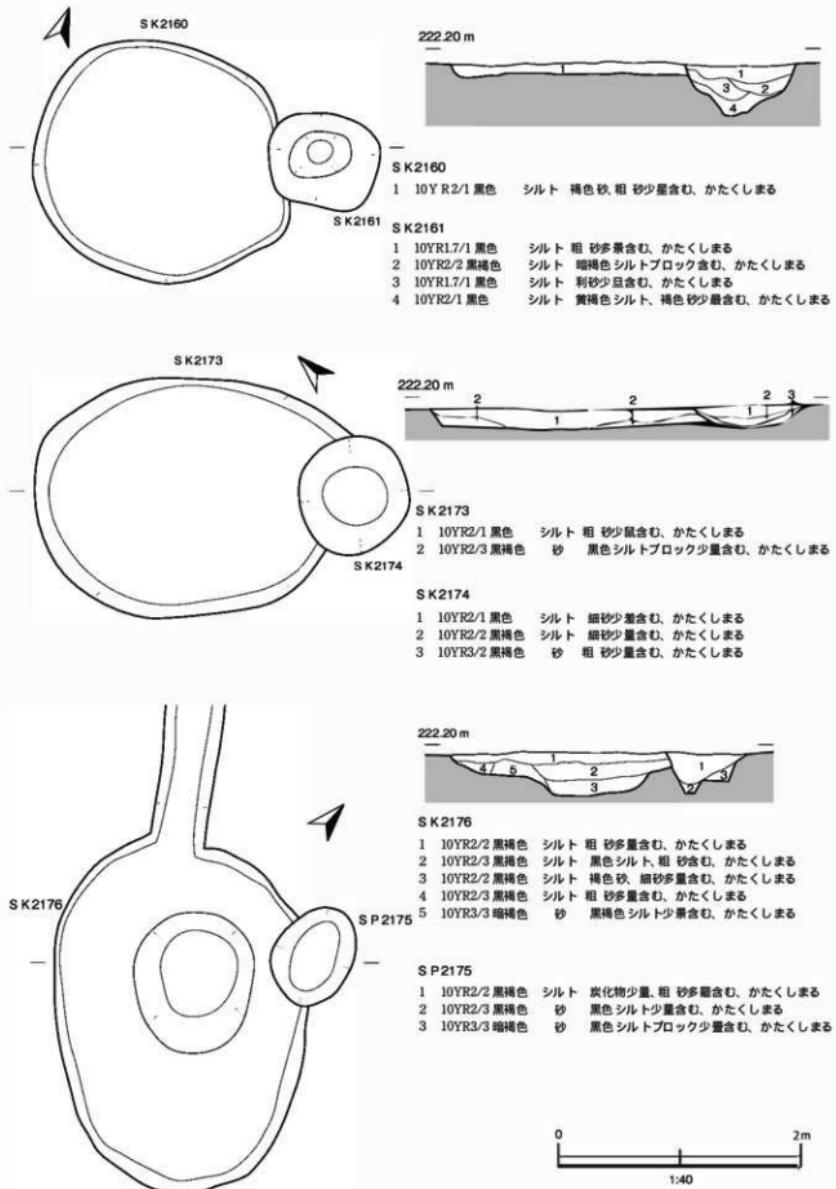


第15図 SE2420・SX2369-2452

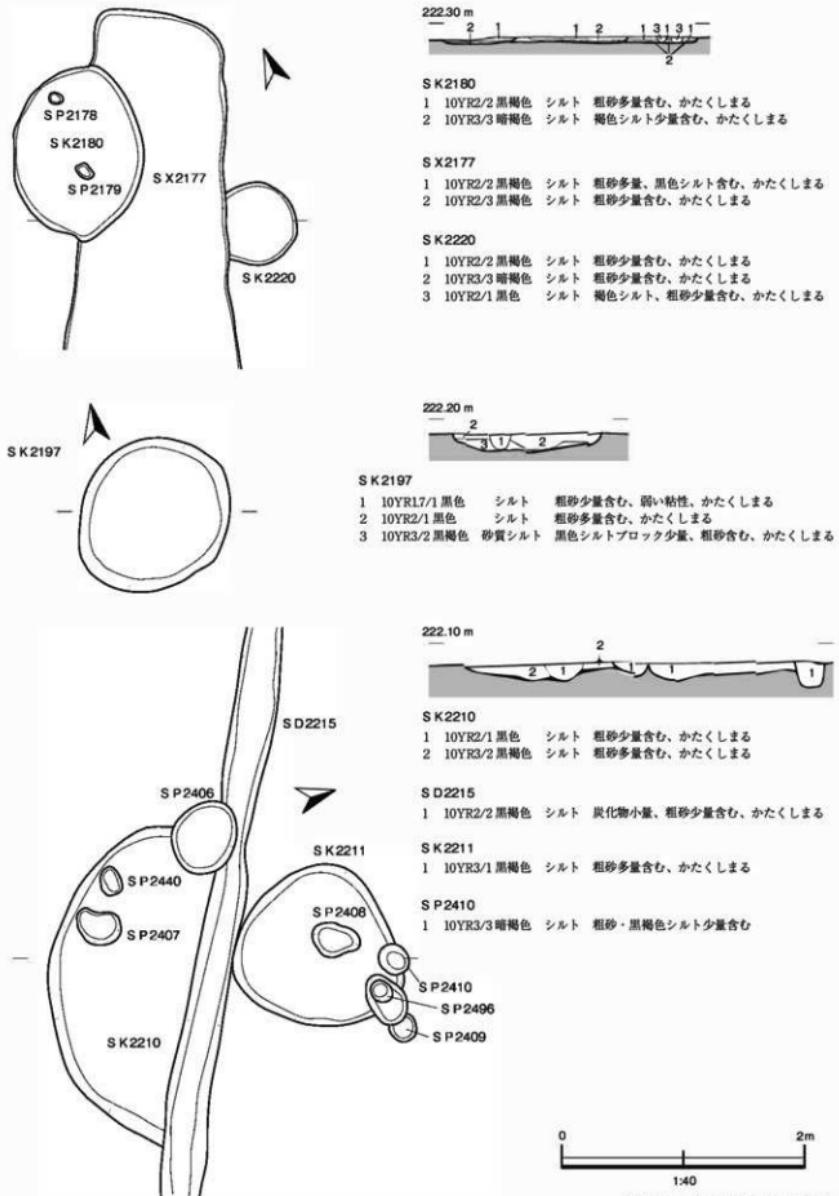
III 調査の成果



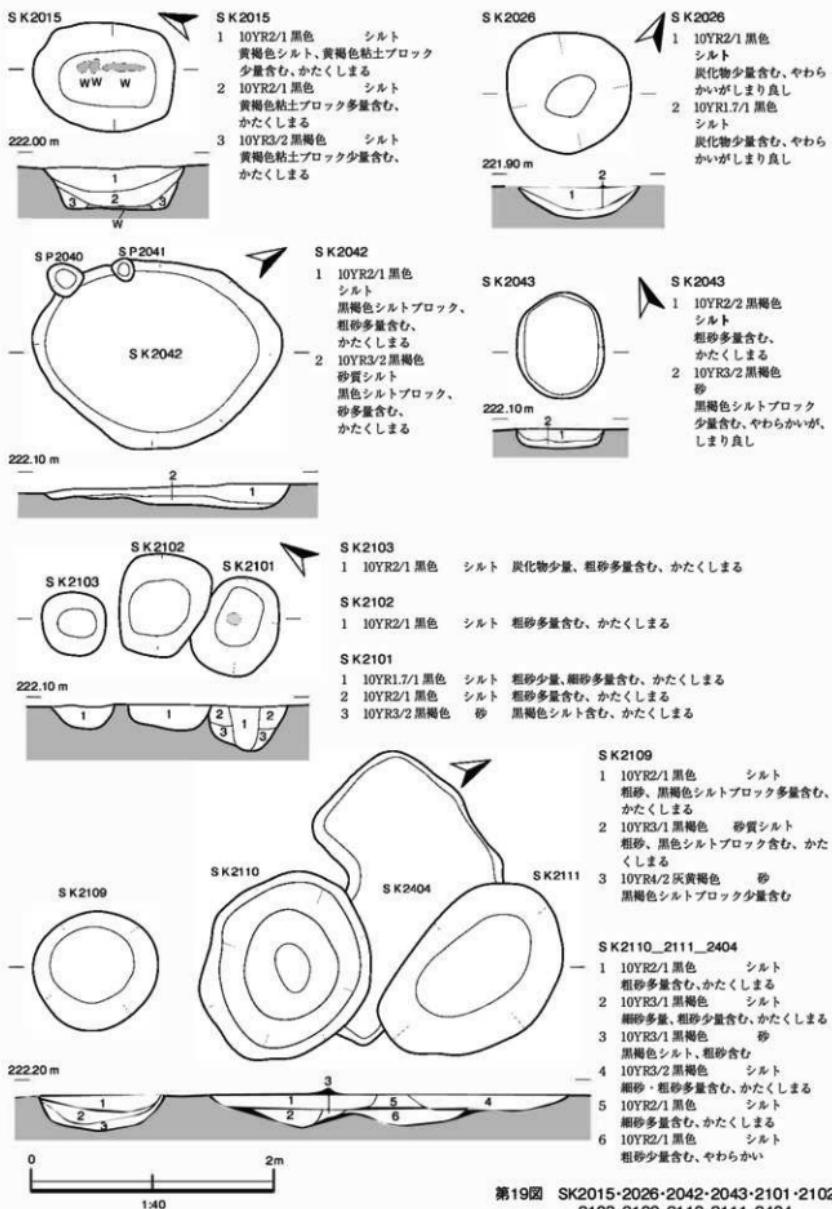
第16図 SE2572・2199・2439



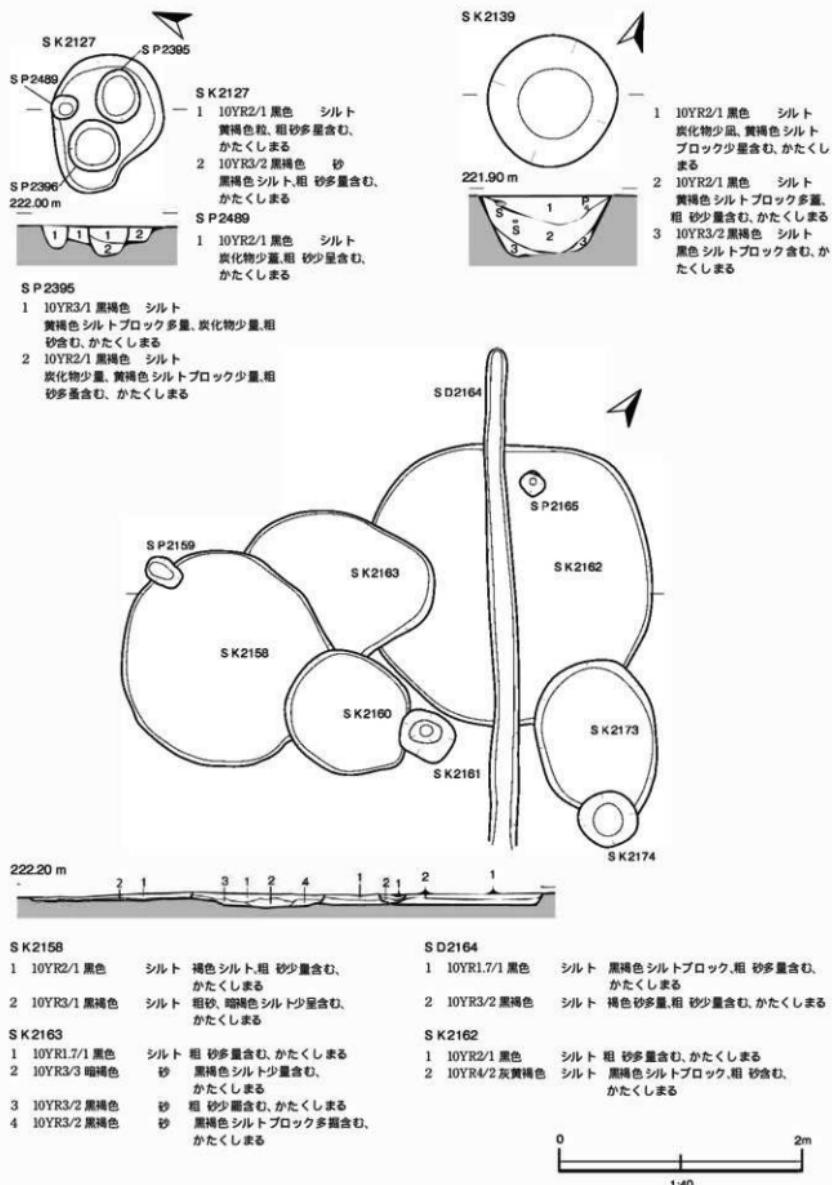
第17図 SK2160-2173-2175



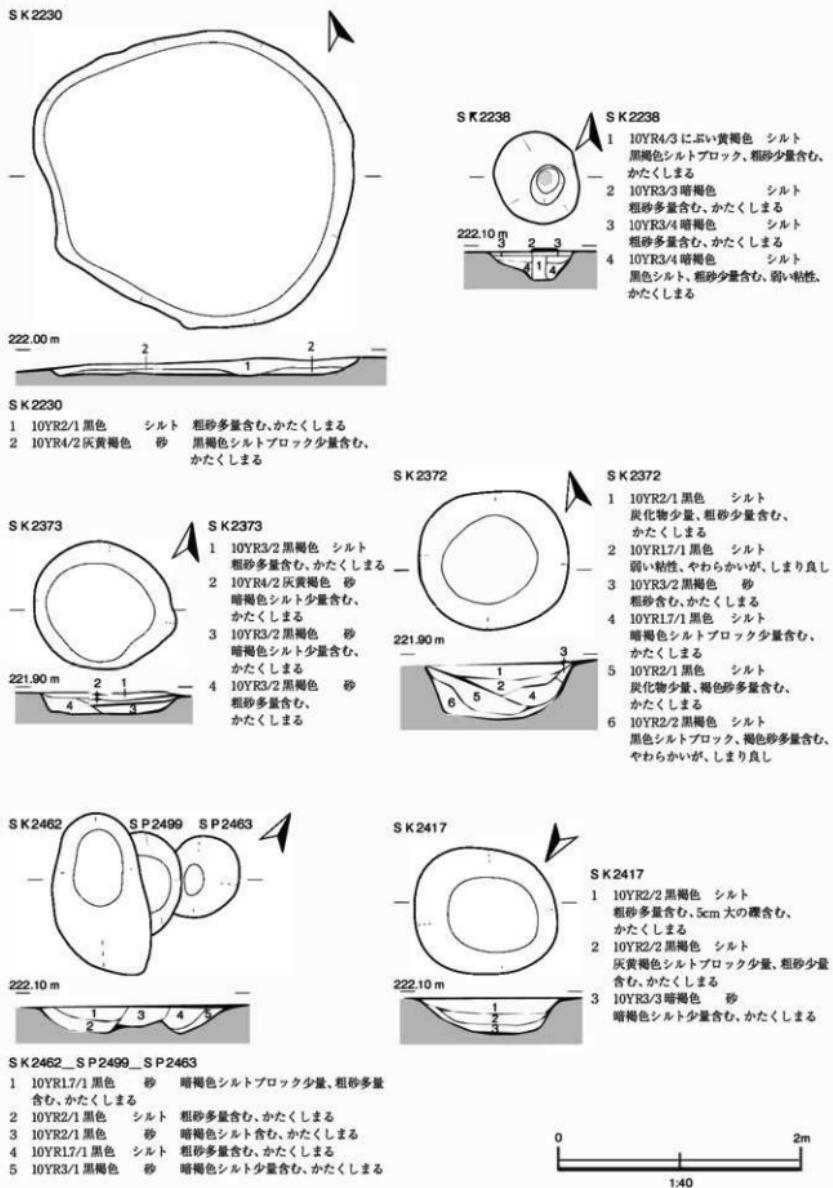
第18図 SK2180・2197・2210

第19図 SK2015-2026-2042-2043-2101-2102
2103-2109-2110-2111-2404

III 調査の成果

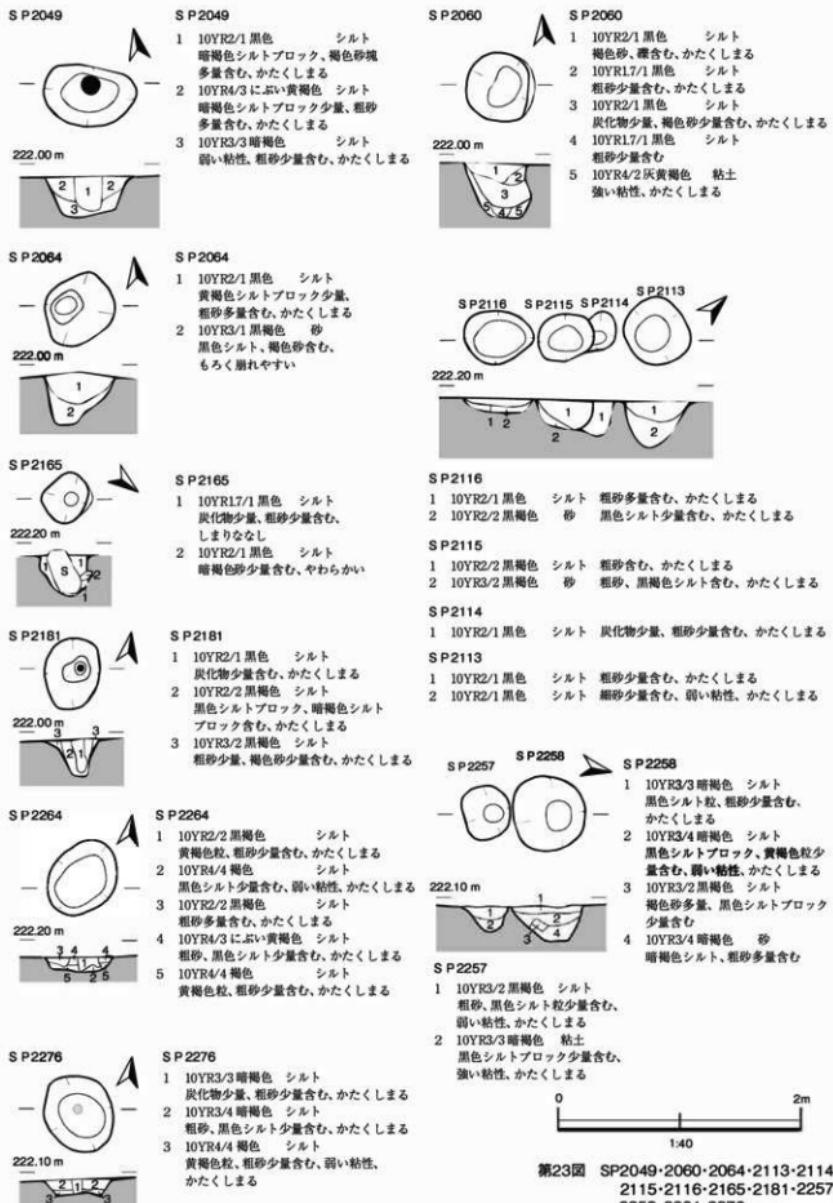


第20図 SK2127-2139-2158-2160-2162-2163-2173



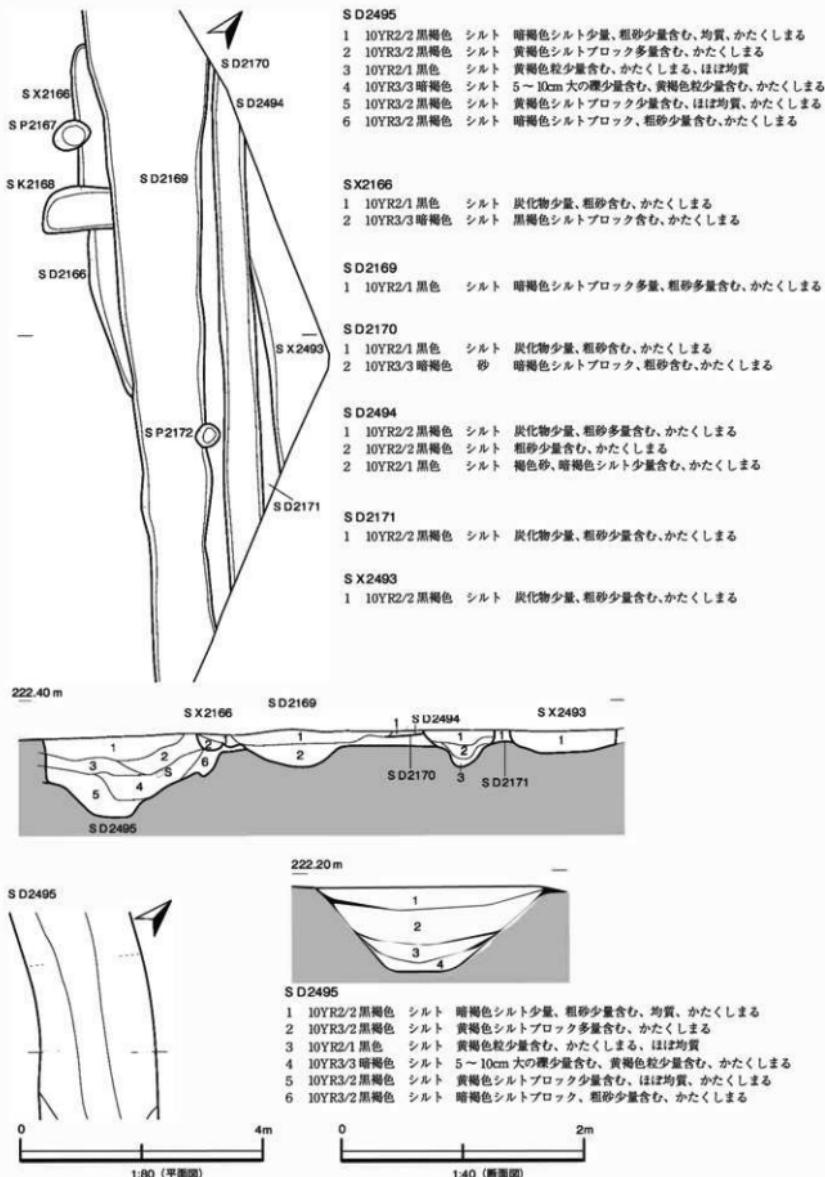
第21図 SK2230・2238・2372・2373・2417・2462

第22図 SP2316・2318・2501・2519・2521
2538・2560・2561・2563・2564

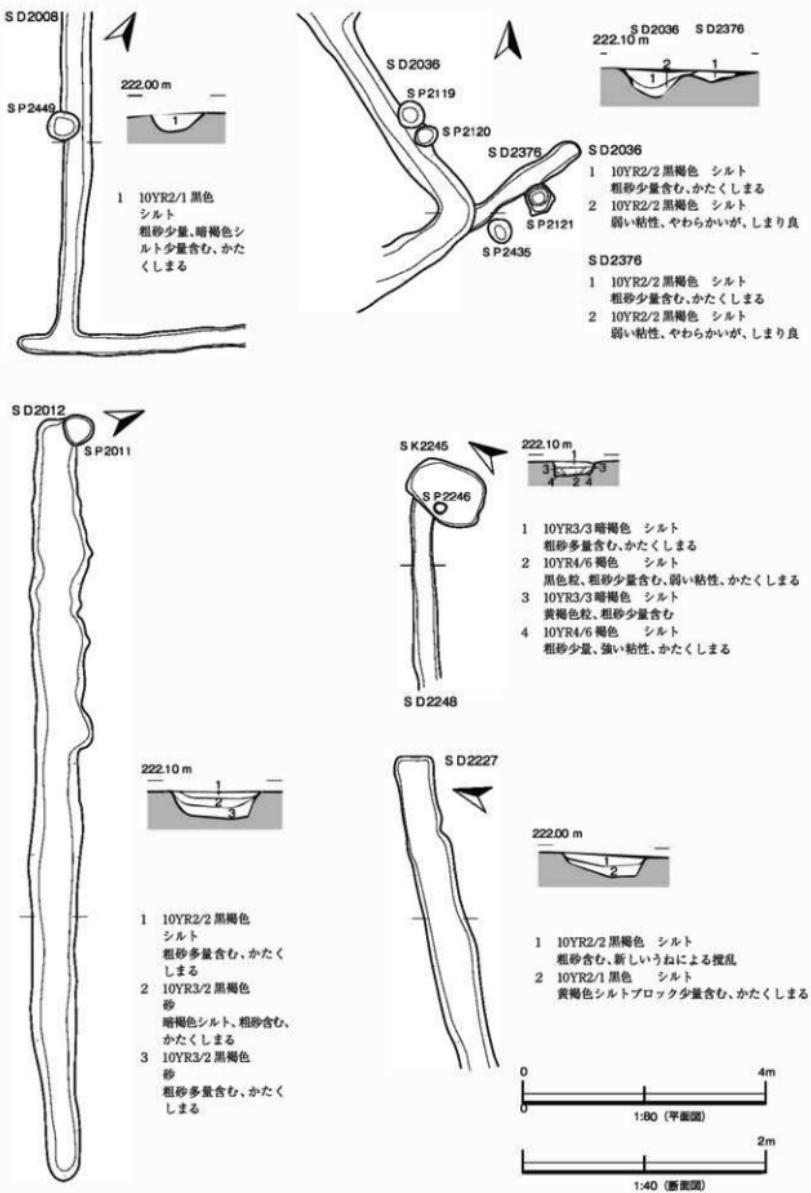


第23図 SP2049・2060・2064・2113・2114
2115・2116・2165・2181・2257
2258・2264・2276

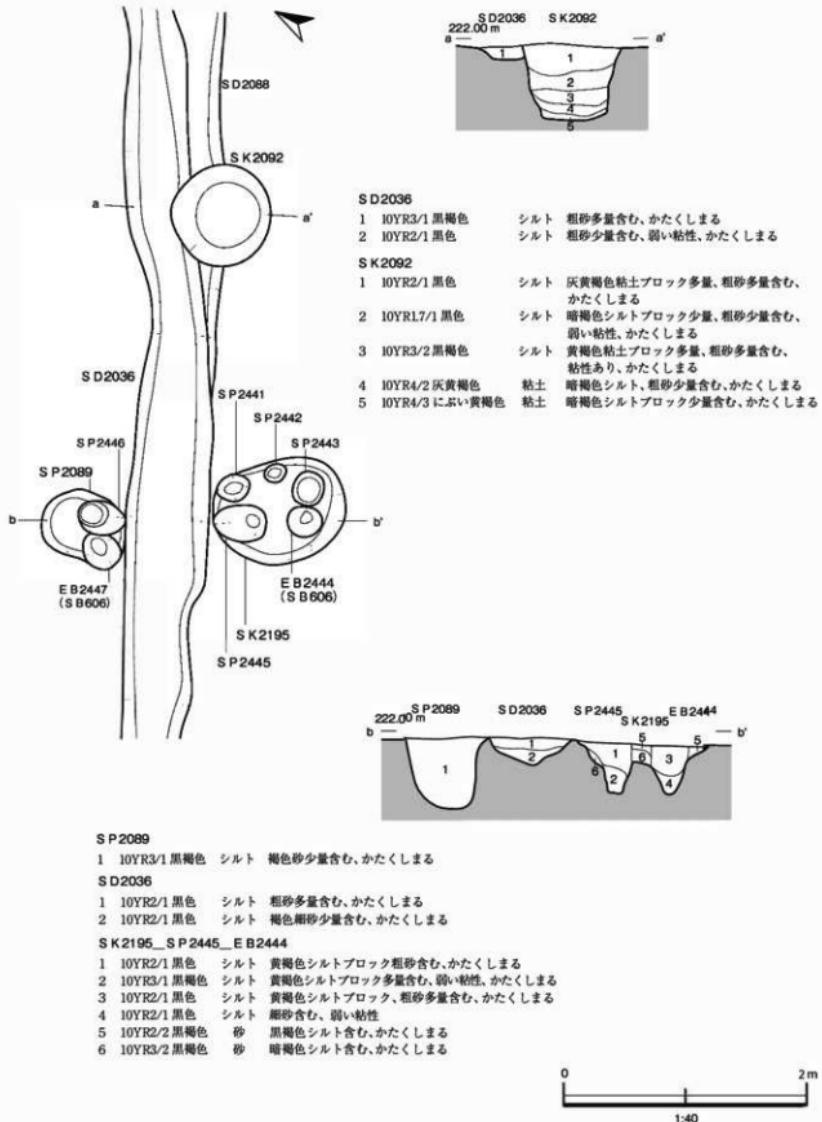
III 調査の成果



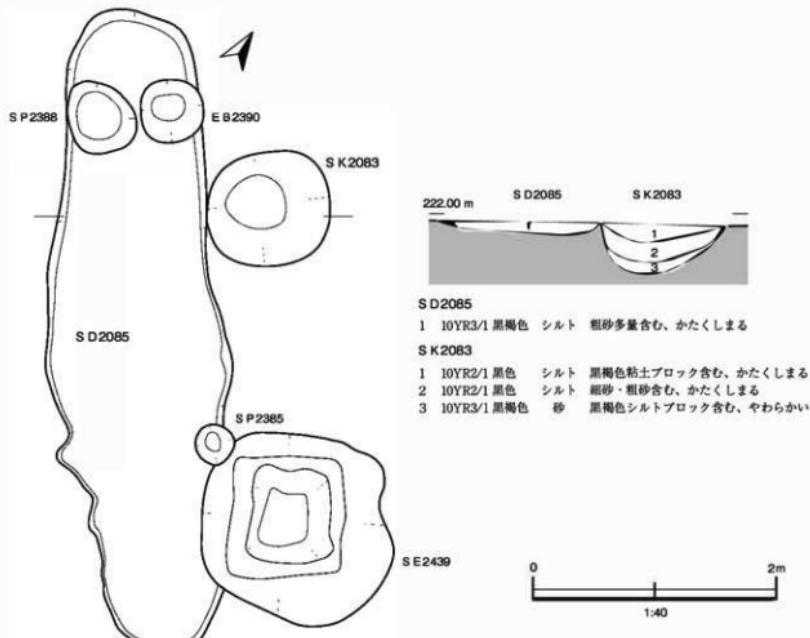
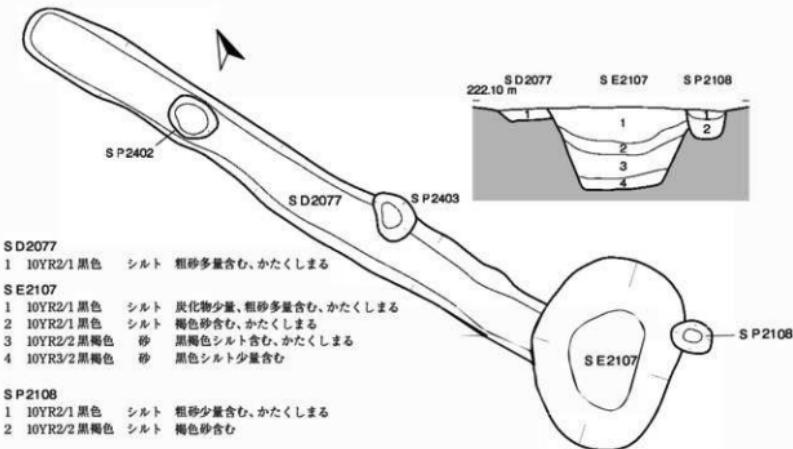
第24図 SD2495-2169-2170-2171-2494

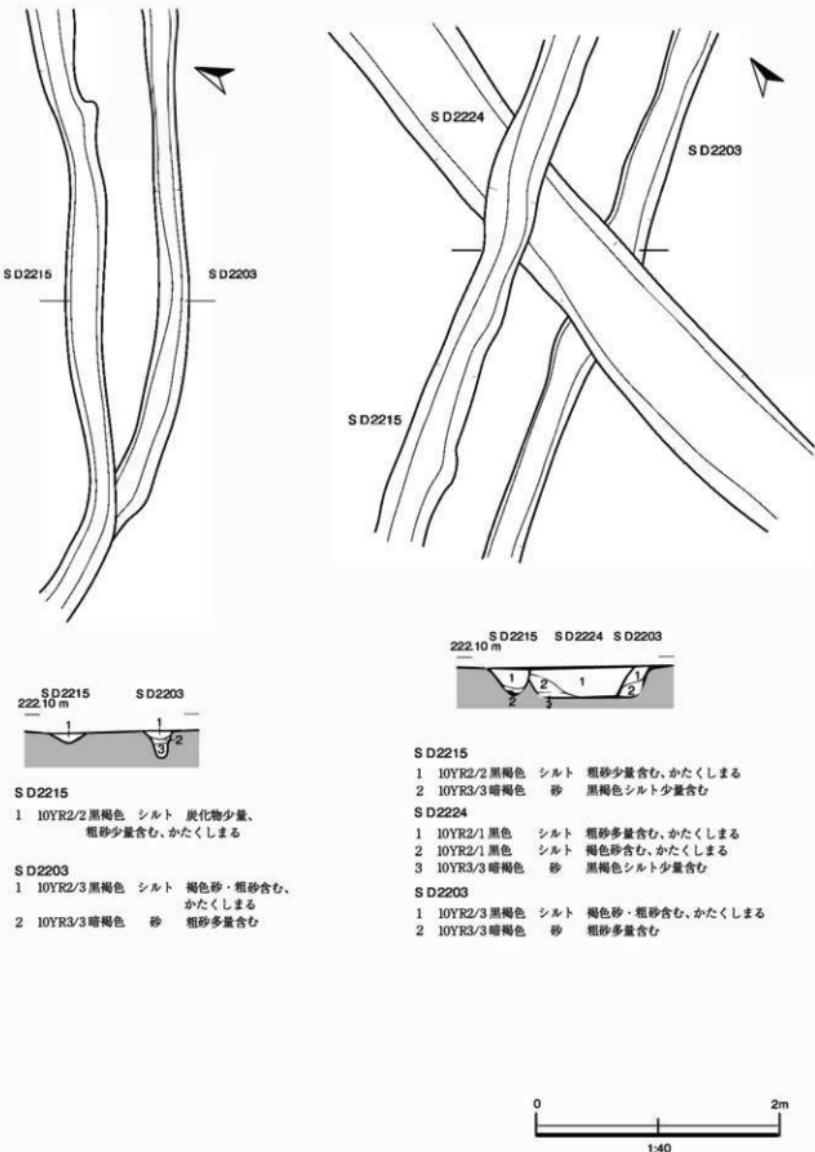


第25図 SD2008・2012・2036・2448・2227

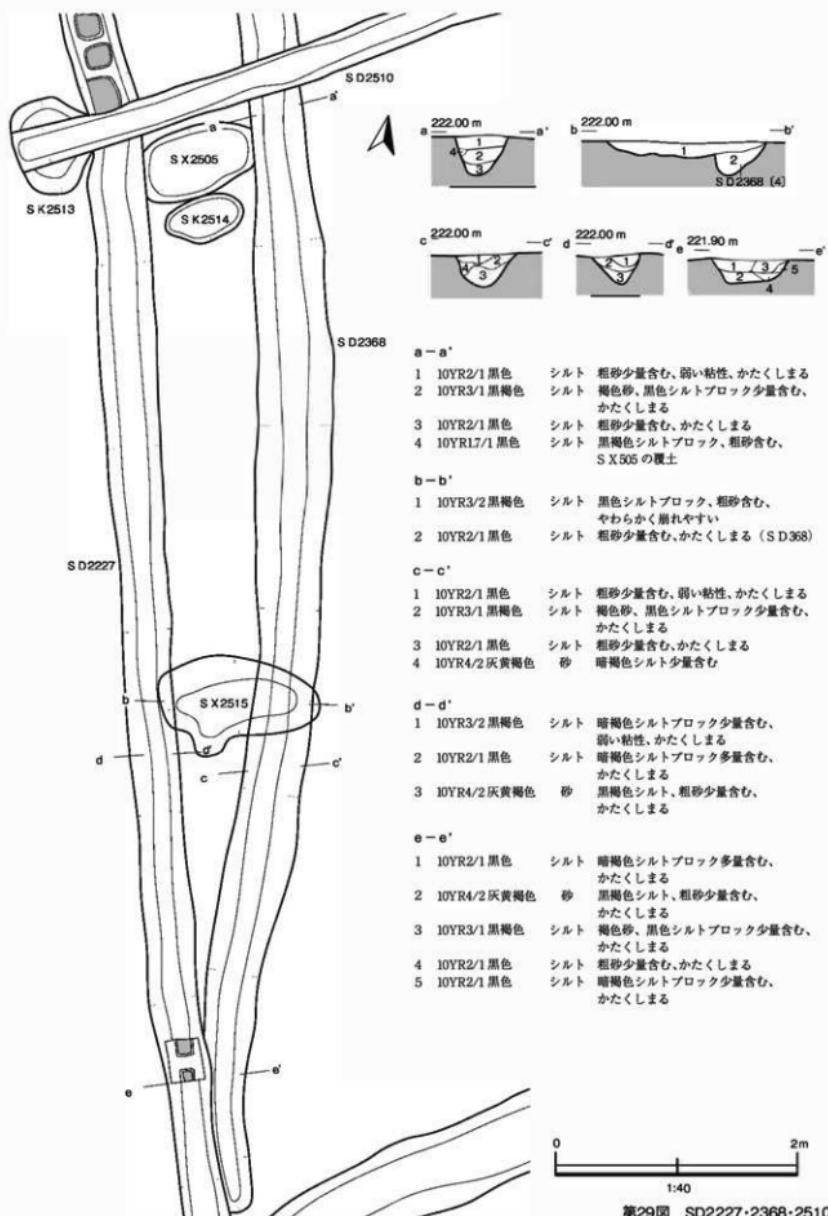


第26図 SD2036-SK2092-2195

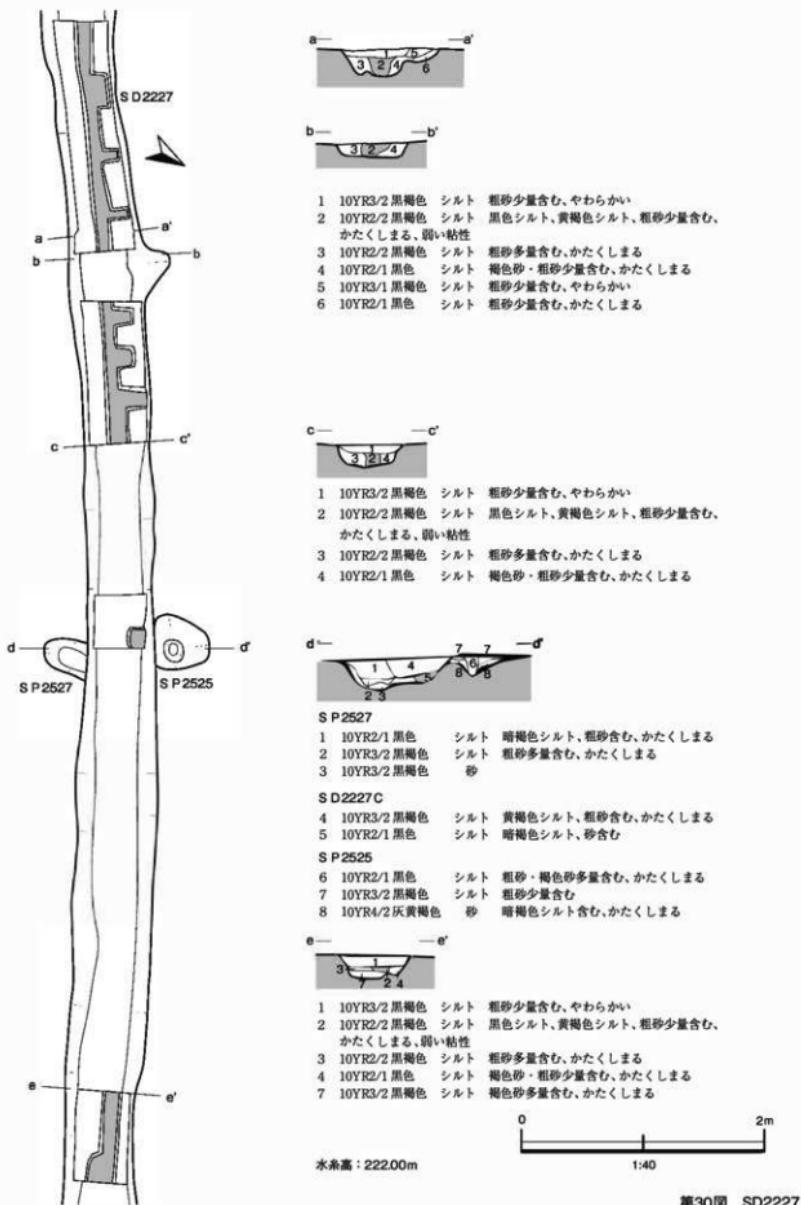
第27図 SD2077・SE2107
SD2085・SK2083



第28図 SD2203・2215・2224



第29図 SD2227・2368・2510



2 A 区の遺物

A 区から出土した遺物は、井戸枠等の木製品を除くと、整理箱に 1 箱程度である。遺物量の少なさは、遺跡の主体となる時期と性格によるものと推測される。遺物の種別は、縄文土器・土師器・須恵器・中世陶器・近世磁器・木製品・古銭等多岐にわたる。

A 古代の遺物

土師器・須恵器があり、遺構内からの出土も見られるが、直接遺構の時期を示すものではないと考えられる。すべて破片資料のため不明な点が多く、帰属時期は 8 世紀後半から 9 世紀中頃までの範囲でとらえておく。

1 は SK 2056 出土の土師器である。体部は僅かに内湾する。内面は口縁部付近に横方向のミガキ、体部には縱方向のミガキが施され、黒色処理される。

2 の須恵器は、体部が大きく開き、口縁部は強く引き出され外反する。外面にロクロ目が顕著に見られる。S D 2169 の底面から出土している。3 は S D 2170 から出土した、ヘラ切りの壺の底部である。切り離し後のナデ調整が認められる。胎土には長石粒が多く混入する。4 は S D 2171 出土の須恵器有台壺である。底部は回転糸切りによるもので、切り離し後は無調整である。底径は比較的大きく、98mm を測る。体部は直線的に立ち上がる。5 は S X 2452 から出土した須恵器壺の体部である。外面の一部には灰被りが見られる。外面は条線状タタキ、内面は同心円のアテ痕が残るが、痕跡はいずれも浅い。13 は土師器無台壺の底部である。切り離しは回転糸切りによる。底部から体部の立ち上がりにかけて肥厚する。胎土には長石粒・金雲母が混入する。焼成は良くなく、軟質である。

その他に、S D 2036 から出土した横瓶の体部と考えられる破片、S P 2113・S D 2494 出土の須恵器壺片、S D 2495・S X 2369 出土の須恵器無台壺片などがある。

B 中世の遺物

出土点数は極めて少ない。そのほとんどが壺器系陶器の鉢・壺・甕等である。

6 は E B 2141 (S B 2607) から出土した、壺器系陶器壺の口縁部である。頸部は短く、大きく外反する。やや

丸味を持った端部は小さく引き出される。先端部近くには、一条の深い沈線が認められる。外面には自然釉が付着する。E B 2141 からは同一個体と考えられる壺の肩部片が出土している。また E B 2618 (S B 2608) から出土した破片と接合している。口縁部の形態から、13世紀代の所産と考えられる。8 は S E 2439・S D 2036・2495 出土の壺器系陶器片口鉢である。体部は僅かに外反しながら立上り、口縁部に至る。口縁部は直線的で、端部に丸味を持つ。片口は幅 4 センチあり、親指と人差し指で軽くつまみ出された状態である。内面に鉢目は無く、横方向のナデが認められる。外面の体部下半には、沈線状の粘土の寄りがあり、この点を境に傾きが僅かに変化する。胎土には長石粒等が多量に混入し、粗い印象を受ける。表面は黒褐色に発色するが、内部は赤褐色である。在地窯産の可能性が高く、時期は 13 世紀代と考えられる。9 も壺器系陶器の鉢で、S P 2167 から出土している。外面は体部下半で傾きを変え、口縁部に向かって大きく開く。内面に鉢目は無く、横方向のナデが認められる。内面底部は使い込まれて摩滅し、ほぼ底が抜けた状態である。器厚は 15~20mm である。胎土には石英・長石等多量の鉱物を混入する。焼成は良好で硬く焼き締まり、明褐色に発色する。13 世紀代の在地窯産と考えられる。10 も壺器系陶器の鉢である。底部が剥離している。内面に鉢目は無く、粗雑な胎土のせいで、縫が立った状態である。

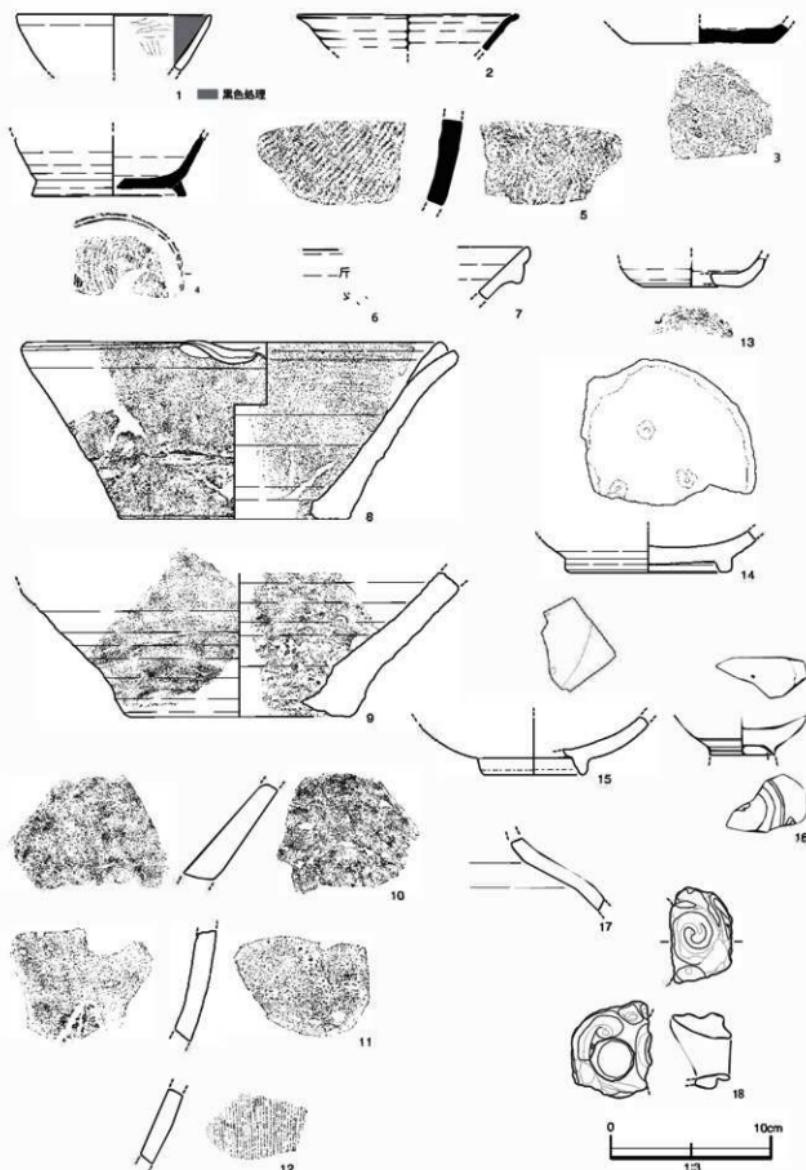
その他に、S P 2408 から壺器系陶器壺、S D 2495 から壺器系陶器の壺と鉢が出土している。

C その他の遺物

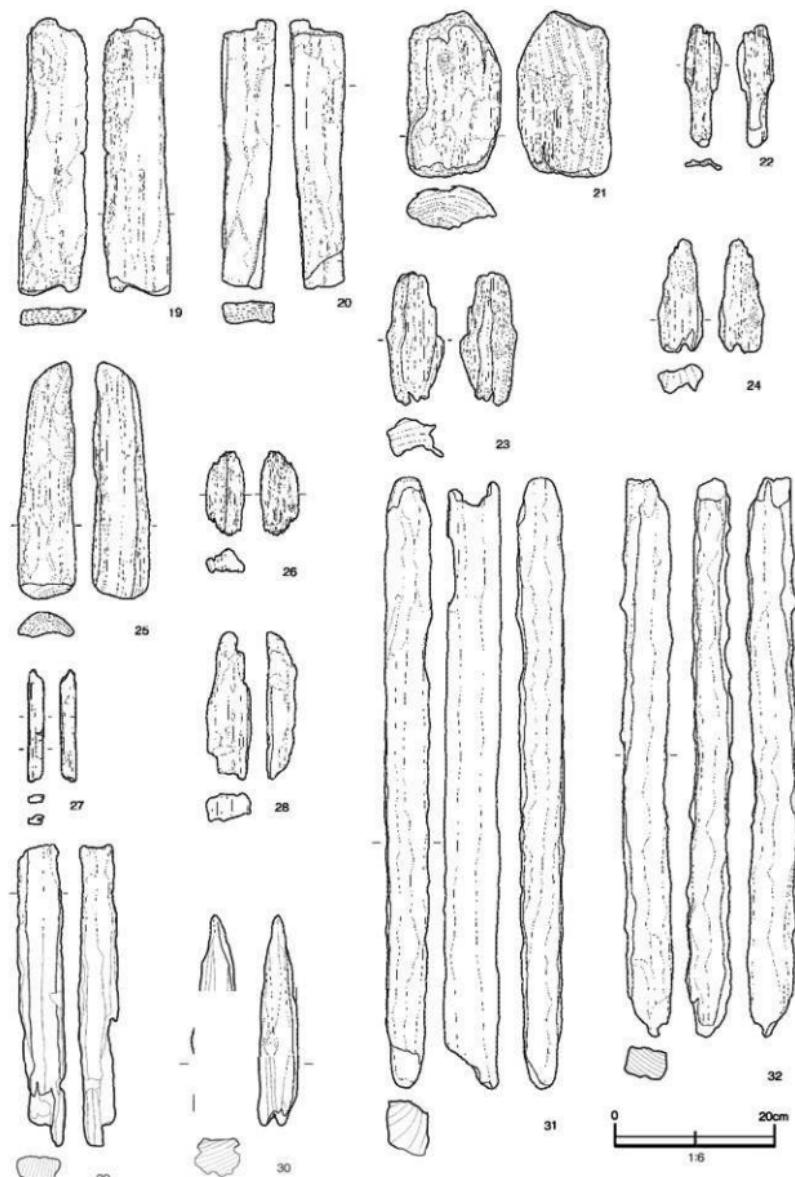
その他、縄文土器・近世陶器・磁器・木製品・古銭が出土している。

7 は S D 2494 から出土した無釉の鉢である。口縁部は、上端部と下端部を引き出し、端面に 1 条の沈線を入れたものである。17 世紀代と考えられる。14 は見込に 3 個の目痕を有する。内面は鉄釉、外面は無釉である。15・16 は磁器の碗である。底部は肥厚する。15 の見込には目痕が認められる。17 は内外面とも鉄釉が施釉された甕と考えられる。18 は縄文中期の深鉢の口縁部に付けられた取っ手である。39~50 は S X 2001 出土の桶で、竹製の籠を外して展開したものである。

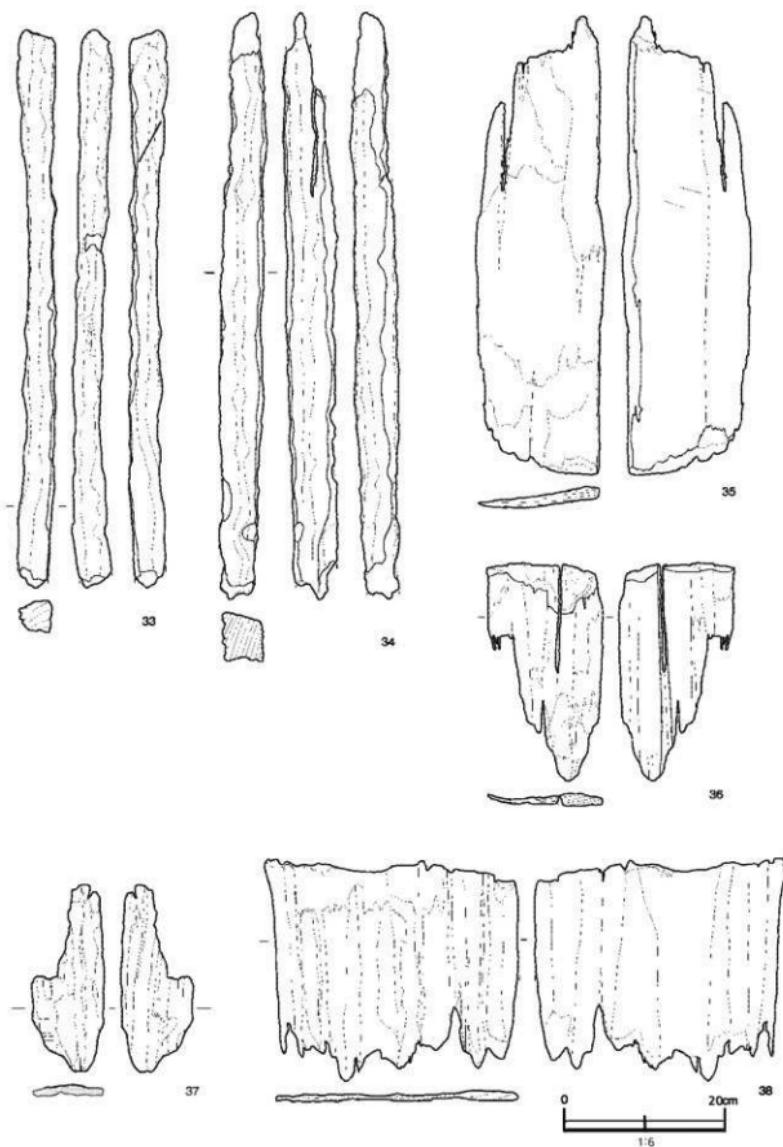
III 調査の成果



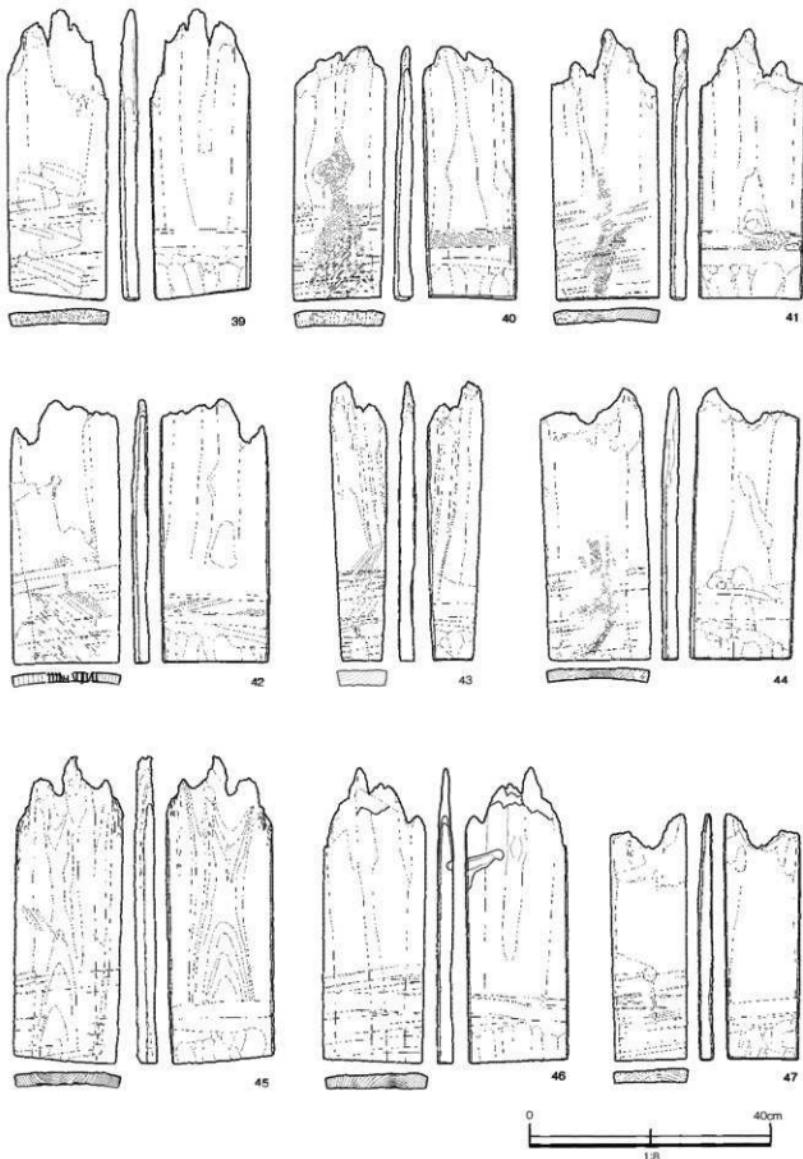
第31図 A区井戸跡・土坑他出土遺物



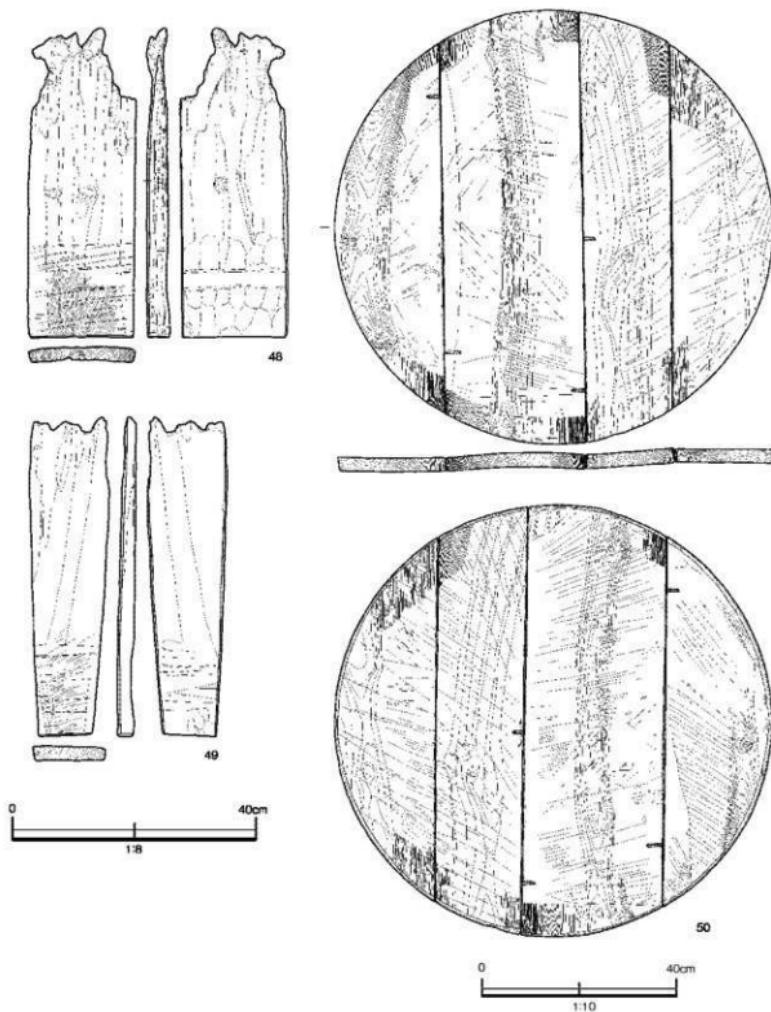
第32図 A区柱穴礎板・SE2439井戸跡部材



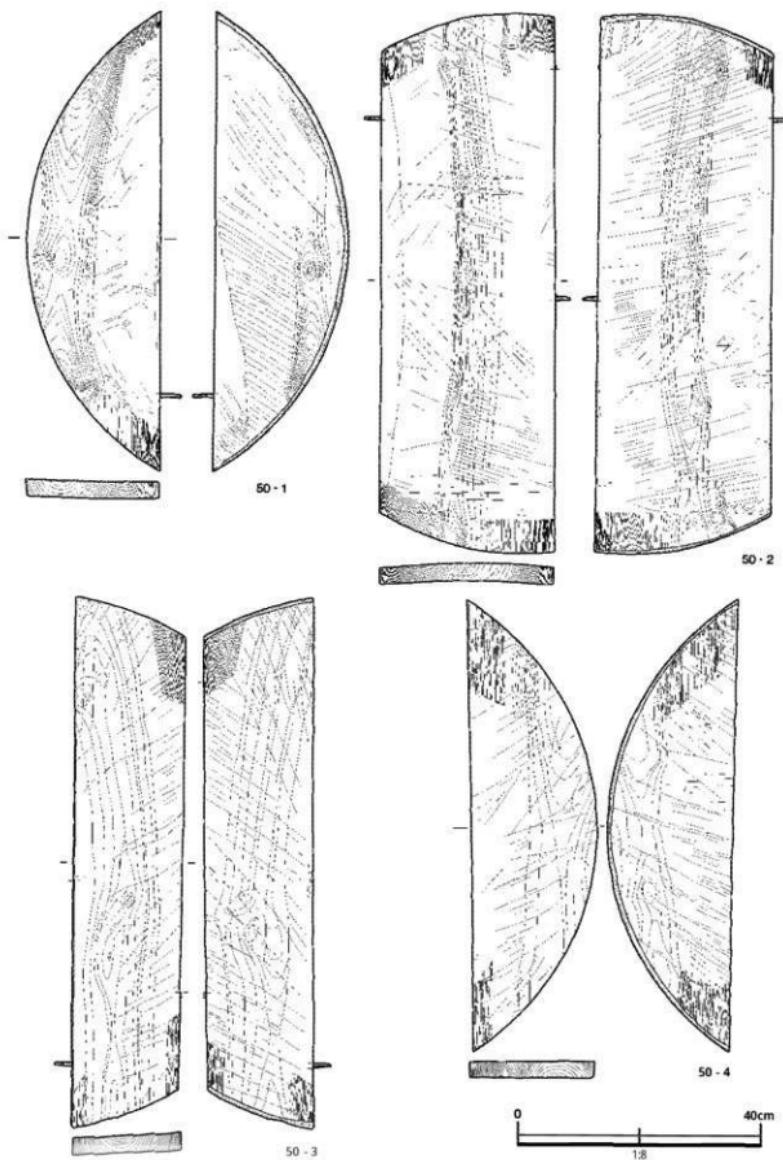
第33図 SE2439井戸跡部材



第34図 SX2001出土桶(1)



第35図 SX2001出土桶(2)



第36図 SX2001出土桶(3)

3 B 区の遺構

A 遺構の分布

B区の遺構検出面は、現地表より約30~50cm掘り下げた地点で、標高は約220~221mである。中央から北側にかけて高く、南側は上無川に向かって低くなる。標高差は約1mを測る。遺構は221mライン上に集中し、南側の傾斜地では希薄になる。検出面の土質は、北東部で粘性の強い土が見られ、それ以外は砂質である。

B区で検出された遺構は、竪穴状遺構、焼土遺構、土坑、柱穴、溝跡、川跡等、345基である。

B 竪穴状遺構

平面形が方形で、床面が平坦に掘り込まれ、焼が焼けていない遺構を竪穴状遺構とした。本調査区からは、4基検出している。

S X2709 (第42図)

調査区北西部の59~65グリッドに位置する。平面形は、東西2.9m、南北5.0mの南北に長い方形である。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは20~24cmを測る。南北軸は北から27°西へ傾く。壁の立ち上がりは緩く、40°程である。埋土上層には炭化物を含み、下層は暗褐色土を含む粗砂である。北辺はS D2710によって壊される。遺物は出土していない。

S X2886 (第44図)

調査区中央の北側、68~61グリッドに位置する。平面形は、東西3.4m、南北3.8mの方形である。深さは、約20cmを測る。床面は平坦である。壁の立ち上がりは20°~30°であり、北辺が幾分緩やかである。南北軸は北から西へ28°傾く。北西部に焼土の広がりを確認したが、カマドは検出できなかった。

床面の南側にS P3022、北西にS P3023を検出した。S P3022は径40cmの円形で深さは17cmである。S P3023は径53cmの円形で深さは27cmである。この2基の柱穴は、S X2886に伴う遺構と考えられる。東側にあるS P2887と2888は、S X2886の上から掘り込まれたものである。

須恵器の壺(115)と土師器の壺(117・118)2点が出土している。

S X2890 (第44図)

調査区中央の北側、67~61グリッドに位置する。平面形は、東西2.4m、南北3.0mの南北に長い方形である。床面には僅かな凹凸があり、深さは、20~24cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩く、40°程である。埋土には、炭化物や焼土の塊を多量に含む。S K2891と2892は、S X2890が埋まっているから掘られている。須恵器の壺(116)が出土している。

S X2943 (第46図)

調査区中央の64~59グリッドに位置する。平面形は、南辺西側に凹凸があるものの、ほぼ方形を呈し、東西4.6m、南北約4.8mを測る。深さは約16cmあり、床面は平坦である。壁の立上りは25°前後である。南北軸は北から21°西へ傾く。埋土には焼土と炭化物を多く含む。特に西辺の南寄りには、焼土と炭化物を多量に含む部分を確認したが、カマドは検出されなかった。床面の一部に、焼土と炭化物を混入する貼り床状の粘土が認められた。S K2944、2948、S P2946、2949などは、S X2943の上から掘り込まれた遺構である。遺物は出土していない。

C 焼土遺構

平面形が方形または不整形で、埋土に焼土を含み、あるいは床面が焼けている遺構を焼土遺構とした。本調査区からは、20基検出している。規模には、大小が見られる。遺構検出面が粘土質の部分には無く、北西部と南東部の砂質の地区にまとまって分布する。

S X2711 (第55図)

調査区北西端の58~67~59~66グリッドに位置する。西側はS D2710によって切られており、全形は不明である。残存する規模は、東西1m、南北7.2mである。深さは、10~16cmを測り、南側がやや浅くなる。埋土には少量の焼土を含む。床面が焼け、部分的に赤黒くなっている。

S X2714 (第43図)

調査区北西部の60~66~61~64グリッドに位置する。規模は、東西1~2.5m、南北9.5mである。平面形は、基本的に南北に長い方形を呈するが、西辺と東辺に窪みがあり、部分的に幅が狭くなる。あるいは類似する遺構が重複している可能性も考えられるが、検出状況と断面

観察からは、明確な違いを見出せなかった。床面は平坦で、深さは約20cmである。埋土には、焼土塊や焼土粒を多量に含んでいる。床面は、ほぼ全面が焼けた状態である。遺物は出土していない。

類似する遺構にS X2713、2715がある。

S X2756 (第42図)

調査区北西部の61-64グリッドに位置する。東西4m、南北3.6mまで検出した。平面形は、南側が狭くなる方形を呈する。床面には凹凸があることから、深さは20~40cmを測る。東辺には、幅約80cm、深さ40cm程の溝状の掘り込みがある。床面は全面が焼けた状態であり、特に溝状の掘り込み部分は強く焼けている。埋土には焼土粒が多量に含まれる。遺物は出土していない。

S X2920 (第45図)

調査区南西部の66-55グリッドに位置する。平面形は、北東部と南東部に角を持ち、方形状を呈するが、西側は不整形となる。規模は、東西9.8m、南北の最大幅5.8m、最小幅6.5mである。深さは4cm程しかない。床面はほぼ平坦で、南側を中心に焼けている。埋土は多量の焼土を含む砂である。遺物は出土していない。

S X2921 (第45図)

S X2920の北に隣接し、66-56グリッドに位置する。平面形は、東西2.8m、南北2.6mの方形である。南北軸は北から38°西に傾く。深さは約20cmあり、床面は平坦である。埋土には焼土を少量含む。東側の床面が僅かに焼けた状態である。遺物は出土していない。

類似する遺構にS X3001、S X3002、S X3012、S X3015、S X3045がある。

S X2922 (第45図)

S X2921の北に隣接する。66-56グリッドに位置する。平面形は、東西5.6m、南北1.1~1.4mを測る。東西に長い溝状の遺構である。南北軸は、北から40°東に傾く。壁は垂直に近い角度で掘り込まれ、深さは約20cmである。平坦な床面は、北西部に焼けた痕跡が見られる。埋土の2層と5層には、焼土塊を多量に含む。遺物は出土していない。

類似する遺構にS X3008、S X3010、S X3014、がある。

S X3003 (第45図)

調査区南西部の69-54グリッドに位置する。平面形

は、東西1.6~1.8m、南北6.0mの長楕円形である。南北軸は北から25°西に傾く。床面は北側が僅かに低くなり、南西辺の一部も摺鉢状に落ちる。深さは、浅い所で6cm、深いところで22cmである。北辺の狭い範囲が焼けている。埋土には多量の焼土を含む。1点の土師器片が出土している。

S X3041・3042 (第49図)

調査区西部の、60-61-61-63グリッドで、2基が併行して検出された。平面形は南北に長い方形で、東西は2基とも2.6m、南北は北側を未検出であるが、3041が5m、3042が5.8mまで確認している。南北軸は3041が北から17°、3042が15°西に傾く。深さは共に6cm前後である。埋土には焼土粒を少量含む。3041の床面は、西側三分の二程の範囲で焼けた痕跡が認められるが、3042では数か所に留まる。どちらからも遺物は出土していない。

類似する遺構にS X3009がある。

S X3019 (第48図)

調査区南部の65-54グリッドに位置する。平面形は、長軸2.2m、短軸0.8mの楕円形を呈する。深さは5cm程しかないが、埋土には多量の焼土と炭化物を含む。

類似する遺構には、S 2841、S X3018、S X3020、S X3032などがあり、S X2859、S X3025のように深さが50cmを超えるタイプもある。

D 河 川 跡

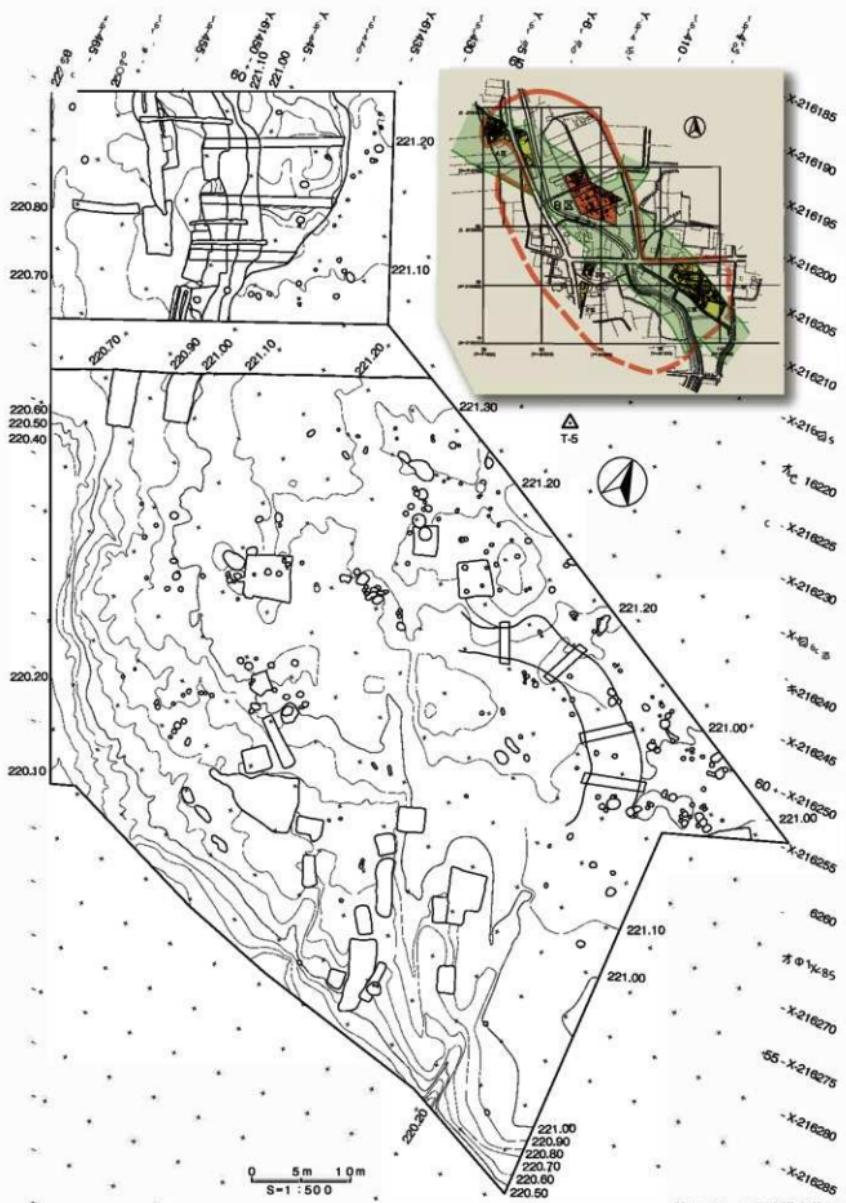
本調査区で2条の河川跡を検出している。部分的に確認されたもので、全形は不明である。

S G2755 (第43図)

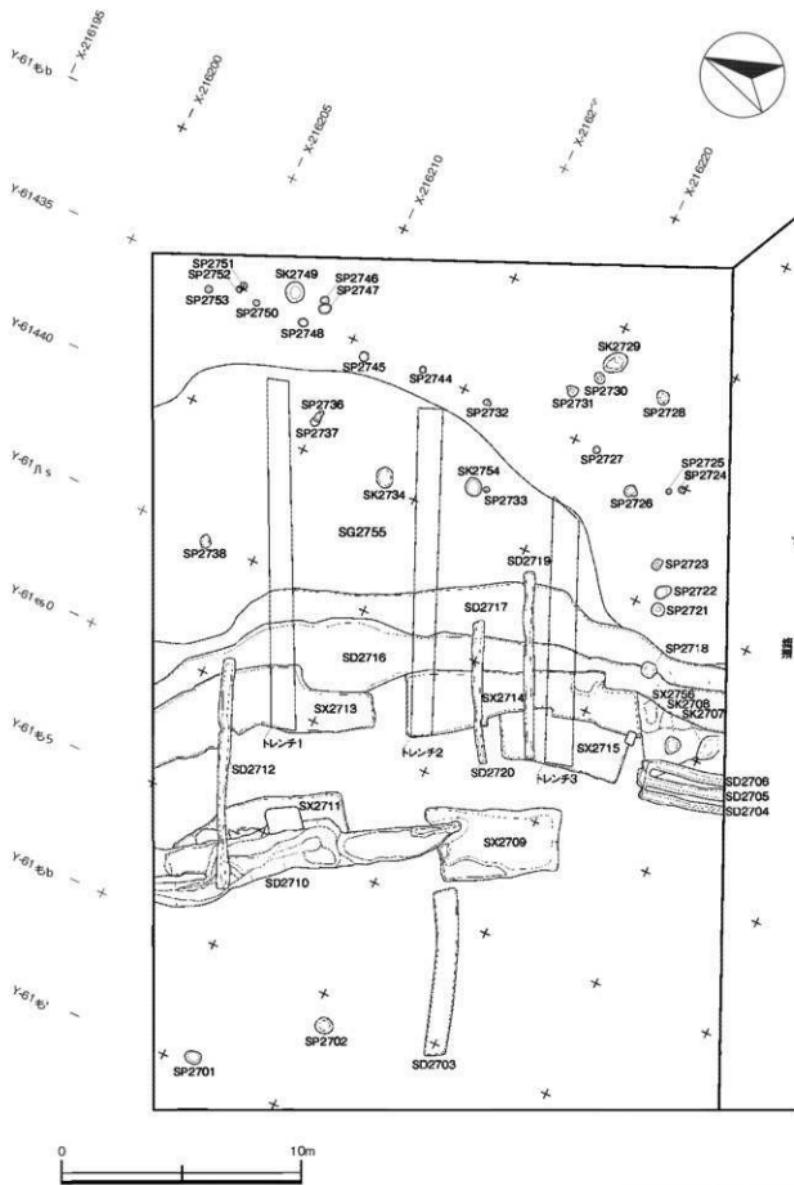
調査区北西部の61-69-61-65グリッドで検出された。南北方向の長さは約21m、最大幅は9mである。深さは、最深部で1.1mを測る。埋土は炭化物や焼土を含まない黒褐色の砂とシルトで、自然堆積である。須恵器蓋(55)、坏(56-59)が出土している。

S G3026

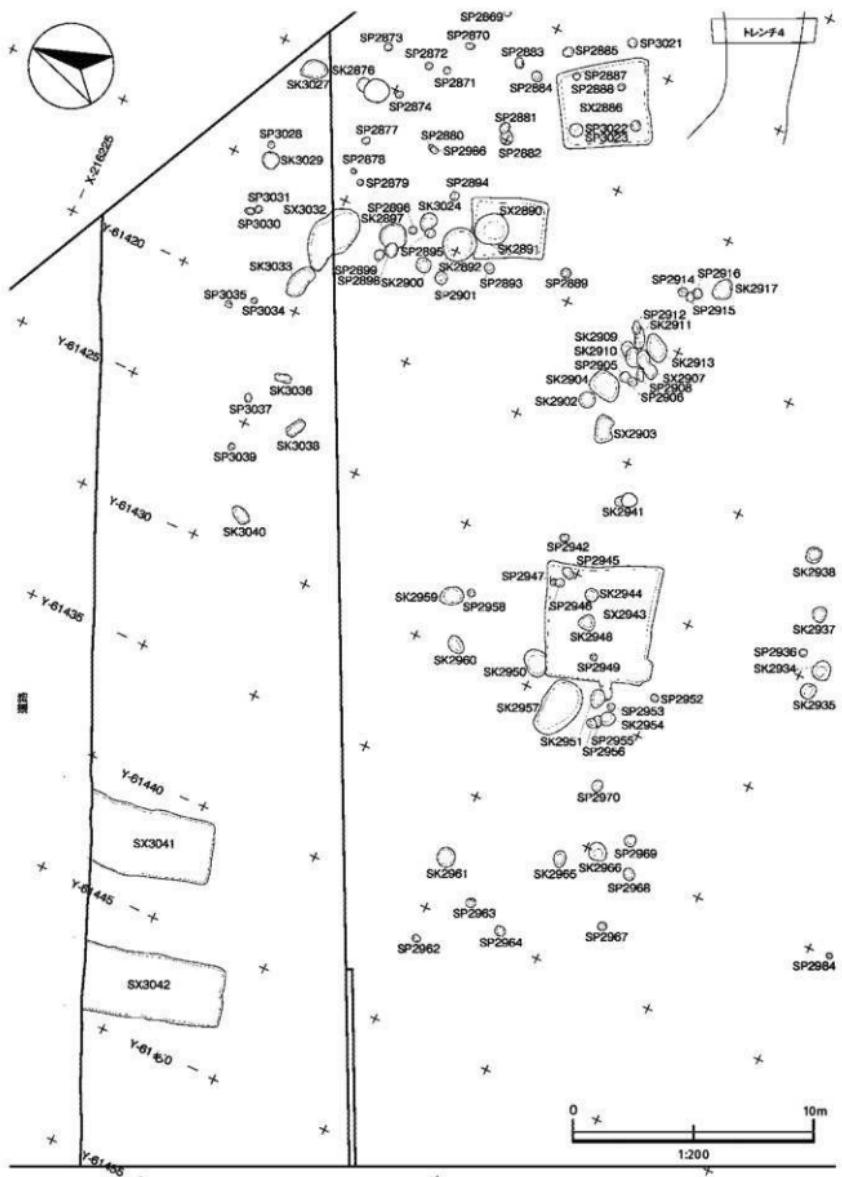
調査区北西の69-60-72-57グリッドで検出した。東西方向に大きく弧を描く。長さは約27m、最大幅は5.5mを測る。深さは最深部で約50cmを測る。埋土は粘性の強い黒褐色土である。土師器、須恵器など、最も多くの遺物(60-113)が出土している。



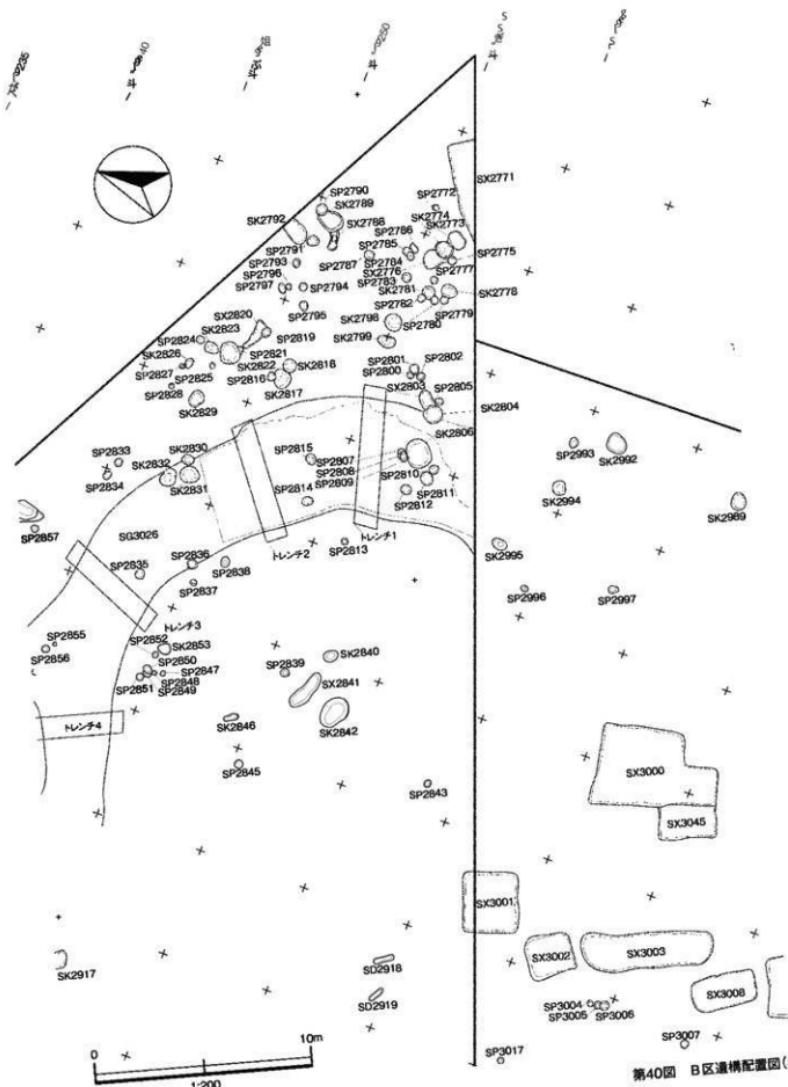
第37図 B区遺構全体図



第38図 B区遺構配置図(1)

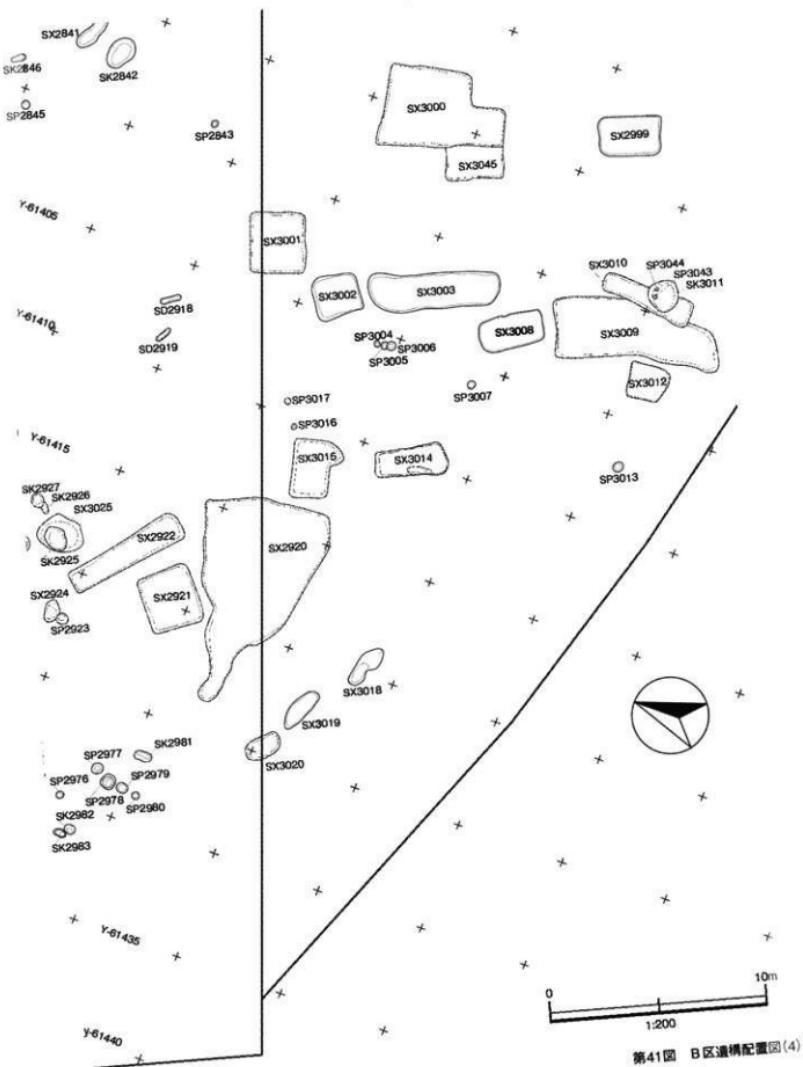


第39図 B区遺構配置図(2)

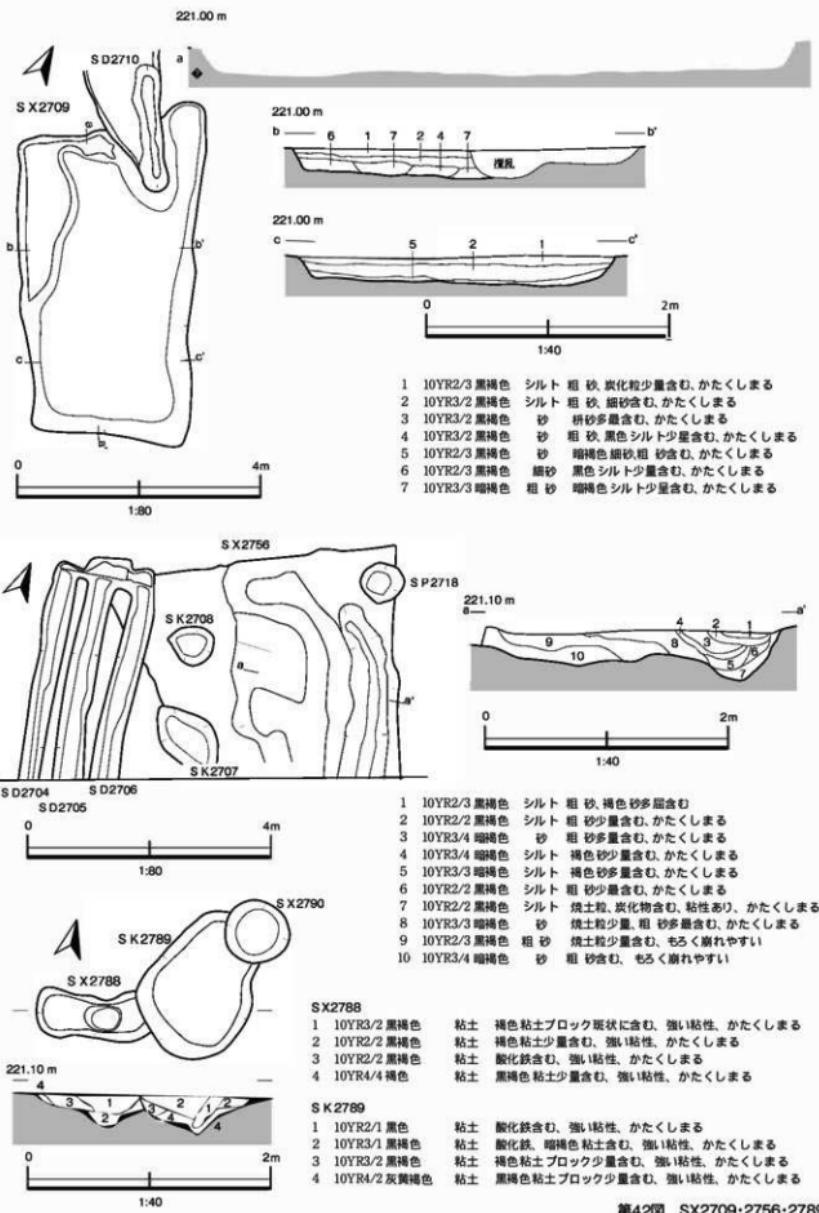


第40図 B区構造配置図(3)

Ⅲ 調査の成果

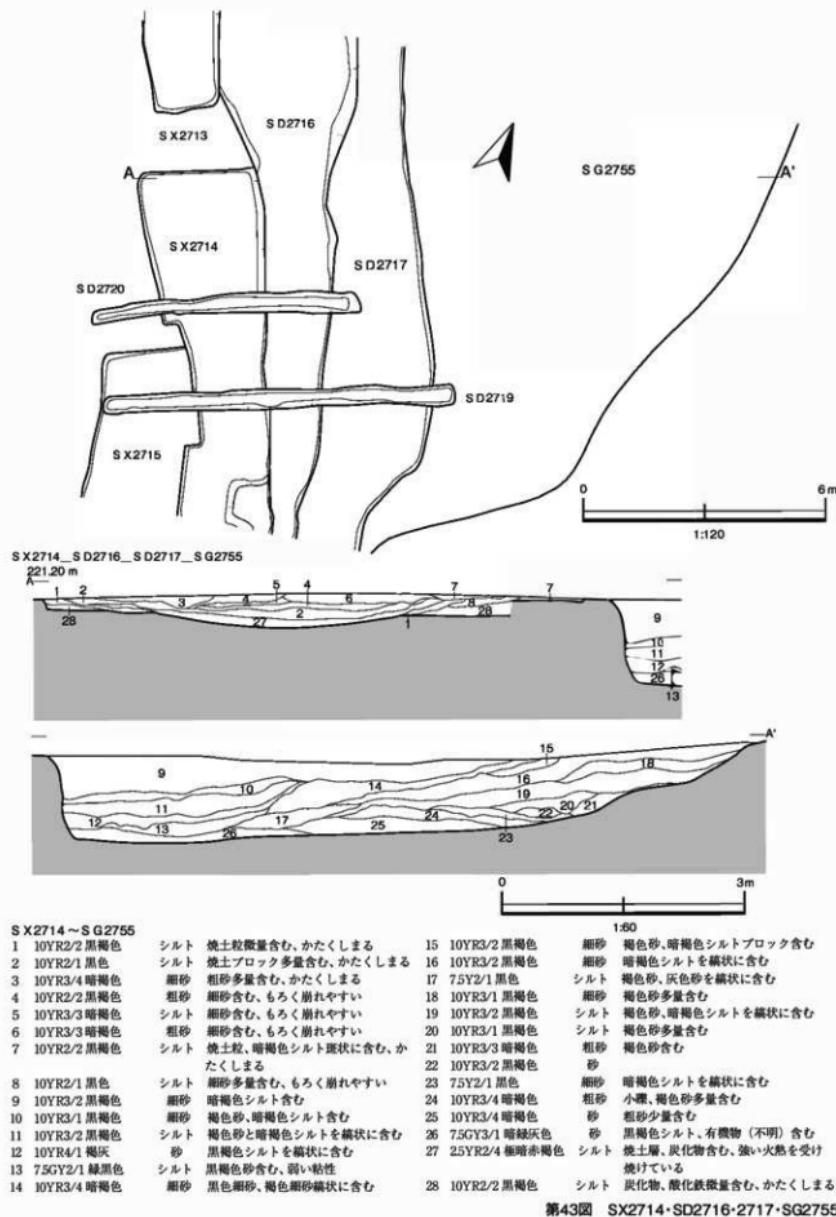


第41図 B区構造配置図(4)

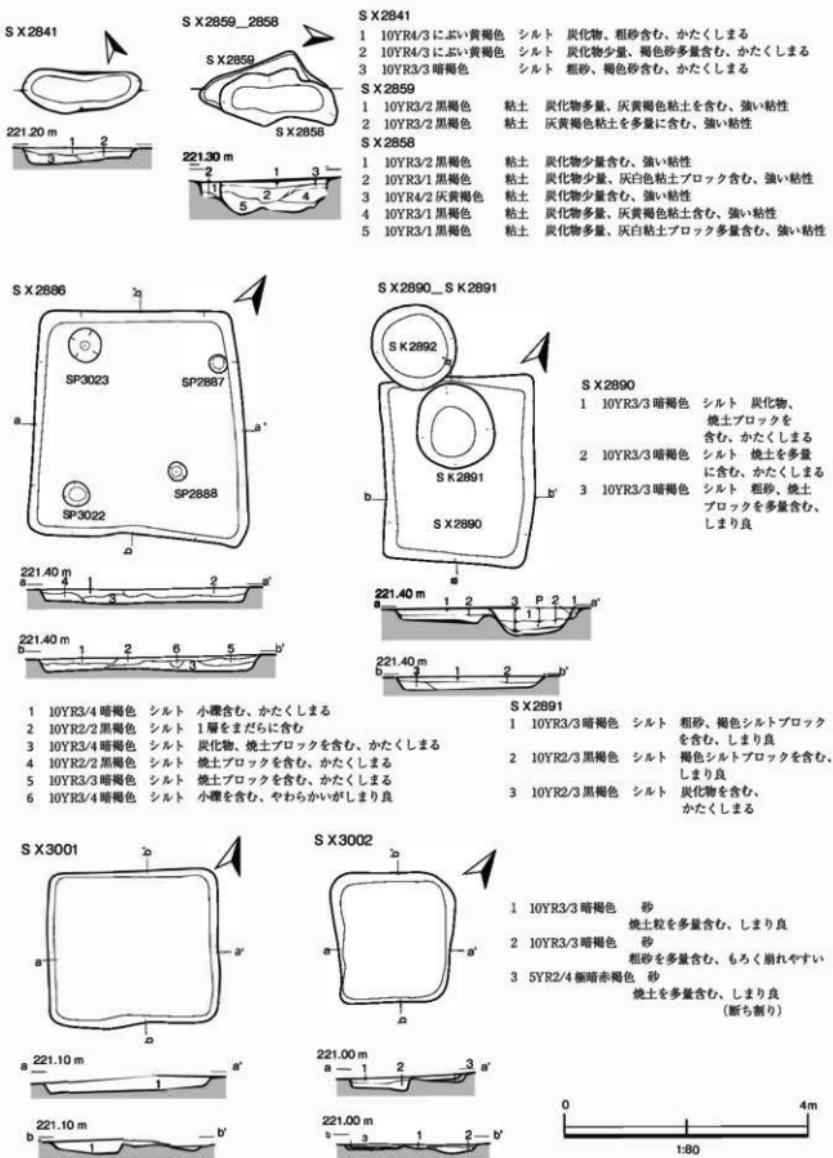


第42図 SX2709・2756・2789

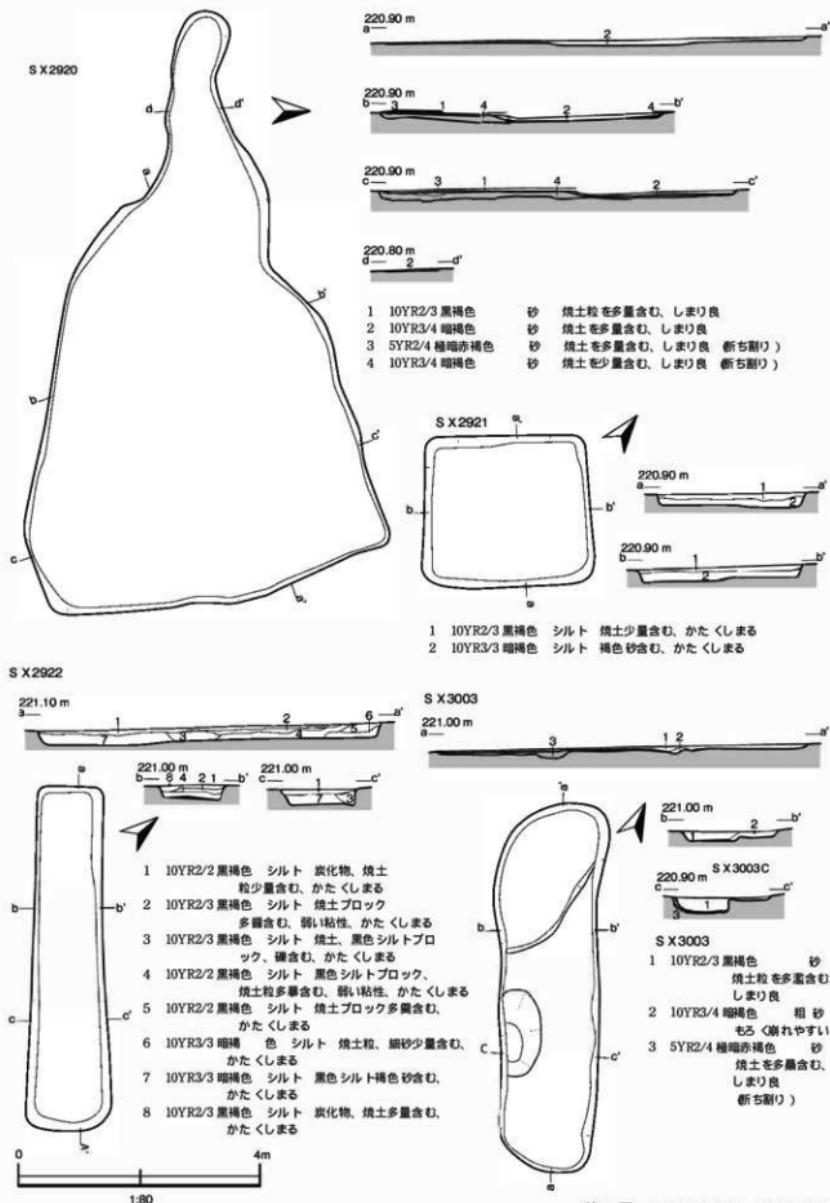
III 調査の成果



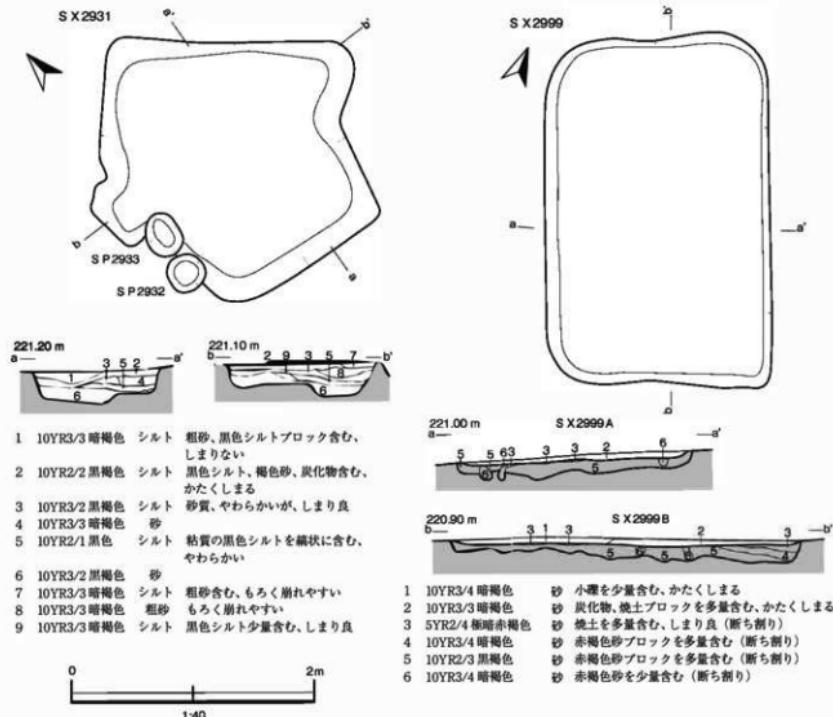
第43図 SX2714-SD2716-2717-SG2755

第44図 SX2841-2858-2859-2886
2890-2891-3001-3002

III 調査の成果

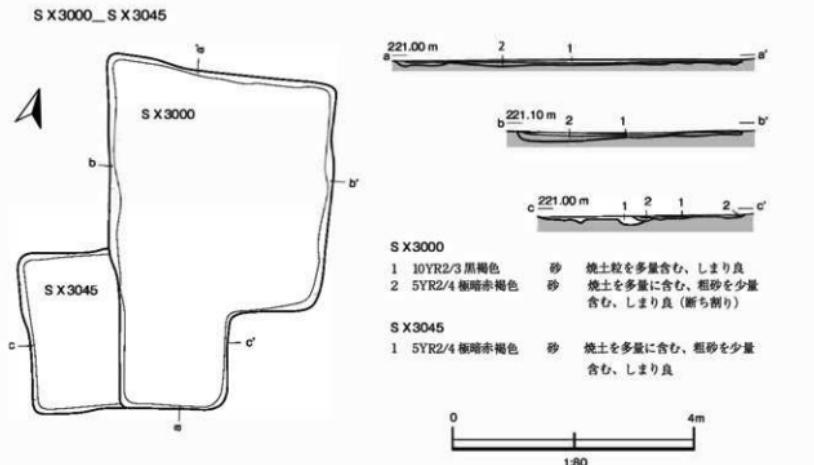
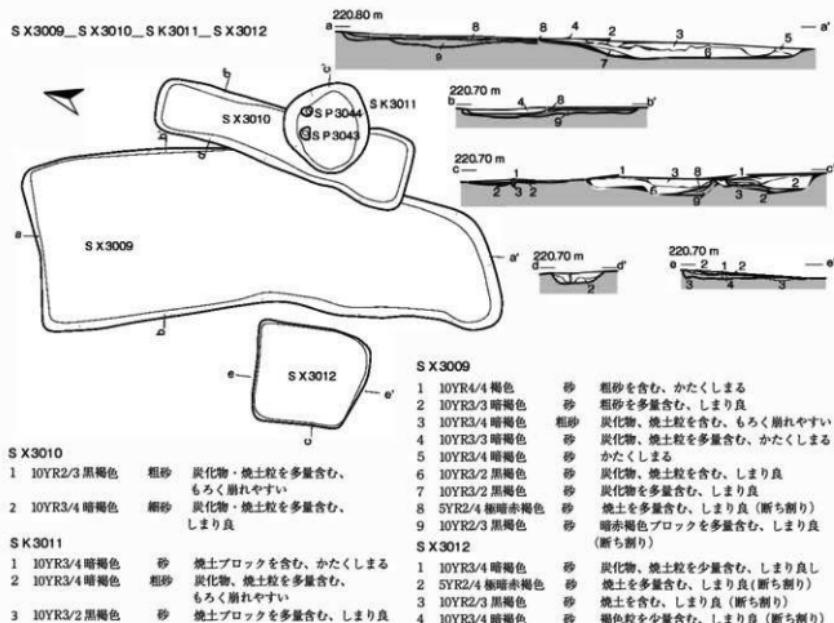


第45図 SX2920・2921・2922・3003

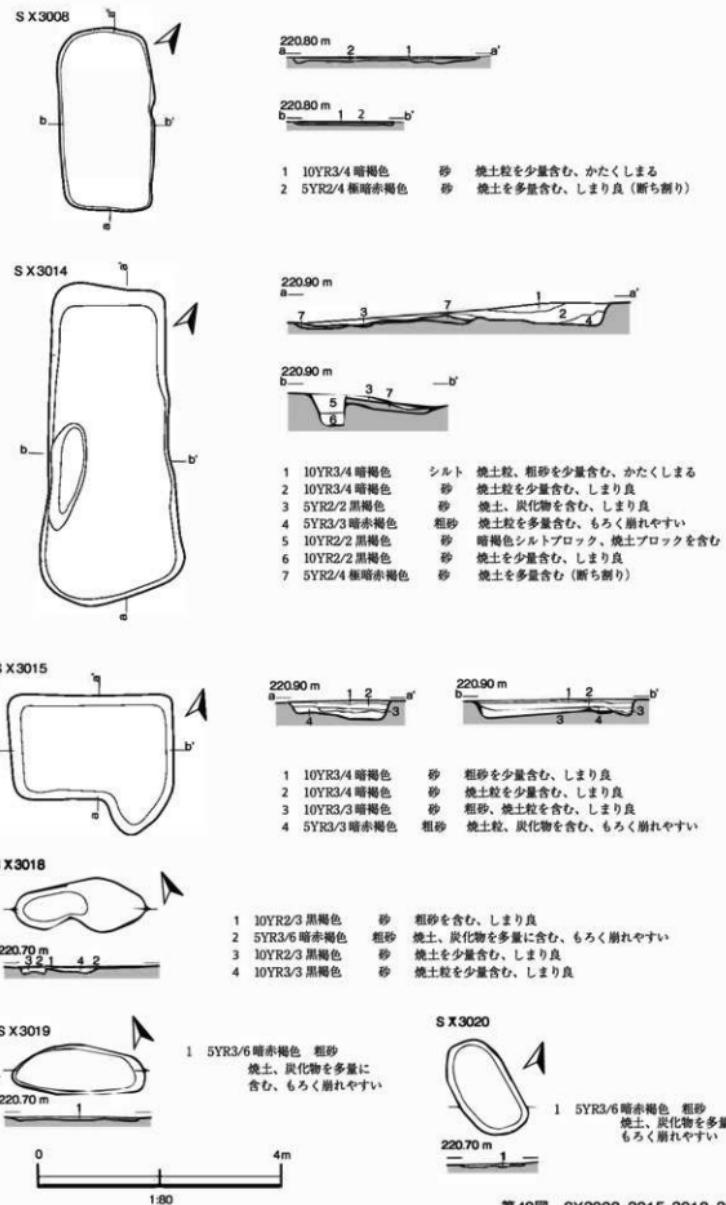


第46図 SX2931・2999・2943

III 調査の成果

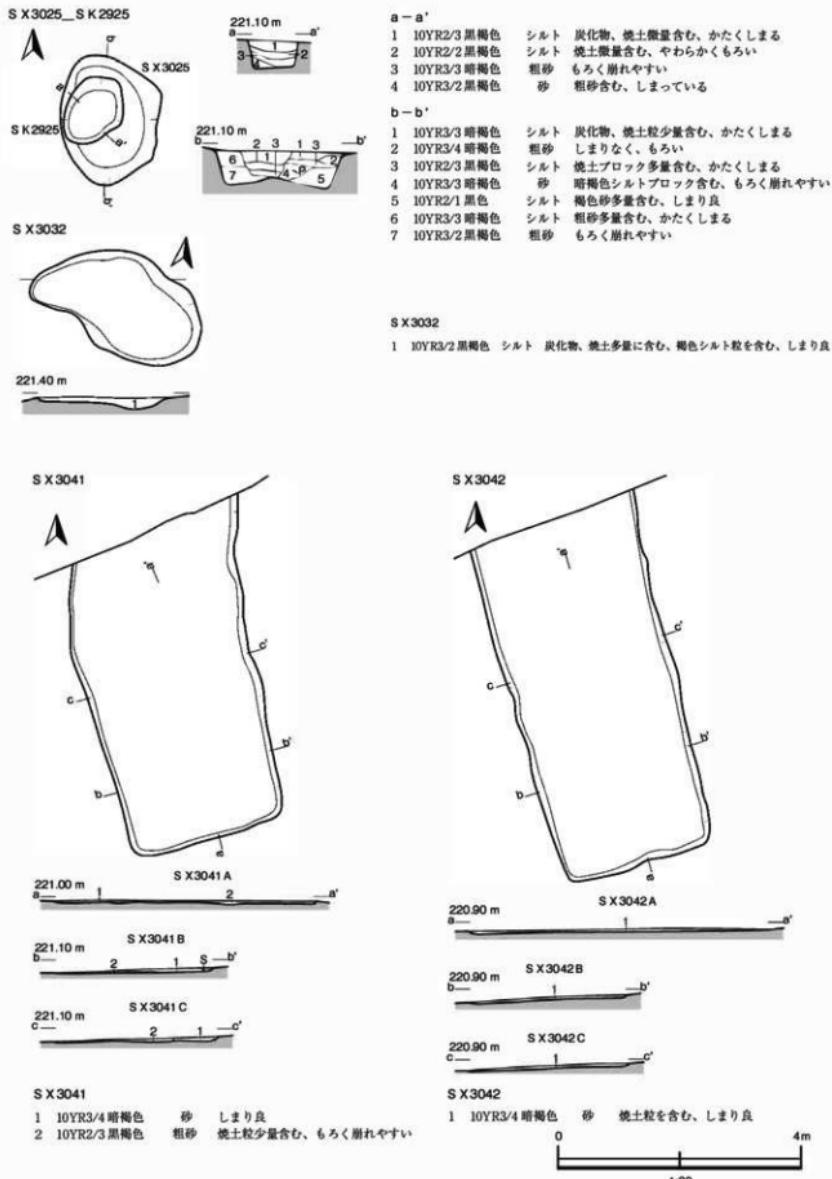


第47図 SX3000-3045-3009-3010

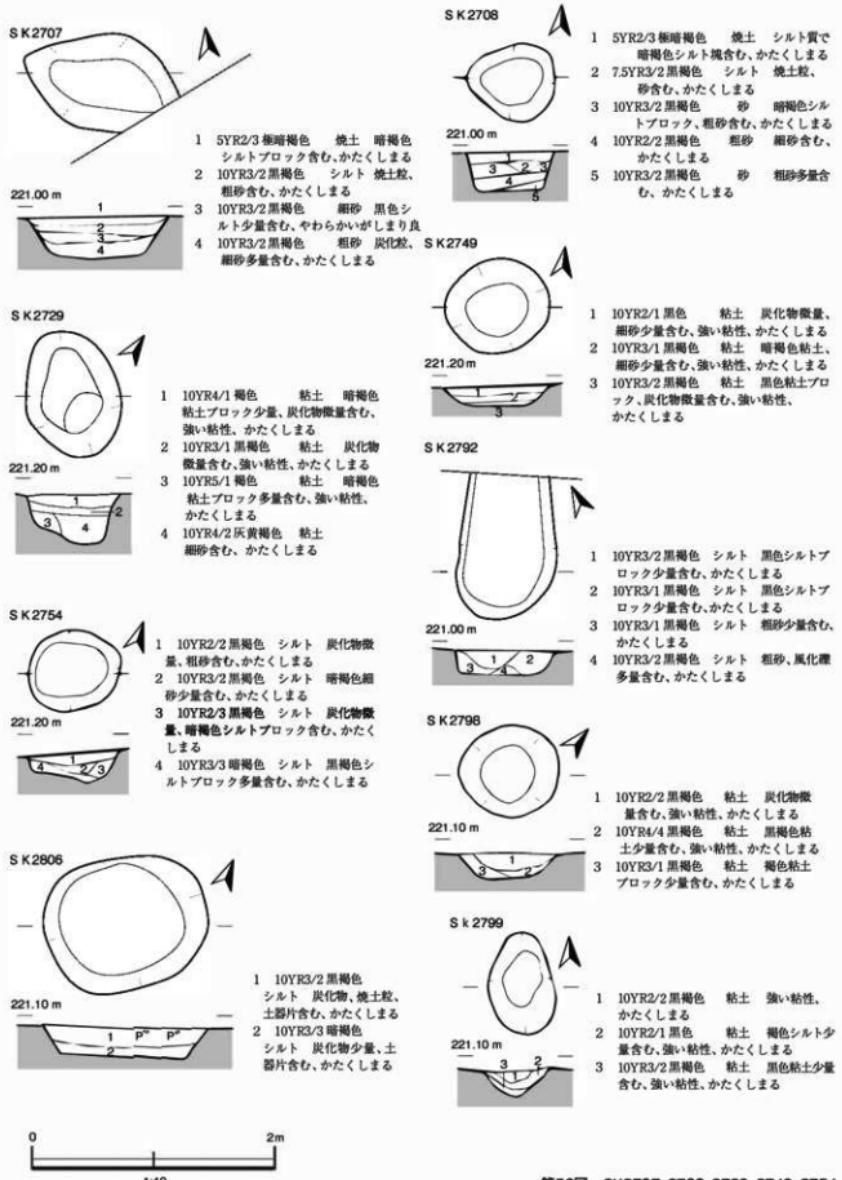


第48図 SX3008・3015・3018・3019・3020

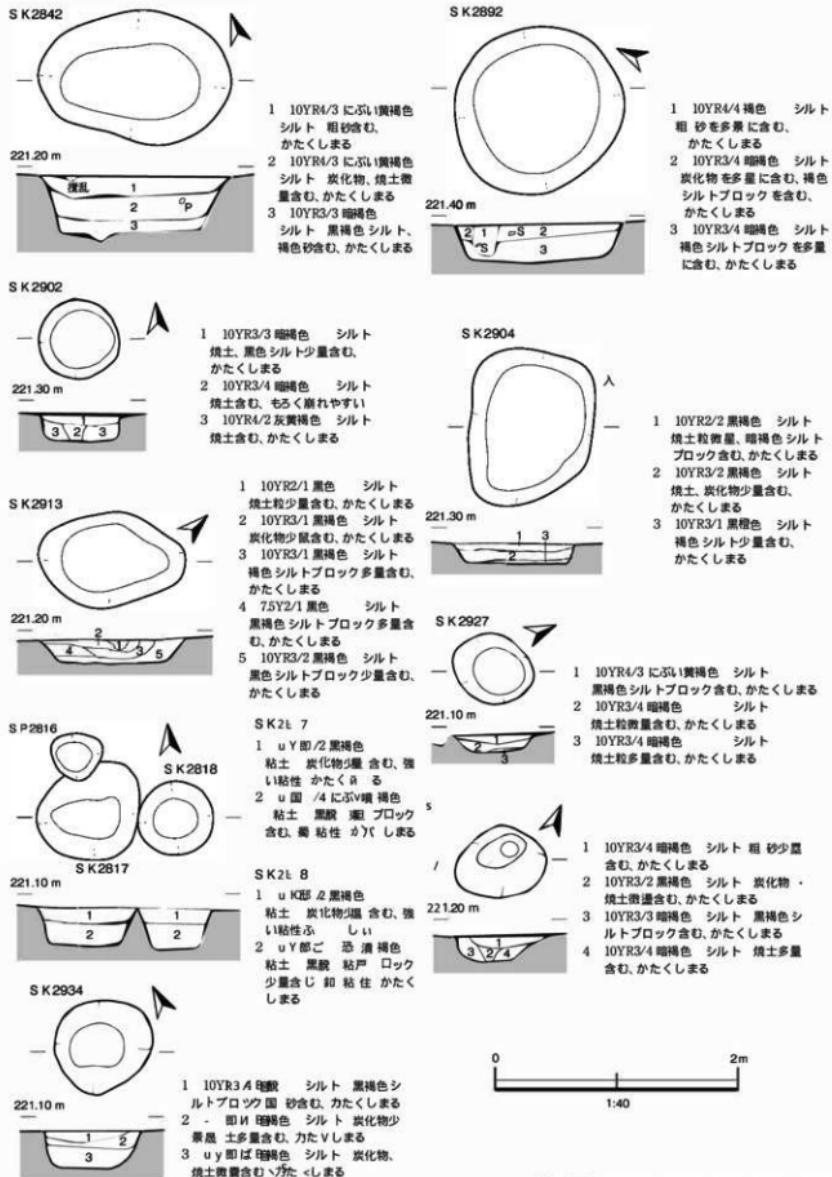
III 調査の成果



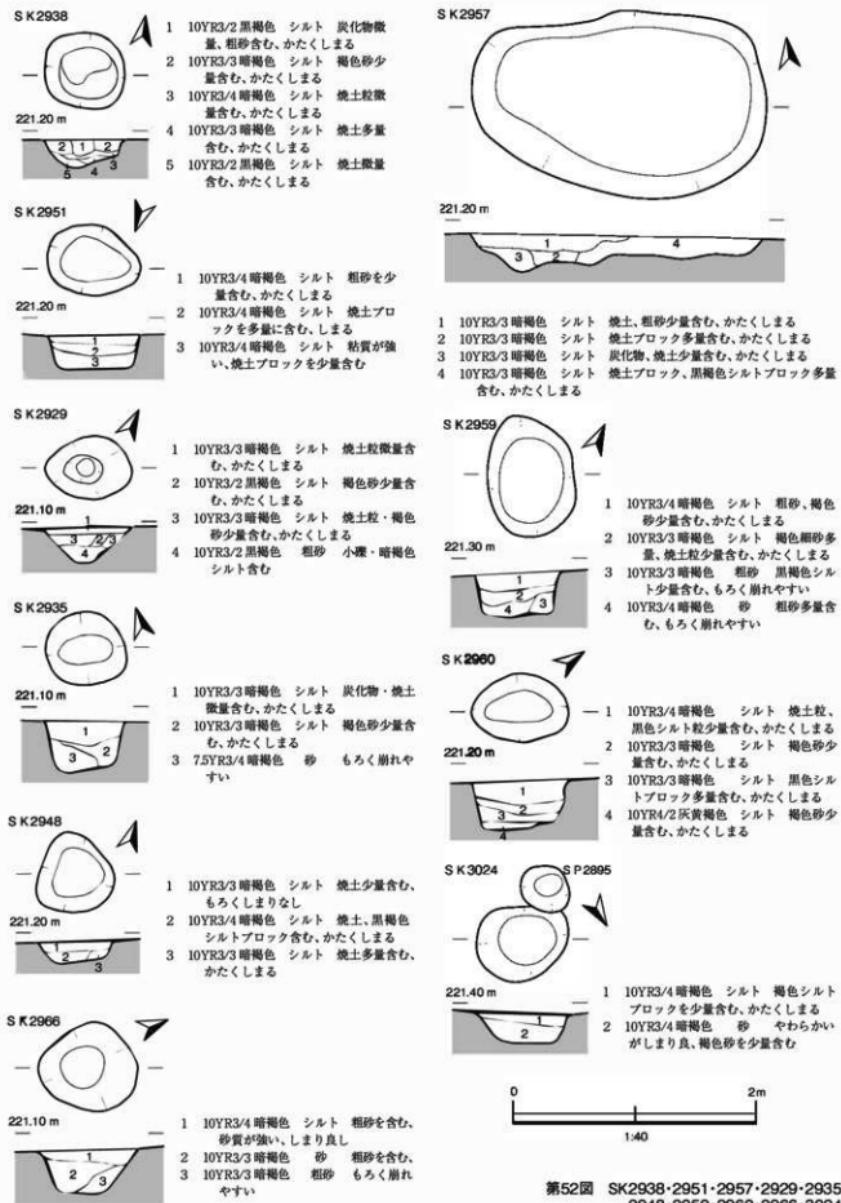
第49図 SX3025・3032・3041・3042

第50図 SK2707・2708・2729・2749・2754
2792・2798・2799・2806

III 調査の成果



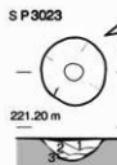
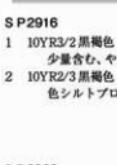
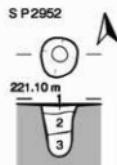
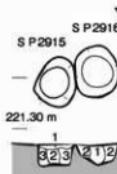
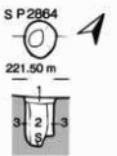
第51図 SK2842-2892-2902-2904-2913
2927-2928-2816-2818-2934



III 調査の成果

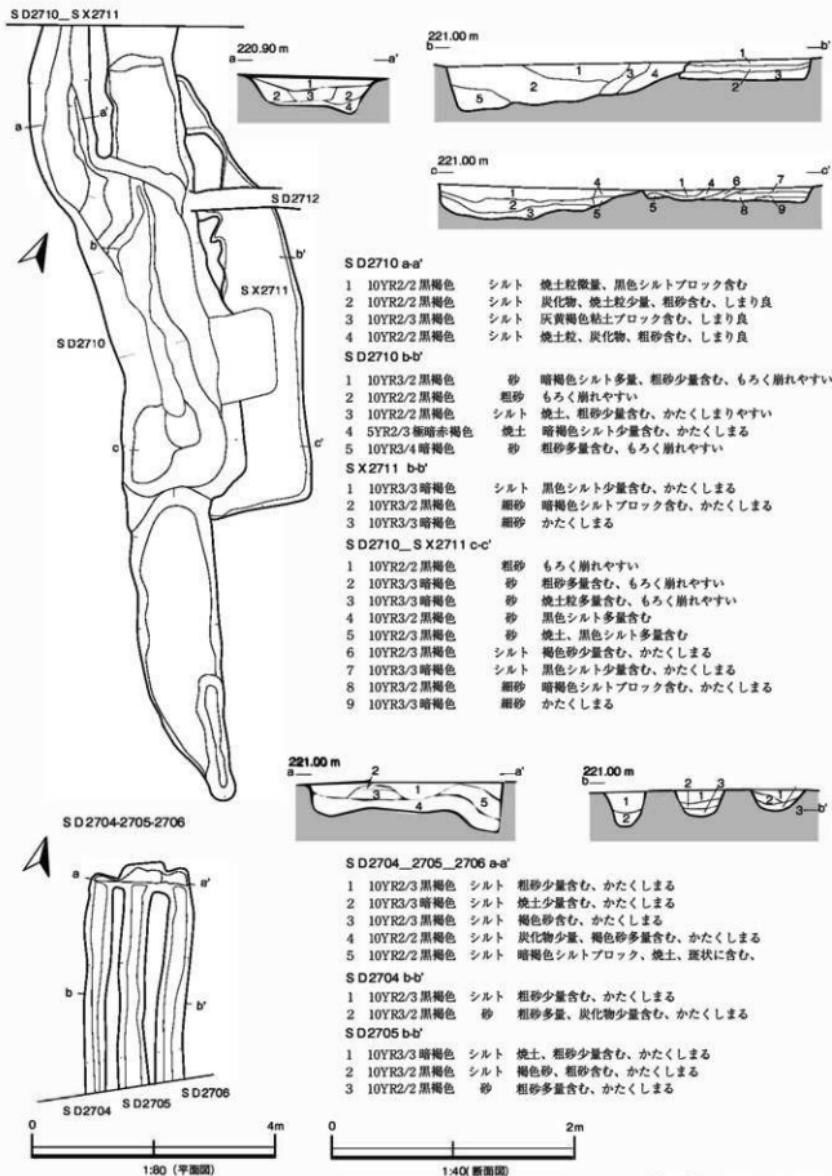


第53図 SP2701・2702・2718・2721・2722・2726
2728・2791・2810・2811・2812



第54図 SP2814・2815・2845・2864・2885
2915・2952・3022・3023

III 調査の成果



第55回 SD2710-SX2711
SD2704-2705-2706

4 B 区の遺物

B区からは、主として古代の遺物が出土している。柱穴や土坑から出土した遺物は、小破片が多く圓化できる資料は少ない。資料化できたものの大半は、河川跡と考えられる S G2755や3026からの出土したものである。

A 須恵器

須恵器では、蓋、無台坏、壺、壺等の器種が出土しているが、蓋の数は圧倒的に少なく、有台坏は器種構成から欠落する。

51（第56図）は S K2806出土の無台坏である。S G 3026から出土した破片と接合している。底部は回転糸切り後無調整である。体部は緩やかに内湾し、口縁部で外反する。52（第56図）の体部も内湾し口縁部が僅かに外反する。ロクロによる体部外面の凹凸が顕著である。54（第56図）は S K2891出土の短頸壺である。外反気味の短い頸部が直立する。口縁端部は平坦になる。肩部にはカキメが見られる。

55～59（第56図）は S G2755から出土したものである。55は蓋の天井部である。外面は回転ヘラ削りによる調整が施される。内面には灰被りが認められる。56は回転糸切り後、無調整の無台坏である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。体部の丁寧なロクロナデに対し、底部の切り離しは粗雑である。57の体部は大きく内湾し、口縁部で外反する。口縁端部は、外側に強く引き出され屈曲する。器厚は薄く、外面のロクロ目は顕著である。胎土には長石等が多く混入する。58は体部上半から口縁部にかけて直線的であるが、体部下半は、内湾するものである。口縁端部は肥厚する。外面に火拂が認められる。59は体部や口縁部の形態、胎土、焼成等が57に類似する。体部外面には、火拂が見られる。

60～77（第56・57図）は S G.3026から出土したものである。60の底部は比較的大きく、径は62mmを測る。底部は回転糸切り後無調整である。体部は直線的に立上り、上半から口縁部にかけて僅かに外反する。内外面共、ロクロによる大きめの凹凸が見られる。61は内湾する体部が立ち上がり、口縁部が小さく外反する。底部には墨書きが認められる。文字種は不明瞭ながら「升」の可能

性が考えられる。62は小さな底部から、丸味を帯びた体部が立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。63、64は体部中程まで丸味持つて内湾し、体部上半は大きく外反に転じる。64は器厚が極めて薄く、底部では1mmに満たない。65は直線的に開く体部である。器面は被打つような凹凸が見られる。66は体部中央に丸味を持ち、口縁部は小さく外反する。器厚は全体的に肥厚する。67の底部資料は内湾気味の体部が立ち上がる。68は壺の体部片である。外面は格子状のタタキ、内面は青海波のアテ痕が明瞭に見られる。器厚は薄く、小振りの壺と推測される。69は長頸壺の口縁部である。端部を上方に強く引き出し、端面に突部を作り出す。頸部の器厚は薄い。灰被りが認められる。70も壺の口縁部と考えられる。壺部を下方に引き出すことによって、平坦な壺面が作り出される。上方には僅かに引き上げ、小さな突部を作る。断面は三角形を呈する。71は壺の頸部から口縁部にかけての資料である。肩部には頸部の付根まで、タタキの痕跡を認めることができる。頸部は肩から大きく屈曲し、外反する。口縁部は壺部を上方と下方に引き出し、壺面に窪みを持たせたものである。断面形は「く」の字状を呈する。頸部、口縁部共ロクロナデ調整が施される。72は短頸壺の肩部から頸部にかけての資料である。肩部にはロクロナデの下にタタキの痕跡が認められる。頸部は、外反気味に立ち上がる。73は壺の肩部から口縁部にかけての資料である。肩部は頸部の付根から、幅約2cm程の部分にカキメが施され、その先はタタキによる成型がなされる。内面には凹凸が認められるものの、明瞭なアテ具の痕跡は見られない。へら状工具による、横方向のナデ調査が行われる。頸部は直立気味に立上り、中程から大きく外反する。口縁部は端部の上方と下方を引き出し、壺面には窪みを造らせる。頸部と口縁部はロクロナデ調整である。破損部位には、2次的な被熱によると考えられる、火はねが見られる。74は比較的器厚が薄い、壺の体部である。外面は条線状のタタキ、内面は、「十」字をベースにした格子状のアテ痕が見られる。75～77は壺の底部である。75は外面をケズリ調整したものである。ケズリはランダムに入れられる。底部から立上りにかけて肥厚し、底部内面の中央部はナデ調整により盛り上がる。76も75と同様の調整が行われている。底部内面には、重ね焼き時

にできたと考えられる、径3cm程の円形の痕跡が見られる。77の外面は上から下への縦方向のケズリ調整が施されている。内面は底部近くまで青海波の煩雑なアテ痕が見られる。体部に比して底部の器厚が薄い。

115（第61図）はS X 2886出土の無台坏である。回転糸切り後無調整の底部から、体部が内湾気味に立ち上がる。116（第61図）はS X 2890出土の小型壺である。丸味を帯びた体部には、丁寧なロクロナデが施される。

120～123（第62図）はグリッド出土の遺物である。120は、底径の大きな回転糸切りの無台坏である。体部は内湾して立ち上がる。121の口縁部は、上端を小さく引き上げ、下方に丸味を持たせたものである。器面には、灰被りが見られる。122は口縁部付近で屈曲し、端部を僅かに引き出した、壺の頸部である。123は櫛捺波状文が捺かれた、壺の腹部である。波状文は最低2段描かれているが、雑な鉛筆状を呈する。

B 土 師 器

土師器には、無台坏、有台坏、壺等の器種が見られる。坏類は、内外面黒色処理を施すもの、内面のみ黒色処理するもの、黒色処理しないものに分けられる。

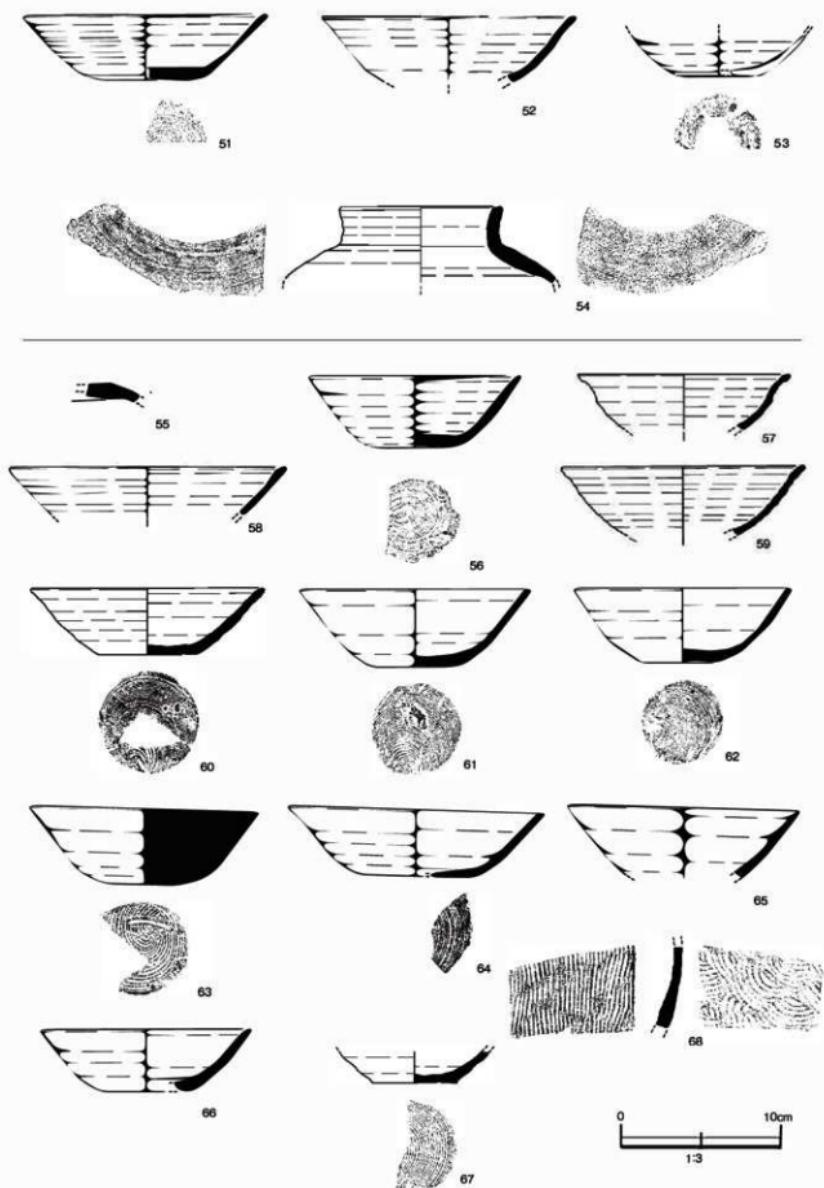
53（第56図）はS K 2806出土の無台坏である。器厚は全体的に薄手であるが、特に底部は中心に向けて薄くなる。胎土には長石や石英粒が多量混入する。

78～91（第58図）はS G 3026から出土した坏類である。78は直線的に開いた体部から、僅かに外反した口縁部に至る。胎土には石英粒等が少量混入する。焼成は軟質である。79は大きめの底部から内湾する体部が立上る。口縁部は、小さく引き出され外反する。体部外面の上半にはロクロ目が顯著に見られる。胎土には大粒の石英、長石粒が多量混入する。80の体部も内湾し、口縁部は僅かに外へ屈曲する。胎土には石英粒などが多く混入する。81は体部の開きが小さく、器高が高い。口縁部は僅かに外反し、体部は内湾する。焼成は軟質で表面は摩滅する。内外面に黒斑が認められる。82は肥厚して低い柱状になる底部から、丸味を持った体部が立ち上がる。胎土への混入物は多くない。焼成は軟質で、表面は摩滅する。83の体部は内湾して立ち上がる。底部は肥厚する。胎土には石英粒などを多く含む。焼成は硬く、ロクロナデによる調整痕も認められる。84は肥厚した底部の

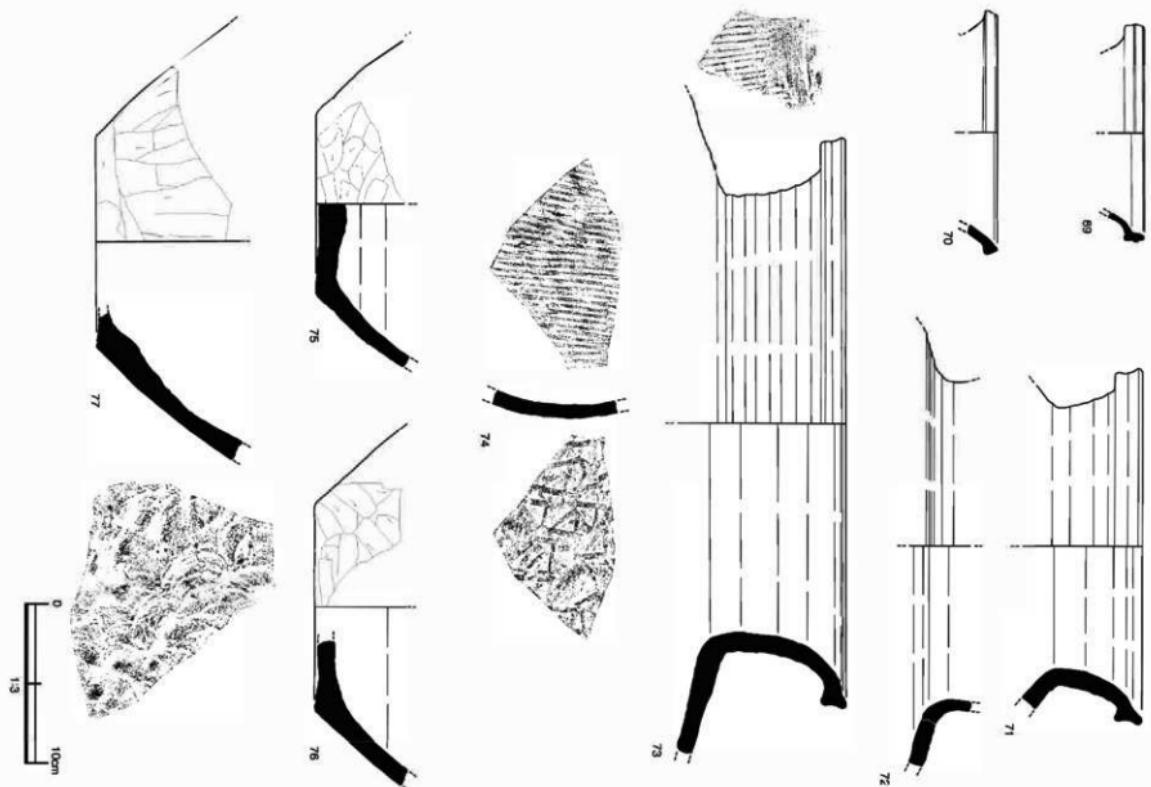
周縁に、粘土を貼り付けて高台にした有台坏である。高台は低く、断面は三角形を呈する。体部は丸味を持って立ち上がる。胎土には石英粒等を多量に含み、焼成は良好である。85も84と同じ方法で高台が作られたと考えられるが、粘土の貼り付けが小さいことから、外形は高台の形を成していない。胎土には金雲母を多量含む。86の体部は、緩い角度で直線的に立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。全体的に器厚が薄い。胎土への混入物は少ない。87は体部に丸味を持つ。内面と外面の一部に漆が付着する。外面は2次被熱を受け、表面が剥離している。88、89の体部には、ロクロ目が顯著にみられる。90、91の体部は内湾し、口縁部が外反する。

92～106（第59図）はS G 3026から出土した、黒色処理を施した坏類である。92は丸味を持った低い台が付く有台坏である。体部から口縁部まで直線的に立ち上がる。摩滅しているため内面のミガキも不明瞭である。胎土への混入物は少ない。93は高台が剥離している。摩滅により調整は不明瞭である。94も同様に、焼成が軟質であるため摩滅する。95は高台内に放射状の押圧痕が見られる。内面には、細く丁寧なミガキが認められる。胎土への混入物は少なく、焼成は良好である。96の内面には一部にのみ黒色処理の痕跡が残る。97、98は両面を黒色処理したものである。98の高台内には放射状の圧痕も認められるが、97は摩滅し、高台も剥離する。99、100、102の体部は僅かに内湾し、口縁部を小さく外反させる。器面の状態は、いずれも悪い。103、104は内湾する体部から、開き気味に外反する口縁部を持つ。胎土には石英粒等が多く混入する。105は体部から口縁部まで直線的に開く。106は器高が高く、103と同タイプである。

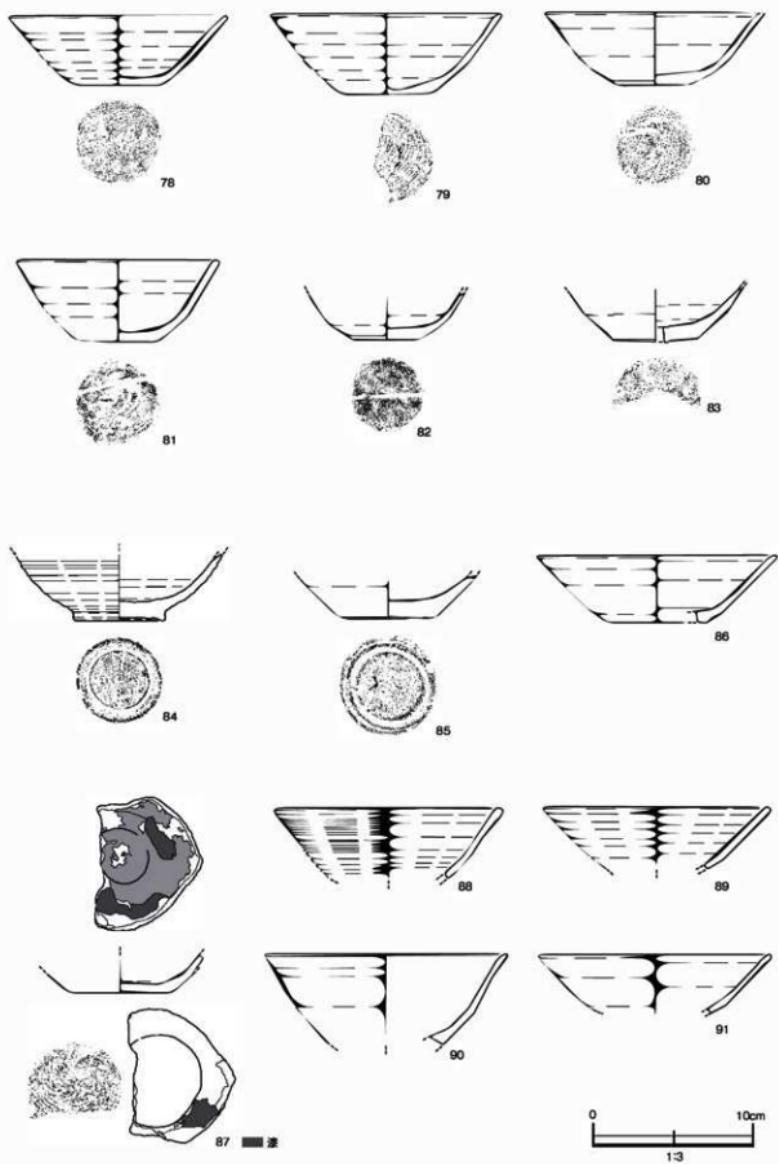
107～112（第60・61図）はS G 3026出土の壺である。107は外面ケズリ、内面ハケメ調整である。2次被熱のため表面が傷んでいる。108は外面上部にロクロナデが見られ、下部はケズリ調整が施される。胎土には石英、長石粒等が多量に混入する。109は内外面ともハケメ調整である。体部は丸味を帯び、口縁部は強く屈曲する。110～112は長胴壺である。体部上半はロクロナデ調整を主とする。113は小型の壺、117、118はS X 2886出土の坏、119はS X 3025出土の長胴壺である。グリッドからは有台坏（124、125）が出土している。



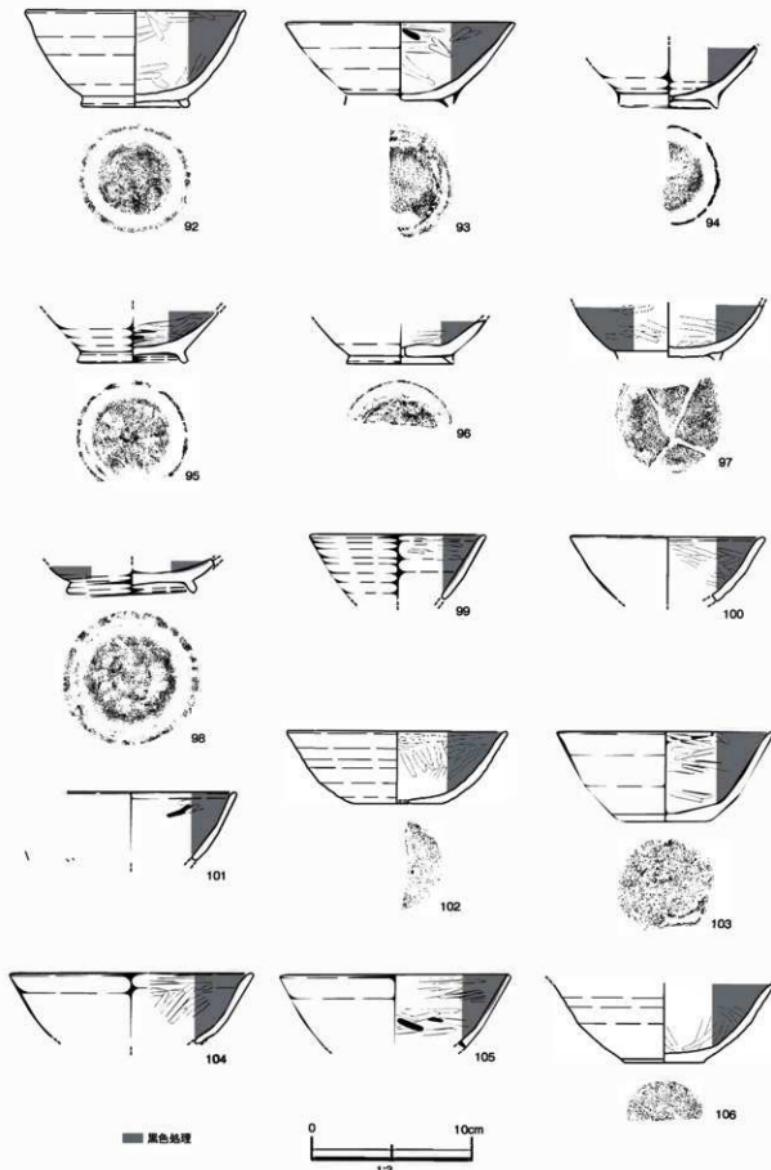
第56図 B区土坑・SG3026出土遺物(1)



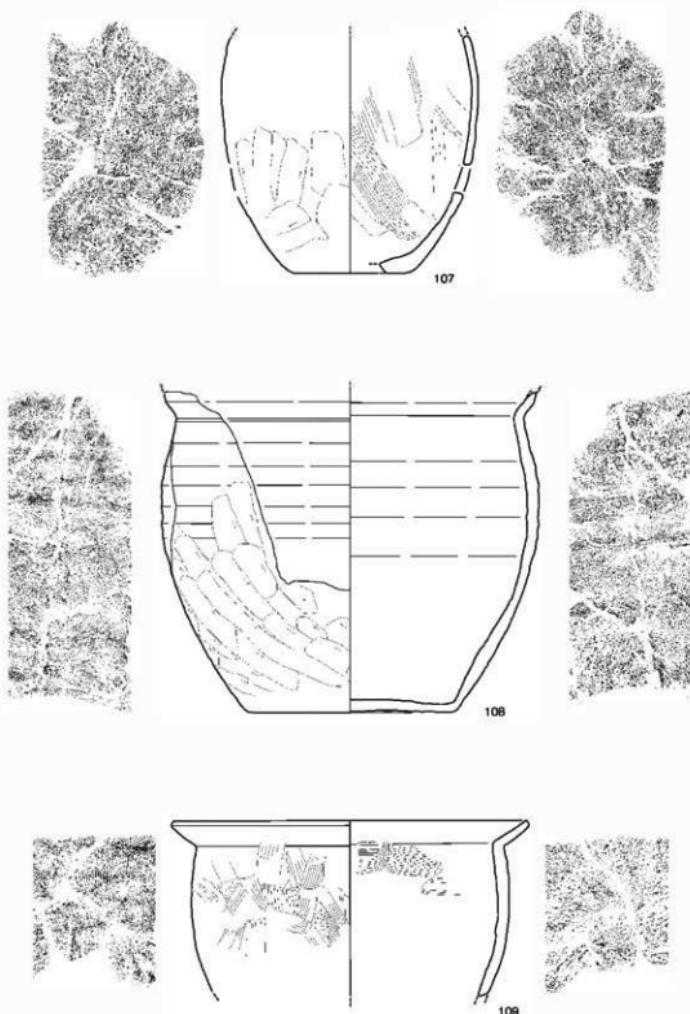
第57図 SG3020出土遺物2



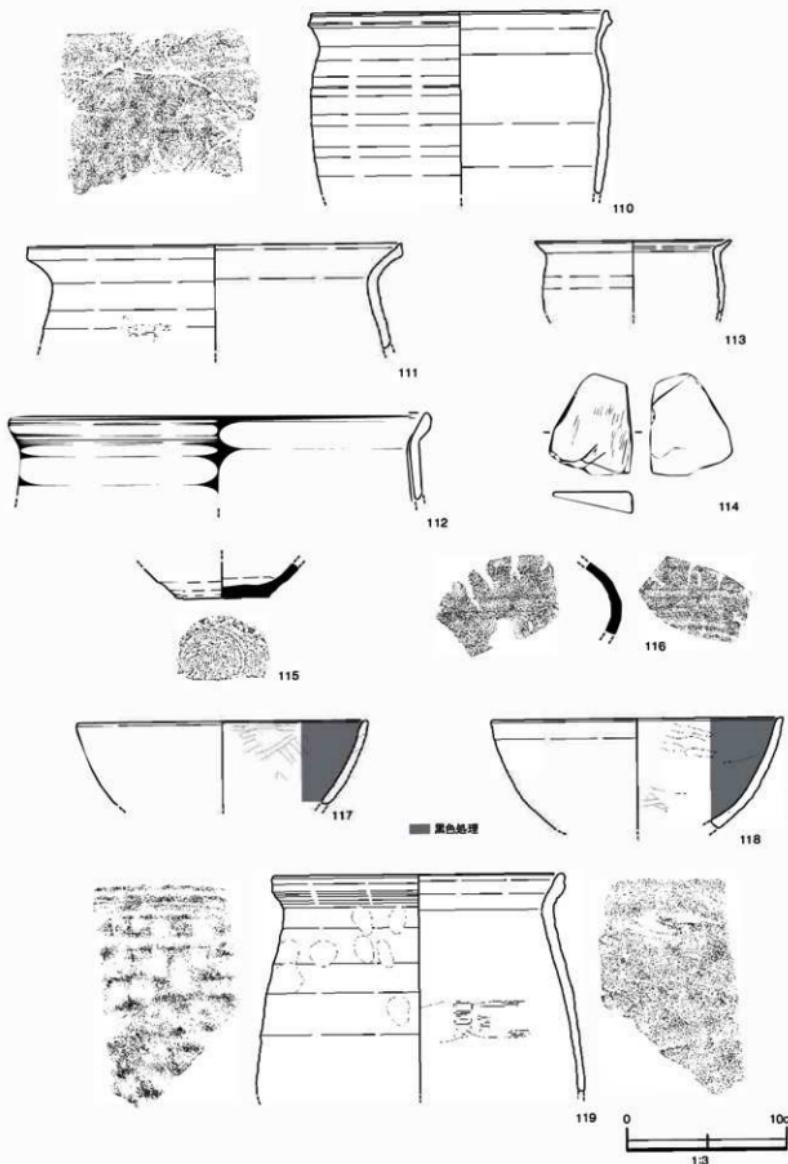
第58図 SG3026出土遺物(3)



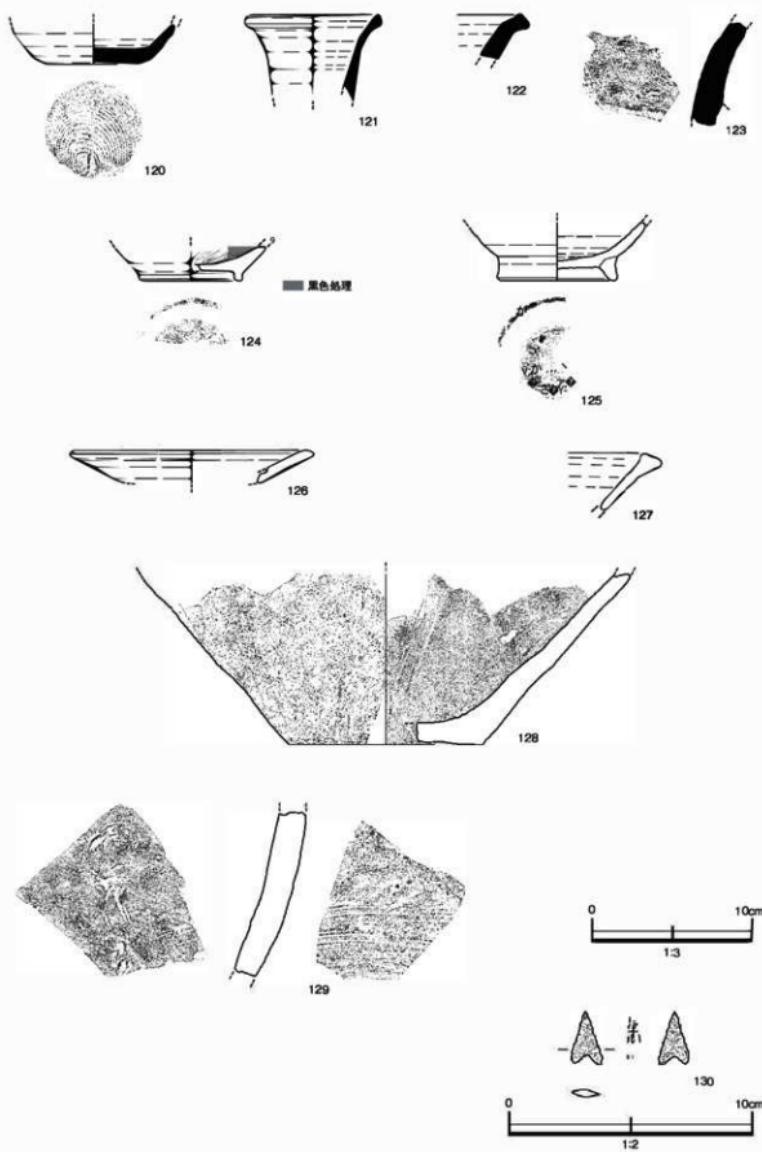
第59図 SG3026出土遺物(4)



第60図 SG3026出土遺物(5)



第61図 SG3026出土遺物(6)・SX出土遺物



第62図 B区包含層出土遺物

5 C 区の遺構

A 遺構の分布

C区の遺構検出面は、現地表より約30~90cm掘り下げた地点で、標高は約220~221mである。北東側が高く、南側は上無川に向かって緩やかに低くなる。検出面の土質にも違いがあり、北東側は砂質であるのに対し南側は幾分粘土質である。

C区で検出された遺構は、土坑、柱穴、溝跡等、751基である。その分布状況は、溝跡が調査区全域に広がり、土坑と柱穴は調査区中央部の南側に多く見られる。北西部では遺構の密度が希薄になり、南東端の低地部分では、遺構がほとんど見られない。また、東側では古代に帰属すると考えられる遺構が認められるのに対し、中央部から西側については、中世以降のものが大半を占める。

B 土 坑

土坑は68基検出している。規模及び平面形は、長軸1.5~2 m、短軸1m前後の楕円形を呈するものが多い。円形の土坑は、径が約2 mを測るものが多く、楕円形のものに比べ大きめである。92~88~26~29グリッドの周辺に多く集まる。

S K3156

調査区西端部の95~33グリッドに位置する。平面形は、長軸160cm、短軸90cmの楕円形を呈する。深さは33 cmを測る。底面の一部が深く掘り込まれる。埋土には炭化物を含む。

S K3314

調査区東端部の108~28グリッドに位置する。平面形は、長軸160cm、短軸140cmの三角形に近い楕円形を呈する。底面の中央には、径70cm程の円形の掘り込みがある。深さはそれぞれ20cmと50cmを測る。埋土には褐色土塊を含み、堅く締まっている。

S K3336 (第67図)

調査区東寄りの105~28グリッドに位置する。平面形は、長軸115cm、短軸90cmの楕円形である。検出面からの深さは20cmを測る。壁は緩やかに掘り込まれ、底面は平坦である。黒褐色の埋土には、褐色粒や灰黄褐色土の塊を含み、堅く締まる。

S K3366

調査区中央部の103~28グリッドに位置する。平面形は、径120cmのほぼ円形を呈する。深さは11cmと浅く、底面は平坦である。同様の規模、形状のものに、S K3337、3460、3478、3479、3543がある。

S K3578 (第67図)

106~27グリッドに位置する。平面形は、長軸160cm、短軸76cmの長楕円形である。検出面からの深さは30cmを測る。底面は北東側が約20cmの幅で一段高く、そこから約12cm掘り込まれて最深部に至る。底面の形状は、緩やかな丸味を帯びている。埋土には、焼土や炭化物を含み、特に2層目には焼土塊を多量に含む。壁面には火熱を受けた痕跡が無く、別の地点から運ばれた焼土と炭化物を投げ込んだと推測される。

C 溝 跡

溝跡は大小合わせて24条検出された。東西方向の溝跡が10条、南北方向は12条である。

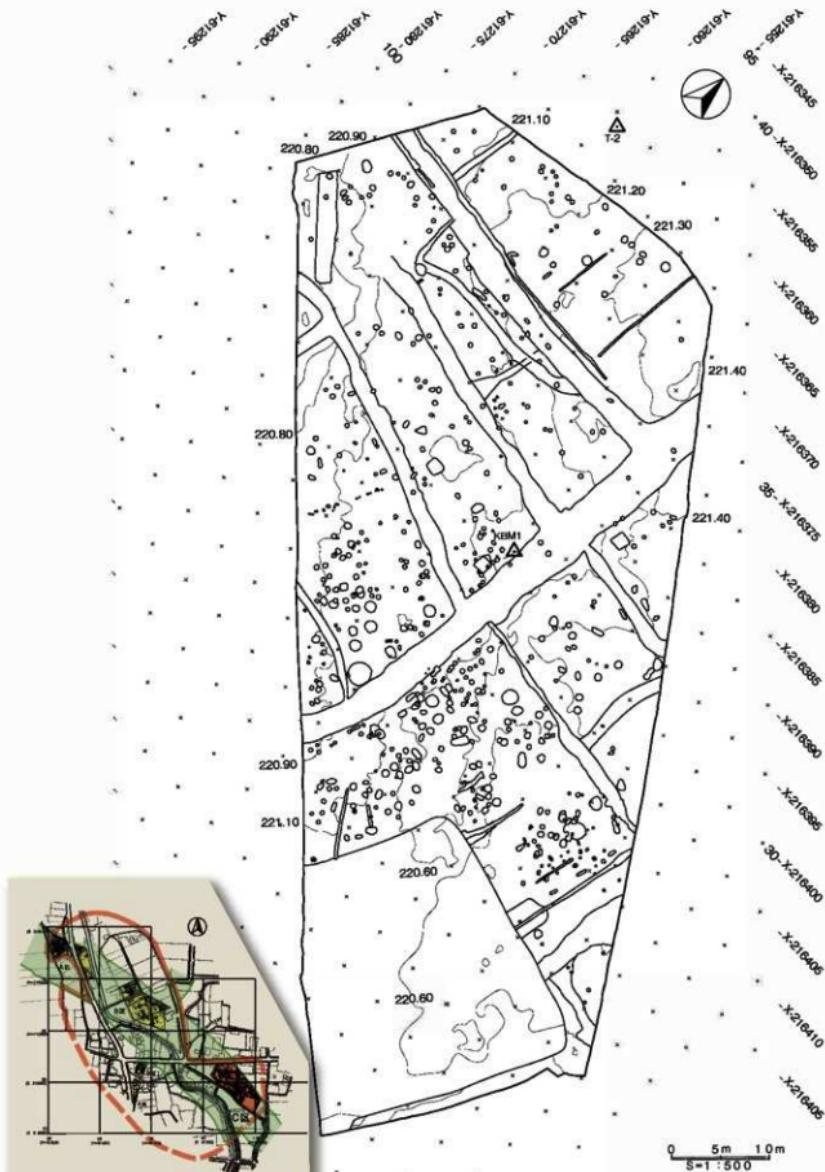
S D3152・3751 (第68図)

調査区中央に位置する南北の大溝である。長さ52mまで検出している。南北とも調査区外に延びる。最大幅は北側にあり、4.9mを測る。最小幅は南側にあり、2.8mである。深さは、南側で40cm、北側で66cmを測る。溝底の標高は、南側で220.60m、北側で220.72mなので緩い傾斜ではあるが、北から南へ流した溝跡であることがわかる。S D3751はS D3152の上面に、長さ約17mに渡って確認できた溝跡である。幅約110cm、深さ約30cmを測る。S D3152と直交する溝跡は、S D3179、3315、3753、3755等がある。

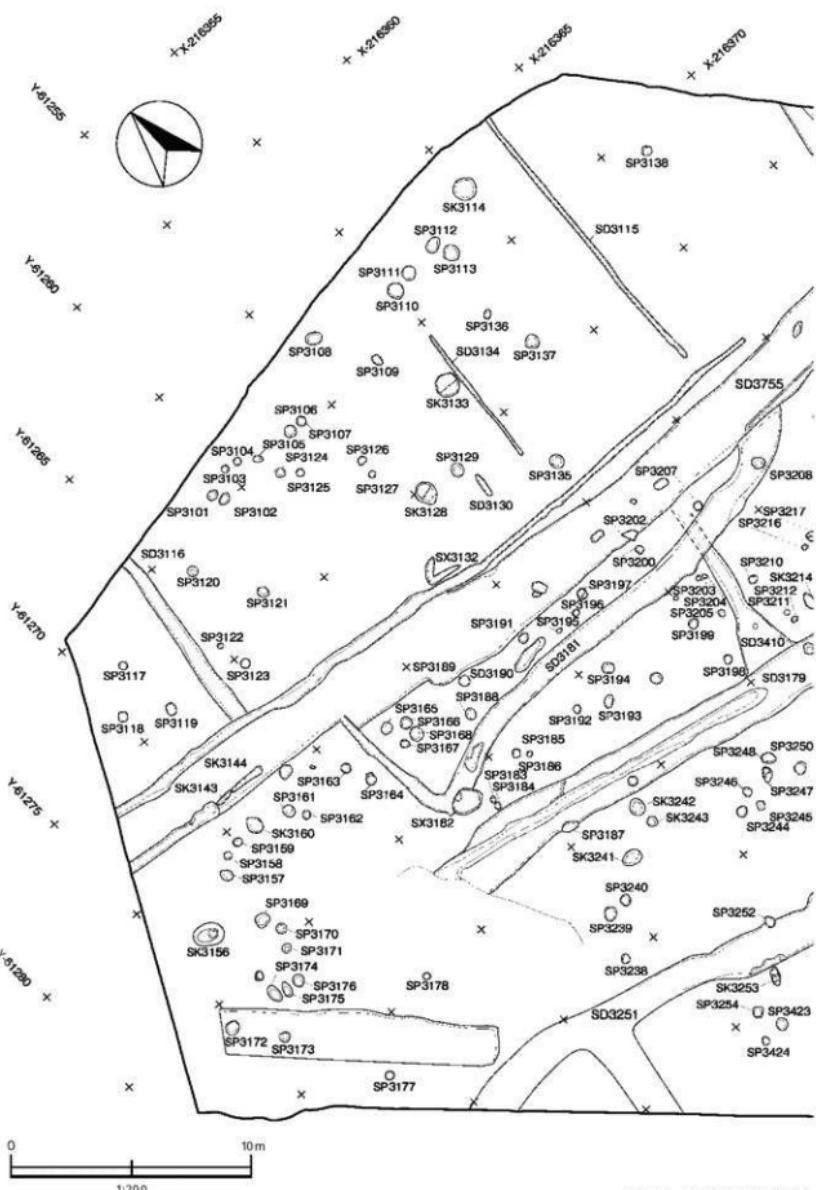
S D3251 (第69図)

調査区西側にある東西の溝跡である。長さは38mまで検出している。東側はS D3152で止まり、西側は調査区外に延びる。最大幅は2.1m、最少幅は1.2mである。深さは、最深部でも約20cm程度で、南から北側に向かい浅くなる。S D3152とは約70°の角度で交わる位置関係があり、断面観察からは、S D3251の方が新しいことがわかる。西側31mの地点で、南に分歧する溝が見られる。

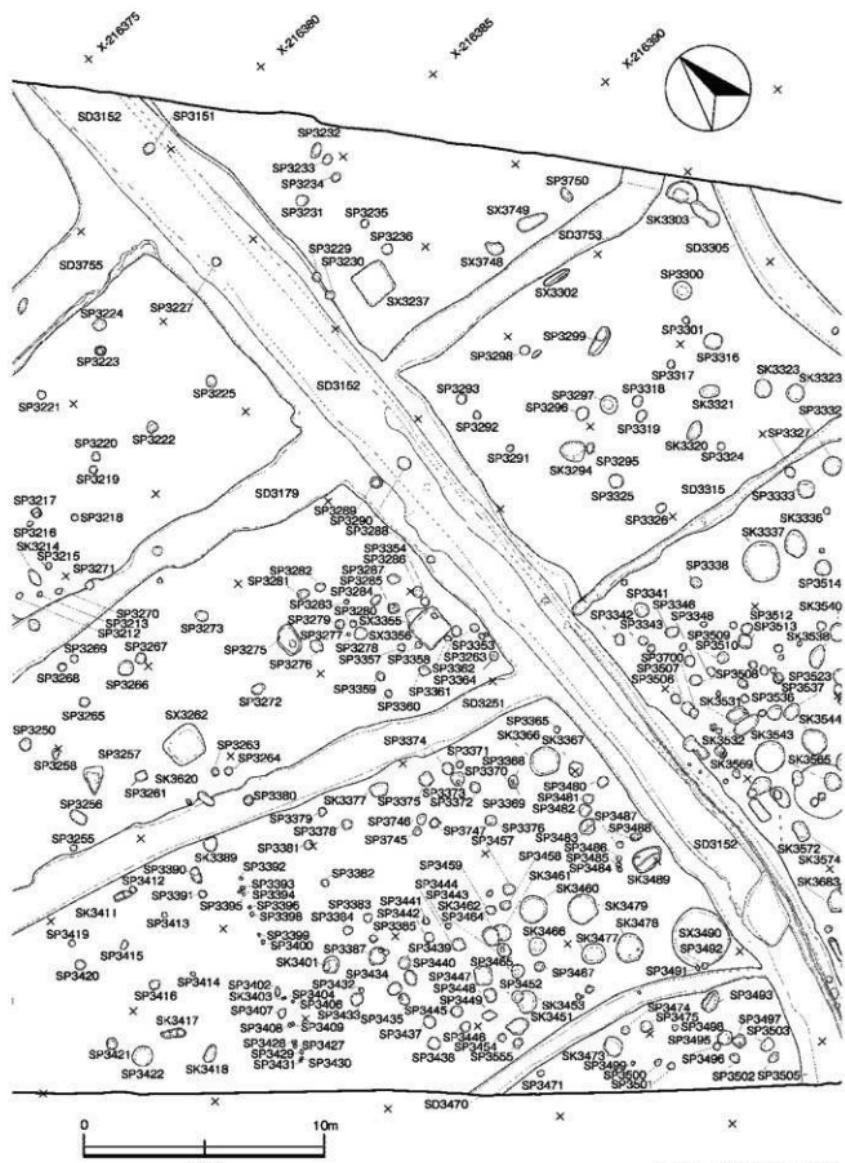
南北溝であるS D3115、3134や方位を意識しないS D3737、3181等は性格が異なると考えられる。



第63図 C区遺構全体図

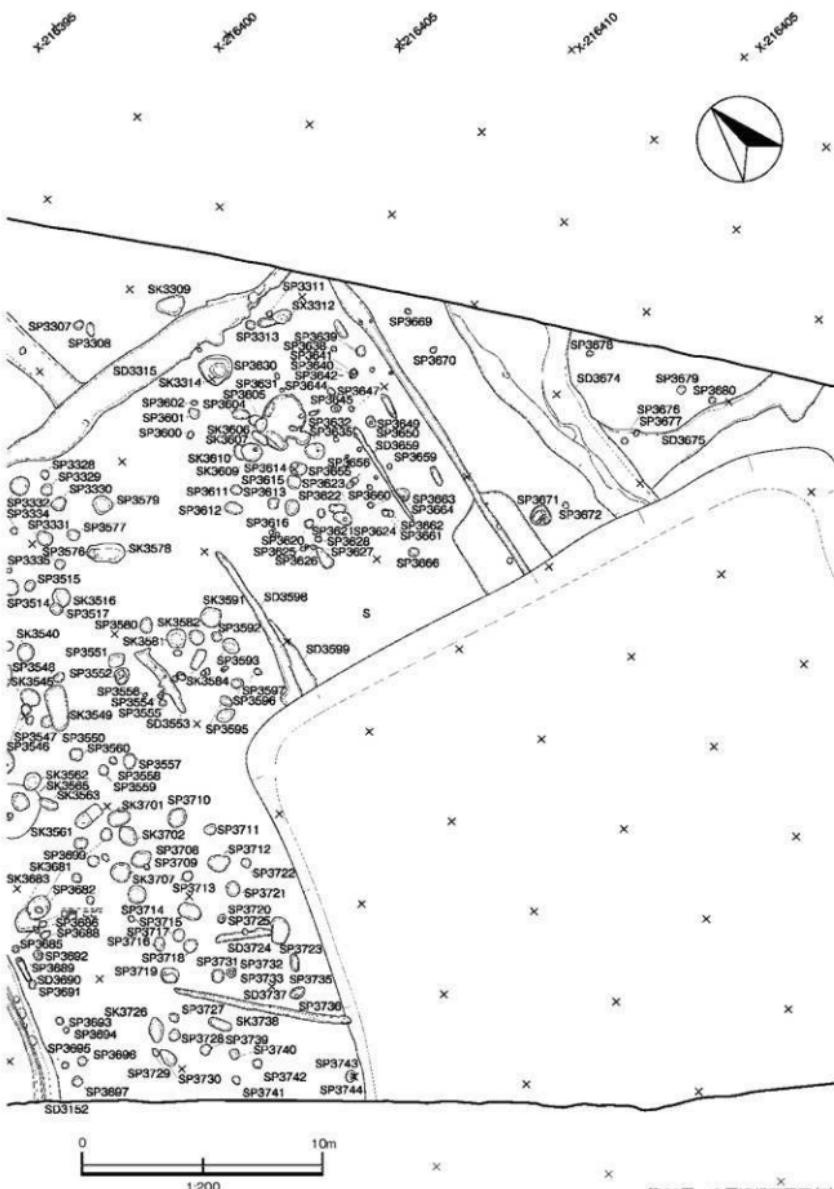


第64図 C区構成配置図(1)

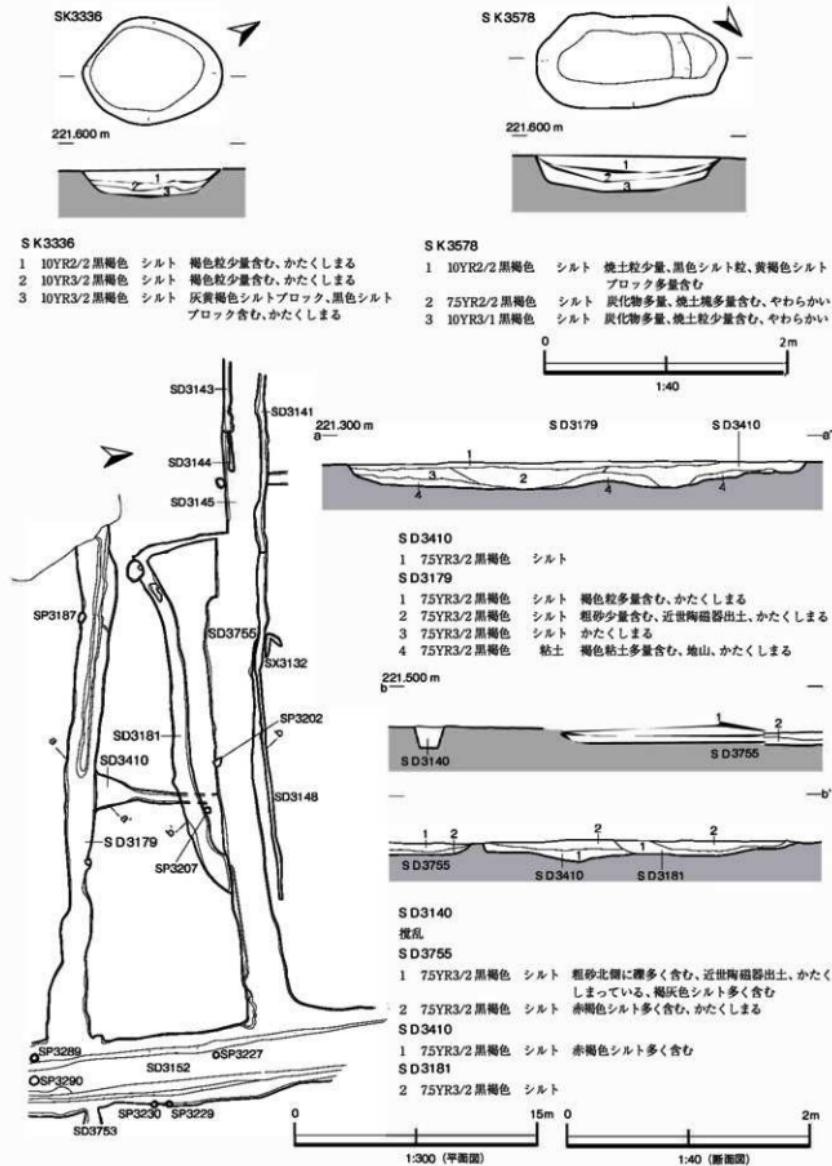


第65図 C区遺構配置図(2)

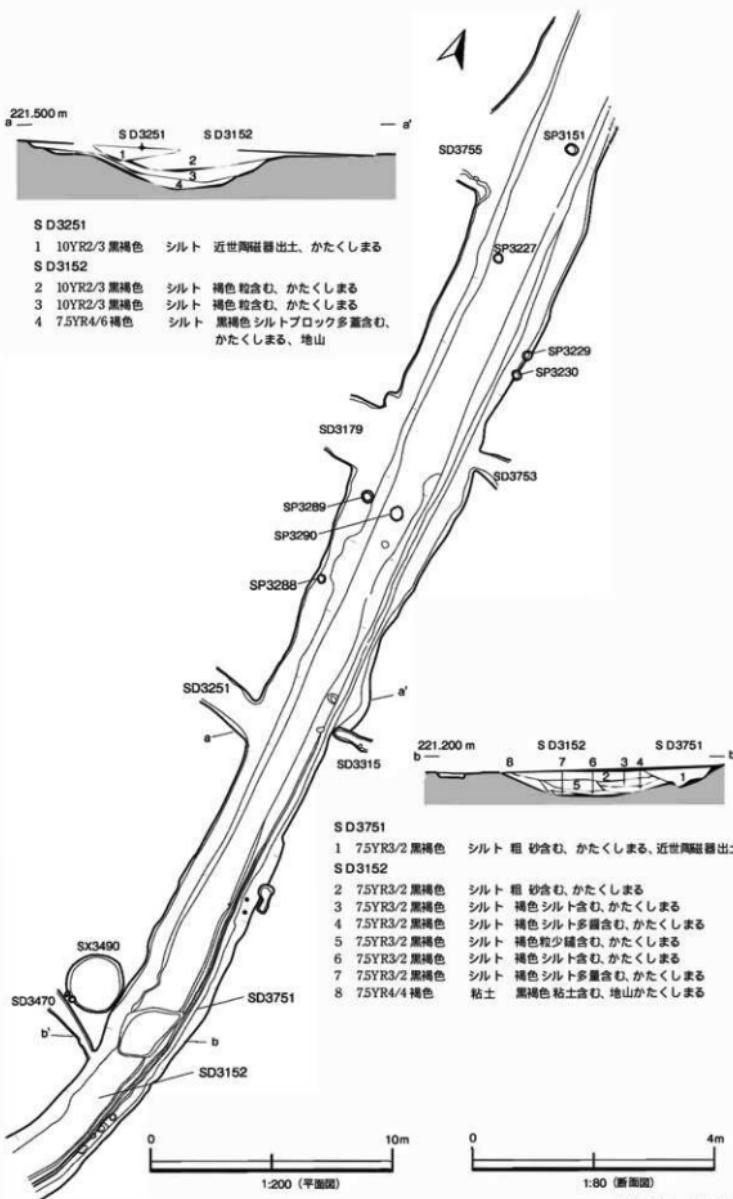
III 調査の成果



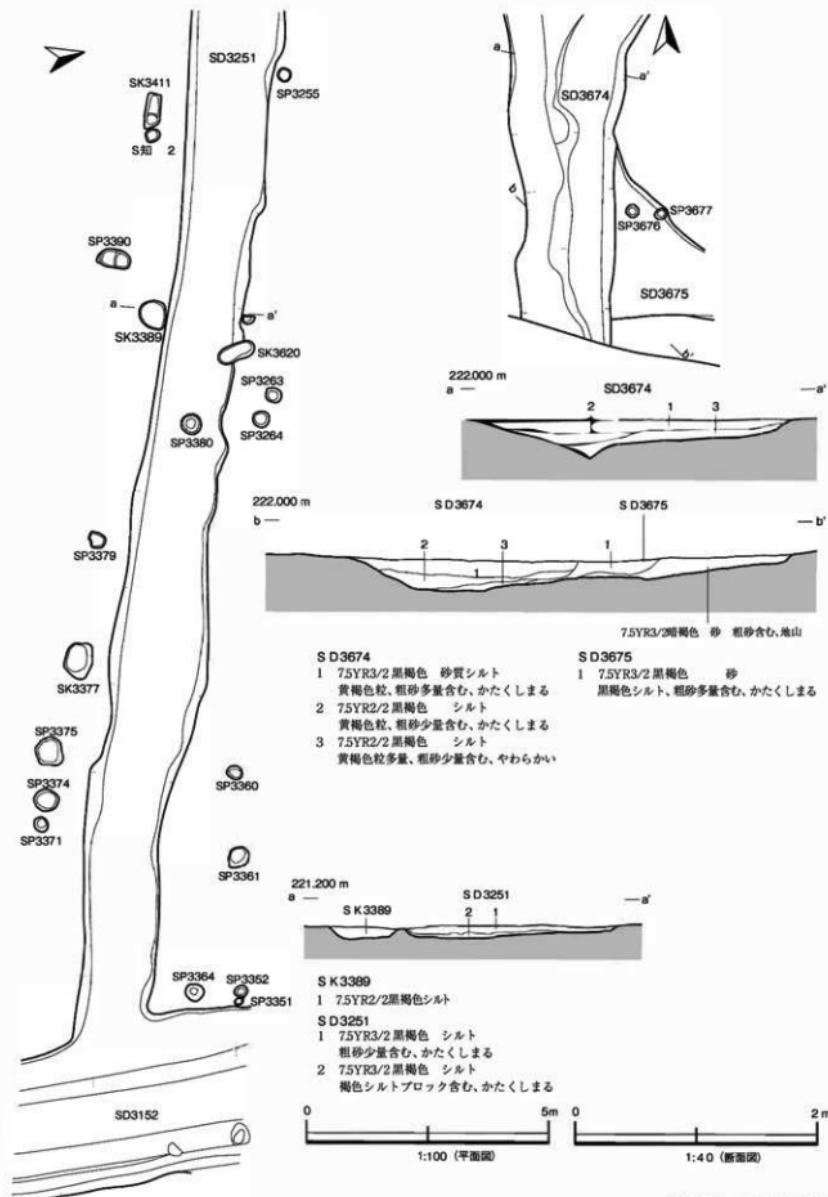
第66図 C区遺構配置図(3)



第67図 SK3336・3578・SD3179・3410・3755・3181



第68図 SD3152・3751



第69図 SD3251・3674

6 C 区の遺物

C区からは、縄文時代の石器、古代の土師器、須恵器、近世の陶器、磁器、石製品等が出土している。溝跡からの出土が大半を占める。出土量は少なく、整理箱で1箱程度である。遺物の内容、量は遺構の帰属時期や性格に結び付くものと考えられる。

A 古代の遺物

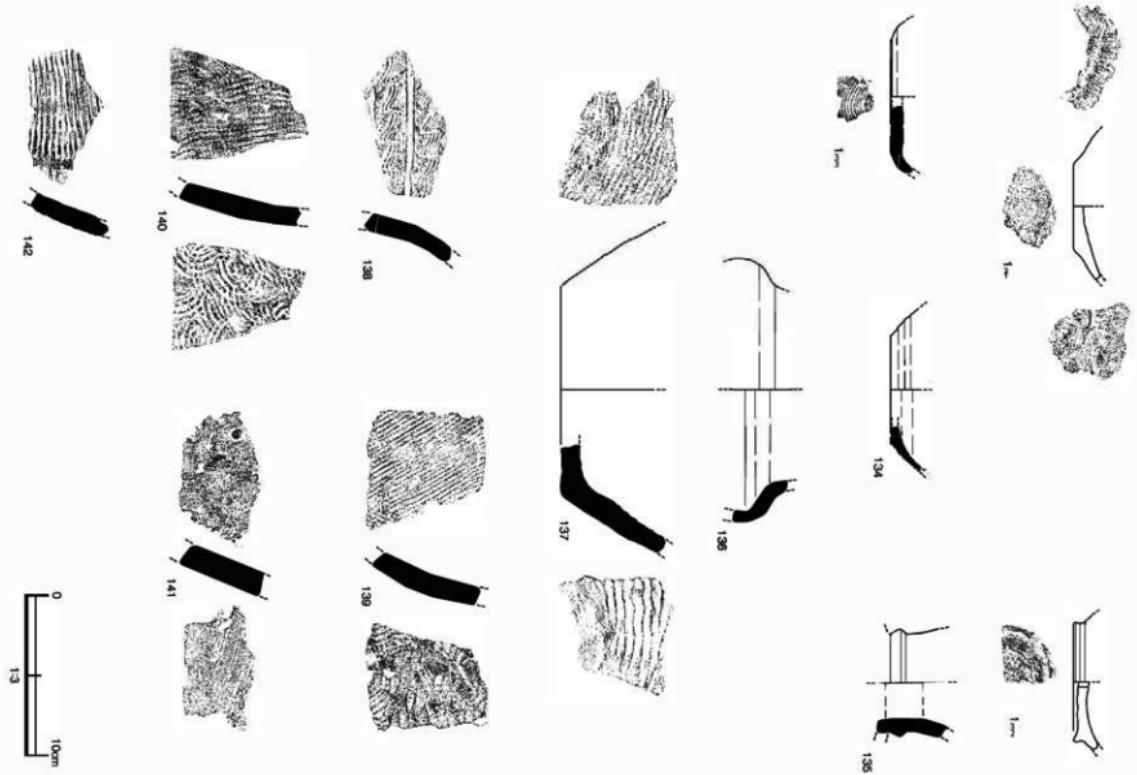
古代の遺物は、131～142（第70図）、172～190（第73図）に示した。

131は土師器の壺の底部である。内面、外面、底部にハケメ調整が認められる。胎土には石英、金雲母等を多く混入する。132の有台坏は内面を黒色処理したものと考えられるが、器面が摩滅し不明瞭である。胎土には金雲母が多くみられる。133、134は回転糸切りによる須恵器無台坏である。133には、胎土中に葉状纖維の混入が認められる。134は内湾する体部が立ち上がるものの、外面にはロクロ口が顯著である。135は須恵器長頸壺の頸基部である。接合部に、断面形が半円形のリング状突帯が廻る。内面には押圧痕が残る。136は須恵器の短頸壺と考えられる。頸部は、直立に近い角度で立ち上がる。肩部は張りが無く、丸味を持って体部へと移行する。肩部と頸部の接合箇所は、内面が僅かに膨らみ、器厚が厚くなる。胎土には長石、石英粒が多く混入する。137は須恵器壺の底部である。体部は平底から直線的に立ち上がる。体部外面は条線状タタキ、内面にも条線状のアテ具痕が見られる。底部内面は、ナデ調整である。胎土には混入物がほとんど無く、緻密である。138～142は須恵器壺の頭部及び体部である。138は横描波状文が施された壺の頸部である。沈線によって区切られた波状文は、2段まで確認できる。沈線は、下段の波状文の下にも入れられ、2条認められる。波状文は4本の鶴歛によって流麗に描かれている。胎土には長石、石英を多く混入する。139は外面に細かい格子状のタタキ、内面に条線状のアテ具痕が残る。胎土への混入物は少ない。140は外面に格子条のタタキ、内面に同心円状のアテ具痕を残す。内面は明瞭だが、外面は摩滅し、器面が滑らかである。胎土には長石粒を含むが、量的には多くない。141の器面には、タタキとアテ具の痕跡は認められず、ハケメによる調整のみが見られる。胎土には細砂を多量に混入する。142は外面に条線状のタタキが見られ、内面には僅かに条線状アテ具の痕跡が認められるものの、磨り消された状態である。胎土への混入物は少ない。

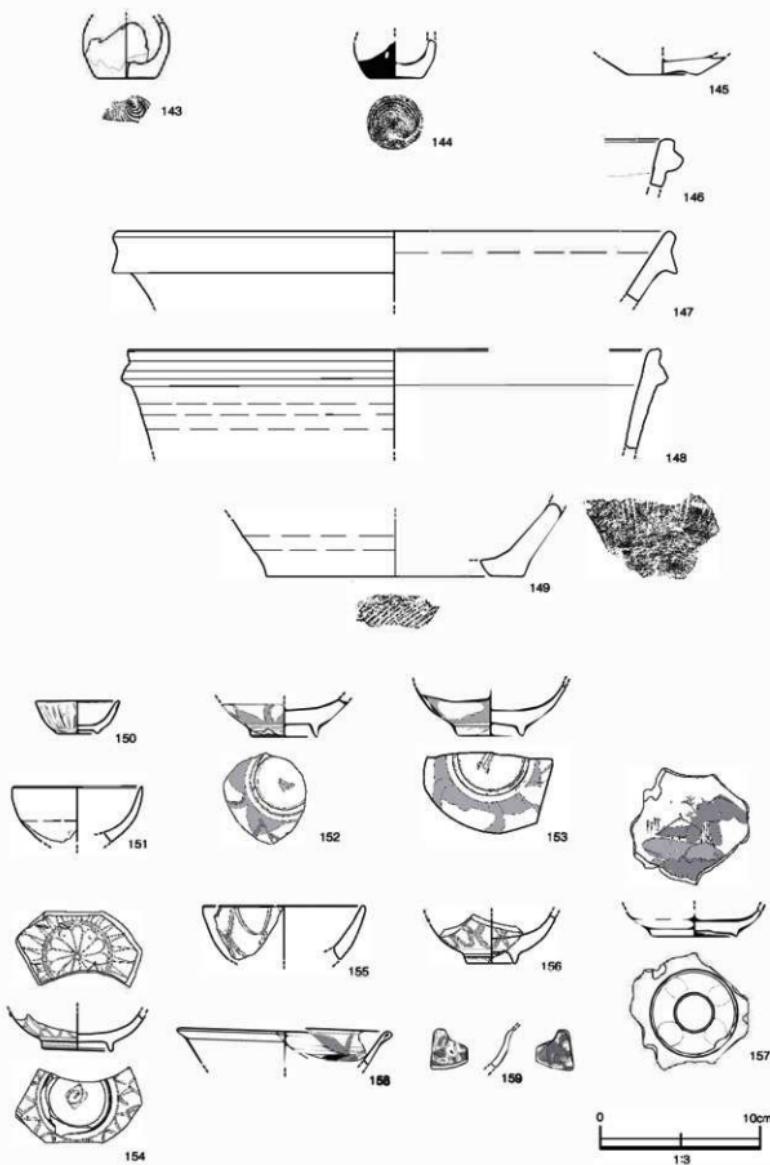
172はS P 3330出土の土師器壺である。器厚が薄い体部は、肥厚する底部から直線的に立ち上がる。2次的被熱のため器面が荒れ、調整痕は確認できない。胎土には石英、長石粒を多量に混入する。173、174は須恵器の蓋である。天井部は、破損した付近から角度を変えて盛り上がる様相を呈する。端部は丸味を持ち、内側に折り曲げられたものである。174は内面に重ね焼きの痕跡が認められる。176は逆台形の低い台が張り付けられた有台坏、177は細い台が付けられた有台坏である。178は長い壺部が直立する壺である。肩は狭く、屈曲して体部に至る。胎土には長石等を混入する。179の壺は外面に格子状のタタキ、内面に青海波のアテ具痕が残る。

B 近世の遺物

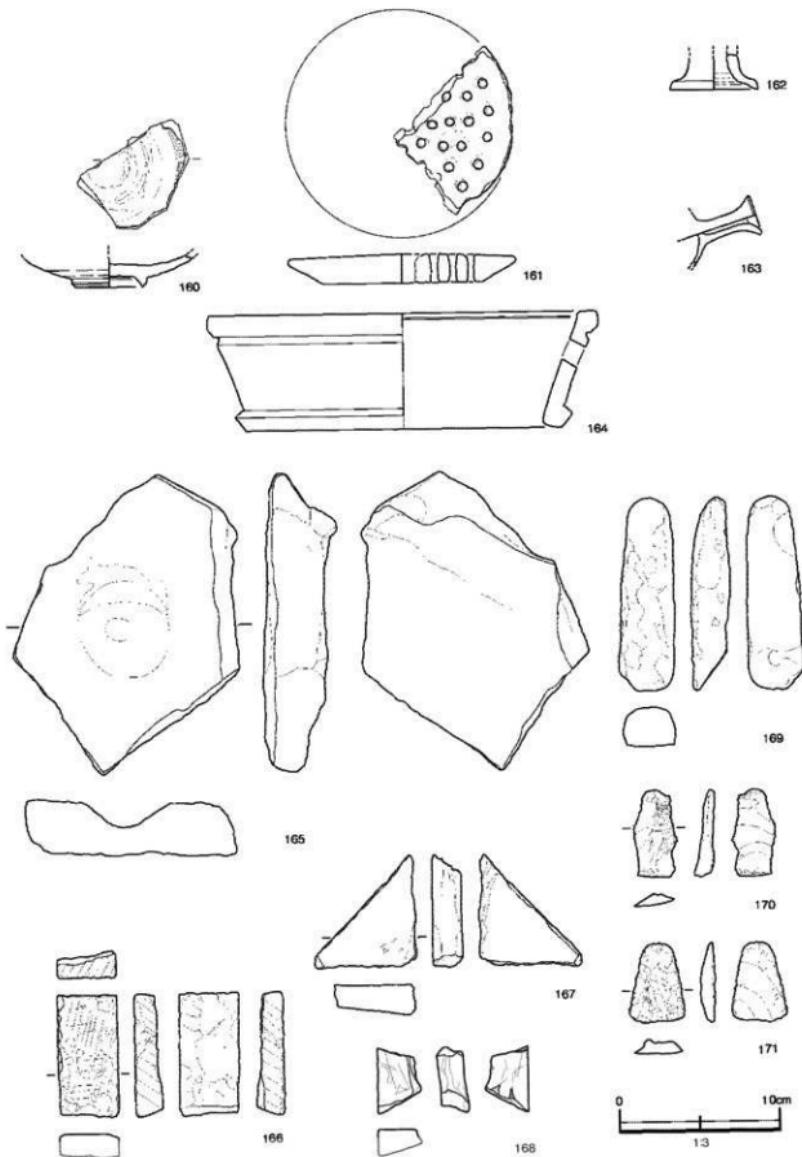
143～164（第71・72図）は近世の陶器と磁器である。143、144は鉄釉がかけられた、陶器の小壺と考えられる。体部下方から底部にかけては、露胎になる。底部は回転糸切りである。145はくすんだ緑色の釉薬の皿である。底部付近は露胎になる。胎土は褐色である。146～149は攝鉢である。146、147は口縁部に厚ぼったい突帯が付くもので、鉄釉がこの突帯上面まで施釉される。内面も口縁端から約2cmのところまで施釉される。148は、断面が三角形の突帯を持ち、残存部位全面に鉄釉がかけられている。148の内面は無施するが、鋲目に鉄釉が認められる。外面は無釉である。底部は静止糸切りである。150は模影で蓮弁を表した磁器の小壺である。151は透明に近い薄い緑色の釉薬がかけられた碗である。胎土は灰色で、器面の発色にも影響していると考えられる。152、153は同じタイプの碗である。胎土は白色で厚ぼったく、釉薬は白濁し透明感がない。154～156は二重網目文の碗である。154は内面にも模様が描かれる。156は高台下部から壺付まで露胎になる。157の蛇の目高台には、円錐ビン状の窓道具の痕跡が認められる。160の内面には、釉薬を搔き取った所に砂目が見られる。161は上面のみ施釉される。162は磁器の仏飯器と考えられる。163は器種不明の取っ手である。



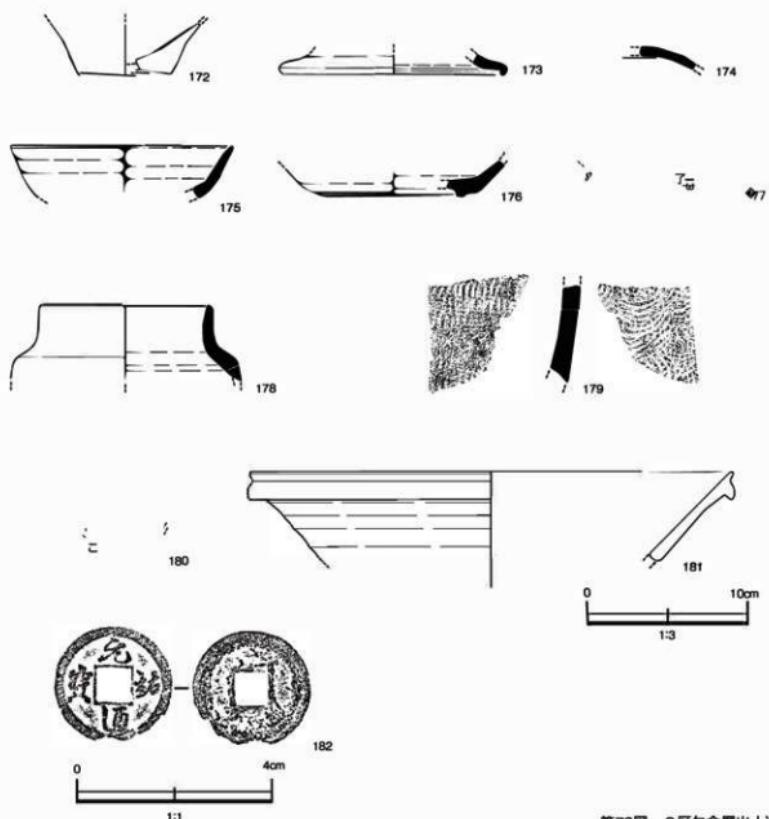
第70図 C区土坑・溝跡出土遺物(1)



第71図 C区溝跡出土遺物(2)



第72図 C区溝跡出土遺物(3)



第73図 C区包含層出土遺物

表3 石器・石製品計測表

No.	出土地点	種別	長さ	幅	厚さ
114	SG2755	砥石	62	49	8
130	試掘 T	石鏟	22	11	2
165	SD3152	凹石	183	130	31
166	SD3410	砥石	(70)	35	(12)
167	SD3751	砥石	69	50	16
168	SP3170	砥石	(34)	(19)	16
169	SD3152	磨石	(118)	31	(20)
170	SD3755	削器	53	24	6.5
171	SX3345	石鏟	50	29	6.5

表4 出土土器・陶磁器観察表1

No.	出土地点	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	内面	外囲	底部切離	備考	
1	SK2056	土師器	壺	(120)		4.5	細紗	良	10 YR 6/2	灰黄褐	ロクロナデ ミガキ	ロクロナデ		内黒	
2	SD2169Y	須恵器	壺	(136)		3	粗紗	堅	N 6/	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
3	SD2170	須恵器	壺	(88)		8	粗紗	堅	10 YR 8/3	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
4	SD2171	須恵器	有台杯	(96)		5	粗紗	堅	25 Y 7/2	灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
5	SK2452	須恵器	甕			11	細紗	堅	N 7/	灰白	河内丹アテ	タタキ			
6	EB2141	壺	甕			9	細紗	堅	10 YR 4/2	灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			
7	SD2494	壺	甕			6	細密	良	10 YR 8/3	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
8	SE2439	壺	片口鉢	(262) (140)	109	11	粗紗	堅	7.5 YR 5/2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ		SD2036 SD2495	
9	SP2167	壺	鉢	(136)		16	粗紗	堅	2.5 YR 6/6	橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
10	SD2495	壺	鉢			13	粗紗	堅	2.5 YR 6/2	灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ			
11	36-84G	須恵器	甕			12	粗紗	堅	25 Y 7/1	灰白	ナデ	ナデ			
12	36-83G	陶器	壺			5	細密	堅	5 YR 3/3	暗赤褐	15mm幅の 御目	鉄點			
13	36-83G	土師器	壺	(60)		7	粗紗	軟	7.5 YR 8/6	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
14	33-85G	陶器	鉢	(80)		8.5	細密	堅	7.5 YR 7/3	にぶい橙	施釉		外面無釉 見込目跡3		
15	36-83G	陶器	甕	(62)		10	細密	堅	N 7/	薄鈍色	白陶		見込目跡2		
16	33-85G	陶器	甕			7	細密	堅	N 7/	薄鈍色			2次蓄熱		
17	34-85G	陶器	甕			8.5	細密	堅	N 15/	褐色			内外面鉄點		
18	SD2376	攲文	深鉢				細紗	軟	10 YR 5/2	灰黄褐					
51	SK2806	須恵器	壺	(150) (56)	40	4	細密	堅	5 Y 6/1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SG3026	
52	SK2806	須恵器	壺	(156)		4	粗紗	軟	5 Y 8/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
53	SK2806	土師器	壺	(54)		3	粗紗	軟	5 YR 7/8	橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
54	SK2891	須恵器	甕	(100)		7.5	細紗	堅	N 6/	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
55	SG2755	須恵器	甕			6	粗紗	堅	N 7/	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
56	SG2755	須恵器	壺	(130) (48)	44	4.5	細紗	良	5 Y 7/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
57	SG2755	須恵器	壺	(130)		3.5	粗紗	堅	N 5/	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
58	SG2755	須恵器	壺	(170)		3	細密	堅	N 6/	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
59	SG2755	須恵器	壺	(150)		3	粗紗	堅	N 6/	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
60	SG3026	須恵器	無台杯	(144)	62	41	5	細紗	堅	2.5 Y 7/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
61	SG3026	須恵器	無台杯	(144)	55	48	4	粗紗	軟	2.5 Y 8/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	器底(外底)
62	SG3026	須恵器	無台杯	(134)	52	46	4	粗紗	堅	2.5 Y 7/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	(SK2806)
63	SG3026	須恵器	無台杯	(140)	56	46	4	粗紗	堅	2.5 Y 6/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
64	SG3026	須恵器	無台杯	(158)	68	41	4	粗紗	堅	10 YR 8/4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
65	SG3026	須恵器	壺	(142)		4	粗紗	堅	2.5 Y 6/1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
66	SG3026	須恵器	無台杯	(130) (54)	39	4	粗紗	堅	2.5 Y 7/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
67	SG3026	須恵器	無台杯		52	4	粗紗	堅	2.5 Y 6/1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
68	SG2755	須恵器	模			6	細紗	堅	N 5/	灰	青海波アテ	格子状 タタキ			
69	SG3026	須恵器	甕	(130)		2.5	細密	堅	10 YR 6/2	灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			
70	SG3026	須恵器	甕	(142)		5.5	細密	堅	7.5 YR 5/2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ			
71	SG3026	須恵器	模	(220)		10	細紗	堅	5 Y 7/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
72	SG3026	須恵器	甕			9	細紗	堅	10 YR 7/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
73	SG3026	須恵器	模	(350)		10	細密	堅	N 6/	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	タタキ		
74	SG3026	須恵器	模			7.5	細密	堅	2.5 Y 6/1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	タタキ		
75	SG3026	須恵器	模	(110)		9.5	細紗	堅	2.5 Y 6/1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	タタキ		
76	SG3026	須恵器	模	(126)		10	粗紗	堅	10 YR 7/2	にぶい黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	タタキ		

表5 出出土器・陶器観察表2

No.	出土地点	器種	器形	口径	底深	器高	器厚	胎土	焼成	色調	内面	外面	底部切端	備考	
77	SG3026	須恵器	甕	(130)	110	粗砂	堅	2.5 YR	5/1	黄灰	青海波アテ	ケズリ			
78	SG3026	土師器	無台杯	134	51	43	4	緻密	良	10 YR	8/4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ 回転条切り	
79	SG3026	土師器	無台杯 (143)	(58)	50	3	粗砂	堅	7.5 YR	8/6	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ 回転条切り		
80	SG3026	土師器	無台杯 (136)	50	45	3	粗砂	軟	7.5 YR	8/4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ 回転条切り	2次火熱	
81	SG3026	土師器	無台杯	124	50	50	4	緻密	良	10 YR	8/3	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ 回転条切り	黒色処理力
82	SG3026	土師器	無台杯	42	5	粗砂	軟	7.5 YR	8/4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ 回転条切り	2次火熱		
83	SG3026	土師器	無台杯	54	5	粗砂	堅	7.5 YR	8/6	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ 回転条切り			
84	SG3026	土師器	有台杯	54	5	粗砂	良	7.5 YR	8/6	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ 回転条切り			
85	SG3026	土師器	有内壺	60	5	粗砂	堅	10 YR	8/3	浅黄橙	不明	不明	回転条切り	2次火熱	
86	SG3026	土師器	無台杯 (147)	(62)	41	4	粗砂	軟	2.5 Y	7/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ 回転条切り		
87	SG3026	土師器	杯	(60)	5	粗砂	軟	10 YR	8/4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ 回転条切り	内・外面塗		
88	SG3026	土師器	杯 (140)	3.5	緻密	良	7.5 YR	8/6	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ				
89	SG3026	土師器	杯 (140)	4.5	粗砂	堅	7.5 YR	8/6	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ				
90	SG3026	土師器	杯 (150)	4.5	粗砂	軟	10 YR	8/4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ				
91	SG3026	土師器	杯 (142)	4	粗砂	軟	2.5 Y	7/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		悉誠		
92	SG3026	土師器	有台杯 (136)	66	59	5	粗砂	堅	7.5 YR	8/3	浅黄橙	ミガキ	ロクロナデ 回転条切り	内面黒色處理	
93	SC3026	土師器	有台杯 (142)	5	粗砂	堅	10 YR	8/3	浅黄橙	ミガキ	ロクロナデ 回転条切り	内面黒色處理			
94	SG3026	土師器	有台杯 (60)	5	粗砂	軟	7.5 YR	8/6	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	内面黒色處理		
95	SG3026	土師器	有台杯 (66)	5	粗砂	良	10 YR	8/4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		内面黒色處理 放射状压痕		
96	SG3026	土師器	有台杯 (66)	5	粗砂	軟	7.5 YR	8/4	浅黄橙	ミガキ	ロクロナデ 回転条切り	内面黒色處理	2次火熱		
97	SG3026	土師器	有台杯	4	粗砂	軟	10 YR	4/1	褐灰	ミガキ	ミガキ	不明	内外黒色處理 2次火熱		
98	72-57G	土師器	有台杯	80	3	粗砂	良	10 YR	5/1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ		内面黒色處理 放射状压痕	
99	SG3026	土師器	杯 (110)	4	緻密	良	10 YR	8/3	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		内面黒色處理		
100	SG3026	土師器	杯 (120)	5	緻密	良	10 YR	7/3	にふい黄橙	ミガキ	ナデ		内面黒色處理		
101	SG3026	土師器	杯 (130)	4	緻密	軟	7.5 YR	8/4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		内面黒色處理		
102	SG3026	土師器	杯 (136) (56) 445	5	緻密	良	2.5 Y	8/2	灰白	ミガキ	ロクロナデ 回転条切り	内面黒色處理			
103	SG3026	土師器	無台杯 (136)	62	56	4	緻密	堅	10 YR	8/3	浅黄橙	ミガキ	ロクロナデ 回転条切り	内面黒色處理 2次火熱	
104	SG3026	土師器	杯 (150)	4	粗砂	良	10 YR	8/4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		内面黒色處理		
105	SG3026	土師器	杯 (143)	3	緻密	堅	10 YR	8/4	浅黄橙	ミガキ	ロクロナデ		内面黒色處理 2次火熱		
106	SG3026	土師器	無台杯	48	5	粗砂	軟	10 YR	8/2	灰白	ミガキ	ロクロナデ 回転条切り	内面黒色處理		
107	SG3026	土師器	甕	(70)	4	粗砂	良	7.5 YR	8/4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ ハケメ	ケズリ		
108	SG3026	土師器	甕	(130)	65	粗砂	良	10 YR	7/2	にふい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ		
109	SG3026	土師器	甕	(220)	6.5	粗砂	良	10 YR	8/4	浅黄橙	ハケメ	ハケメ			
110	SG3026	土師器	甕	(184)	6	粗砂	良	10 YR	8/3	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
111	SG3026	土師器	甕	(230)	6	粗砂	良	5 YR	7/6	橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ハケメ		
112	SG3026	土師器	甕	(260)	6	粗砂	良	10 YR	8/3	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
113	SG3026	土師器	甕	(120)	3	粗砂	良	10 YR	8/4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		葉付着	
115	SX2886	須恵器	环	(58)	5	粗砂	堅	5 Y	6/1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転条切り		
116	SX2880	須恵器	环	(180)	6	粗砂	堅	N	6/	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
117	SX2886	土師器	甕	(180)	5.5	粗砂	良	10 YR	7/4	にふい黄橙	ミガキ	ロクロナデ		内面黒色處理	
122	72-58G	須恵器	甕	10	緻密	堅	2.5 Y	6/2	灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ				
123	73-57G	須恵器	甕	14	粗砂	堅	N	4/	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		波状文		
124	63-61G	土師器	有台杯	(64)	6	緻密	良	7.5 YR	8/4	浅黄橙	ミガキ	ロクロナデ 回転条切り	内面黒色處理		

表6 出土土器・陶磁器観察表3

No.	出土地点	器種	器形	口径	底径	基高	壁厚	施土	焼成	色調	内面	外面	底部切離	備考		
125	南跡水路	土器	有台坏	(74)	6	細砂	良	5 YR	7/8	橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り			
126	70-59G	かわらけ		(150)	6	織密	良	25 YR	6/8	橙	ロクロナデ	ロクロナデ				
127	62-54G	壺器系	鉢		7	織密	堅	25 YR	5/2	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ				
128	67-60G	壺器系	擂鉢	(12)	8	細砂	堅	25 Y	6/2	灰褐色	15cmに8本	ケズリ	ヘラ切り	漆による接合		
129	72-58G	壺器系	甕		17	細砂	堅	10 YR	5/2	灰黃褐色	ロクロナデ	ナゲ				
131	SK3314	土器	甕	52	10	細砂	良	10 YR	5/3	に赤い黄褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ			
132	SD3152	土器	有台坏	72	11	13	織密	良	10 YR	7/4	に赤い黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
133	SD3751	須恵器	坏	(7)	6	織密	堅	5 Y	6/1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り			
137	SD3755	須恵器	甕	126	15	織密	堅	25 Y	7/2	灰黃褐色	条線状アテ	タタキ				
138	SD3751	須恵器	甕		8	細砂	堅	5 Y	7/1	灰白	ロクロナデ	2段の模様	波状文	内属		
139	SD3755	須恵器	甕		125	細砂	堅	25 Y	7/3	浅黃褐色	条線状アテ	格子タタキ				
140	SD3755	須恵器	甕		11	細砂	堅	N	7/	灰白	同心円アテ	格子タタキ				
141	SD3152	須恵器	甕		148	細砂	堅	5 Y	5/1	灰	ハケメ	ハケメ				
142	SD3410	須恵器	甕		10	織密	良	25 Y	7/1	灰白	アテ・ナゲ	タタキ				
143	SD3875	陶器	小甕	36	11	織密	堅	5 Y	6/1	灰	無輪	鉄輪	回転糸切り			
144	SD3315	陶器	小甕	34	5.5	織密	堅	25 Y	7/1	灰白	無輪	素	回転糸切り			
145	SD3144	陶器	甕	44	9.9	織密	良	25 Y	6/1	灰褐色	灰暗	下半露胎	削出し高台			
146	SD3144	陶器	鉢		8.5	織密	良	75 YR	4/3	褐	口縁部施釉	口縁部施釉				
147	SD3141	陶器	鉢	170	18	織密	堅	75 YR	2/1	黒	鉄輪	鉄輪				
148	SD3667	陶器	擂鉢	326	15	織密	良	75 YR	4/4	褐	口縁部施釉	口縁部施釉				
149	SD3152	陶器	擂鉢	158	35	18	織密	堅	5 YR	6/6	橙	25cmで8本	無輪	停止糸切り		
150	SD3753	磁器	小碗	52	26	20	37	織密	堅	N	9.5/	白/鉛白色	施釉白濁	剥離弁	墨付露胎	
151	SD3148	磁器	碗	(80)	45	織密	堅	25 YR	5/2	青	脚召来					
152	SD3152	磁器	碗	40	20	10.4	織密	堅	N	9.5/	白/鉛白色	雪輪草花文	墨付露胎			
153	SD3261	磁器	碗	40	11	織密	堅	N	9.5/	白/鉛白色	雪輪草花文	高台内砂目				
154	SD3875	磁器	碗	(42)	5	織密	堅	N	9.5/	白/鉛白色	菊花文	二重網口文	「福」			
155	SD3751	磁器	碗	(10)	7	織密	堅	N	7/	薄鈍色	無文	二重網口文				
156	SD3755	磁器	碗		3	織密	堅	N	7/	薄鈍色	無文	二重網口文				
157	SD3228	磁器	皿	53	3.5	織密	堅	N	9.5/	白/鉛白色	接觸山水文	蛇の目高台				
158	SD3228	磁器	碗	132	3.6	織密	堅	N	9.5/	白/鉛白色	草花文		口縁部斜溝			
159	SD3765	磁器	皿		3.5	織密	堅	N	9.5/	白/鉛白色	草花文	牡丹文	2次火熱			
160	SD3751	陶器	皿	(42)	6	織密	堅	10 YR	8/3	浅黃褐色	着付	下半露胎	下半露胎			
161	SD3150	陶器	湯沸し		17.5	17	細砂	堅	5 YR	6/1	茶葉	施釉	無輪	径5mmの孔		
162	SD3753	磁器	仏教器	(54)	6	織密	堅	N	7/	薄鈍色	透明釉	透明釉				
163	SD3753	磁器	不明	25	4.5	織密	堅	5 FB	3/4	絶青	一部無輪					
164	SD3150	瓦質陶器	五徳	240	194	71	14	細砂	良	5 YR	6/8	橙		円形の孔		
172	SP3330	土器	甕	56	16	細砂	良	7.5 YR	7/4	に赤い斑	摩滅	摩滅	摩滅	2次火熱		
173	101-31G	須恵器	甕	140	5.5	細砂	良	25 Y	7/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ				
174	109-24G	須恵器	甕		4.5	細砂	良	25 Y	6/2	灰黃褐色	ロクロナデ	ロクロナデ				
175	104-25G	須恵器	無台坏	140	22	7	細砂	良	10 YR	7/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
176	106-29G	須恵器	有台坏	88	8.7	細砂	良	25 Y	7/1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ				
177	X O	須恵器	有台坏		6	織密	堅	10 Y	6/1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
178	106-29G	須恵器	短颈甕	100	9.5	細砂	堅	10 YR	6/1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
179	104-29G	須恵器	甕		11	細砂	堅	25 Y	6/1	黃灰	青海波アテ	格子タタキ				
180	SD3751	磁器	小碗	29	8	織密	堅	N	7/	薄鈍色	透明釉	透明釉	墨付露胎			
181	103-26G	陶器	擂鉢	296	13	細砂	堅	7.5 YR	3/3	暗褐色	ロクロナデ	ロクロナデ				

表7 木製品計測表

No.	出土地点	SB	登録番号	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
19	EB2025	SB2500	RW 1 -①	礎板	(335)	(81)	(19)
20	EB2025	SB2500	RW 1	礎板	(329)	65.5	(2.5)
21	EB2003		RW 2	礎板	(197)	(112)	(50)
22	EB2021		RW 3	礎板	(149)	(44)	(8)
23	EB2021		RW 3	礎板	(160)	(68)	(43)
24	EB2058	SB2500	RW12	礎板	(136)	(54)	(32)
25	EB2471	SB2500	RW 4	礎板	(283)	67.5	(22.7)
26	EB2476	SB2500		礎板	(101)	(46)	(23)
27	SE2094			片戸枠	(136)	19	9
28	SE2439		RW 8 -③	片戸枠	174	54	33
29	SE2439		RW 8 -⑤	片戸枠	(370)	(55)	(36)
30	SE2439		RW 8 -⑥	片戸枠	(280)	63	45
31	SE2439		RW 8 -①	片戸枠	742	55	63
32	SE2439		RW 8 -②	片戸枠	(683)	59	(55)
33	SE2439		RW 8 -③	片戸枠	678	40	39
34	SE2439		RW 8 -④	片戸枠	(714)	53	63
35	SE2439		RW 8 -⑦	片戸枠	(562)	148	16
36	SE2439		RW 8 -⑧	片戸枠	(265)	140	15
37	SE2439		RW 8 -⑨	片戸枠	(230)	88	13
38	SE2439		RW 8 -⑩	片戸枠	(258)	300	12
39	SX2001		RW 2 2 -①	橋材	(472)	165	25
40	SX2001		RW 2 2 -②	橋材	(419)	148	(27)
41	SX2001		RW 2 2 -③	橋材	(445)	174	24.5
42	SX2001		RW 2 2 -④	橋材	(442)	179	(27)
43	SX2001		RW 2 2 -⑤	橋材	(45.8)	8.1	25
44	SX2001		RW 2 2 -⑥	橋材	(448)	168	23
45	SX2001		RW 2 2 -⑦	橋材	(494)	172	32
46	SX2001		RW 2 2 -⑧	橋材	(482)	167	(26.5)
47	SX2001		RW 2 2 -⑨	橋材	(404)	125	22
48	SX2001		RW 2 2 -⑩	橋材	(506)	173	10
49	SX2001		RW 2 2 -⑪	橋材	(514)	130	24
501	SX2001		RW22	橋底板	753.5	218	28
502	SX2001		RW22	橋底板	886	283	28.5
503	SX2001		RW22	橋底板	870	177.5	28
504	SX2001		RW22	橋底板	740	20.5	27

IV 総 括

檜原遺跡は、平成18、19年の二カ年に渡り、11,900m²の発掘調査を行った。調査区はA～C区までの3箇所を設定した。各調査区の遺構と遺物についてはⅢ章で述べた。ここでは各区の主体となる年代、性格等を検証して総括に代えたい。

A区の主要遺構は、掘立柱建物跡、井戸跡、区画溝である。遺構配置の概略は、S D2495が当地区を大区画し、その中の建物を区画溝（S D2036）または垣根状の区画施設（S D2227）によって取り囲む。その中には井戸も設けられる。一方、区画施設の外側では、遺構が希薄になり、生活の場ではないことがうかがえる。

これらの遺構は、重複する掘立柱建物跡等から、4期の変遷が想定される。しかし、遺構間の切り合いにより新旧関係が明らかなのは、S B2500とS B2606に限られるため、時間経過に沿った変遷を追うのは不可能である。そこで、建物跡に付随すると考えられる区画溝あるいは区画施設、井戸跡等からおおよその変遷を想定すると、以下のような組み合わせが考えられる。

S B2606の時期	S D2027	S E2572
S B2607の時期	S E2126	S D2088
S B2500の時期	S B2609	S D2036 S E2439
S B2608の時期	S D2227	S E2093

A区の遺構の性格は、出土遺物の質や量に問題が残るもの、建物の規模が大型化し、付属する井戸や区画施設も充実してくることなどから、土地に根差した有力層の屋敷跡と推定しておく。

主体となる時期は、E B2141、2618、S E2439等から出土した壺形器陶器の年代観により、13世紀を上限とする時期と考えられる。

本調査区の南東に位置する第1次調査からは、同時期の掘立柱建物跡や矩形に掘られた区画溝等が検出されている。このことからも、上無川右岸の低地に、中世の村が拓け、家屋が点在した景観を読み取ることができる。

B区の主要遺構は、焼土遺構と呼称したものと、竪穴状遺構である。20基検出された焼土遺構は、5種類のタイプに分けることができる。①方形、②長方形、③長方

形（大型）、④楕円形、⑤不整形である。これらに共通するのは、埋土中に焼土と炭化物を多量に含むことと、壁や床面が焼けていることがあげられる。焼成されたものを知る手がかりとするため、調査中に採取した埋土にフローティングを行ったが、得るものはなかった。また、遺構内からも若干の土器片以外に出土遺物は無く、用途は不明である。

遺跡の年代と性格は、竪穴状遺構や土坑、河川跡からは、底径に小型化が見られる回転糸切りの無台窓を主体とする遺物が出土していること。A区やC区で見られるような遺構、遺物のあり方とは異なる点等からも、B区は他の2区から独立した、古代の集落と判断される。集落の具体的な年代は、出土遺物の特徴から、9世紀第3四半期頃と考えられる。また、集落の本体となるのは、本調査区より北東側の、微高地にある可能性が高いと推測する。本調査区の遺構は、集落の周辺に配置され、火を使い、おそらく水も必要とした、何らかの生産活動に伴うものと考えている。

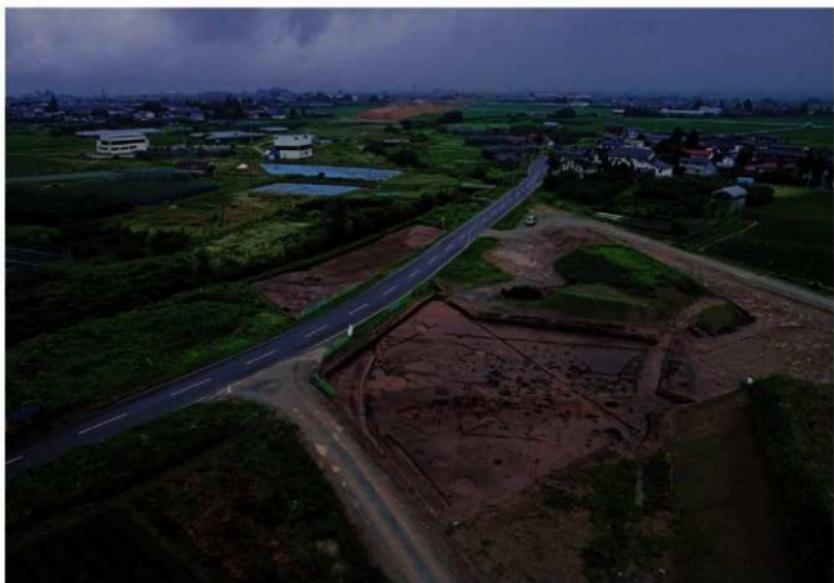
C区の主要遺構は溝跡である。溝跡の多くは、東西方向にある。溝跡間の距離は、6m～14mまであり、一定ではない。方向についても、北寄りにずれるものがあり、正確に測られたものではないと考えられる。南北の溝跡では、S D3152が幅、深さとも抜きん出ていて、当地区の中心となる溝である。溝跡からは、古代の遺物も若干出土しているが、18世紀代の肥前系の磁器や同じく波佐見産と考えられる磁器がこれらの遺構の年代を示すものと考えられる。溝跡に挟まれた場所には、数多くの柱穴を検出している。明瞭な柱痕が認められる柱穴も少なくなく、建物が存在した可能性は、十分に推測される。遺構の広がりが想定される南側は、上無川によって削り取られたと思われる。これらのことから、C区は区画溝に囲まれた近世集落の一部と考えられる。

檜原遺跡と周辺一帯には、縄文時代から近世に至るまでの長い時間、適地に生活の場を作ってきたことがわかる。周辺の資料との比較と、より広い範囲の資料とを対比して検討することを今後の課題としておく。

参考文献

- 南陽市史編纂委員会 1987 「南陽市史 上巻」南陽市
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2002 「鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第99集)
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2006 「鶴の木館跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第150集)
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2007 「灰植遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集)
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2007 「柳原道路発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第165集)
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2007 「大坂遺跡・西中上遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第158集)
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2008 「中落合遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第168集)
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2009 「上大作糠遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第176集)

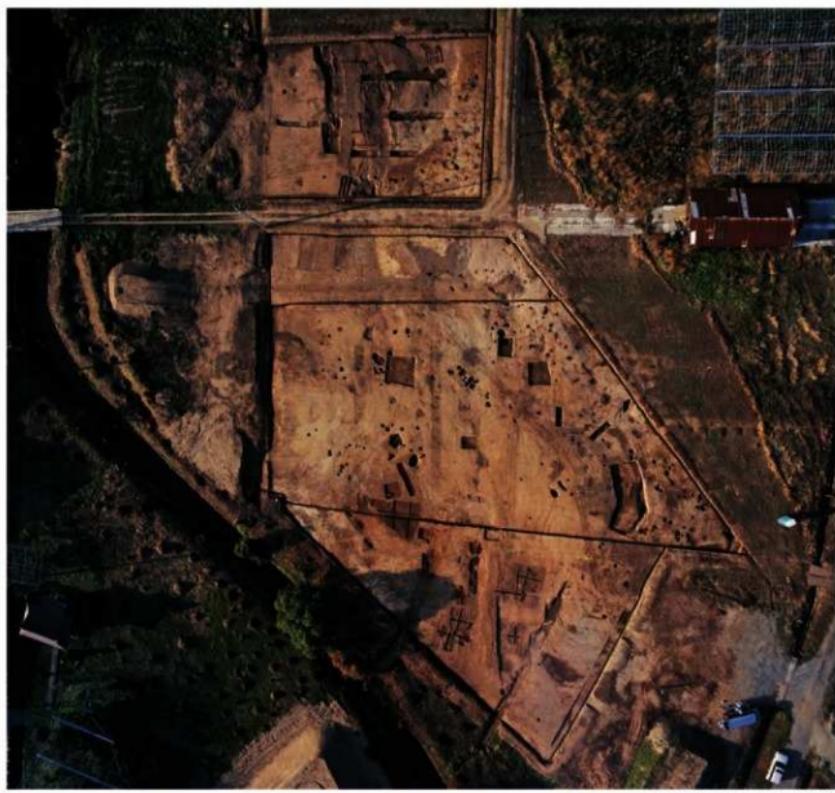
写真図版



A区空中写真(北西から)



A区北側空中写真(写真上が西)



B区空中写真(写真上が北西)



B区空中写真(北から)



C区空中写真(北西から)



C区空中写真(写真上が北東)



A区西側遺構検出状況(西から)



A区西側完掘状況(南から)



A区西側遺構完掘状況(西から)



A区西側遺構完掘状況(南西から)



SB2500(南西から)



EB2003(北西から)



EB2025(南から)



EB2050(南から)



EB2052(西から)



SB2606(南西から)



EB2400・SD2091(東から)



SE2093・2094・2439完掘状況(南西から)



SE2093・2094・2439完掘状況(北西から)



SE2439井戸枠検出状況(西から)



SE2439土層断面(南西から)



SE2439完掘状況(南西から)



SE2093土層断面(南西から)



SE2094土層断面(南西から)



SE2093・SE2094完掘状況
(南東から)



SE2107土層断面(南西から)



SE2126土層断面(南西から)



SE2199土層断面(南から)



SE2420土層断面(南から)



SE2420完掘状況(南から)



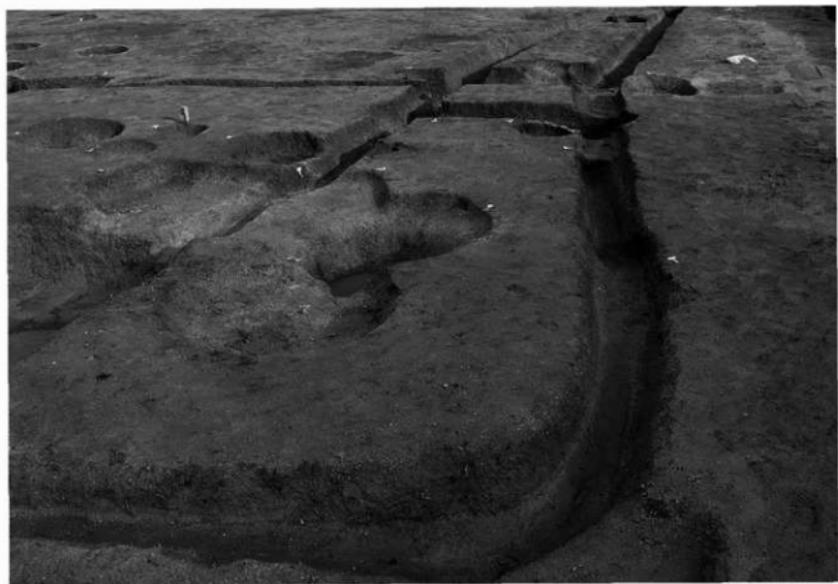
SD2003・2224完掘状況(南西から)



SD2227完掘状況(南西から)



SD2227完掘状況(南東から)



SD2227完掘状況(北西から)



SD2227板塙跡検出状況(東から)



SD2227板塙跡土層断面(西から)



SK2083土層断面(南から)



SK2083完掘状況(南東から)



SK2092土層断面(西から)



SK2095土層断面(南西から)



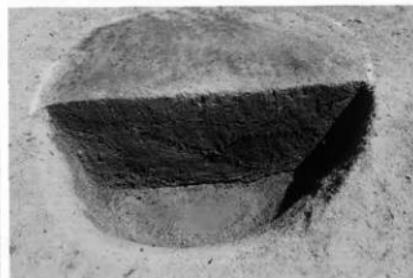
SK2109土層断面(南東から)



SK2230土層断面(南から)



SK2139土層断面(南から)



SK2372土層断面(南から)



A区東側完掘状況全景(南から)



A区東側完掘状況(南東から)



B区北側遺構検出状況(西から)



B区南側遺構検出状況(西から)



B区遺構完掘状況(東から)



B区遺構完掘状況(西から)



B区北側遺構完掘状況(西から)



B区北側遺構完掘状況(南から)



B区北側遺構完掘状況(南東から)



B区南側遺構完掘状況(西から)



SX2709完掘状況(北から)



SX2713・2714・2715
完掘状況(南から)



SX2756完掘状況(西から)



SX2756土層断面(南西から)



SX2886完掘状況(東から)



SX2890完掘状況(東から)



SX2921・2922完掘状況(南から)



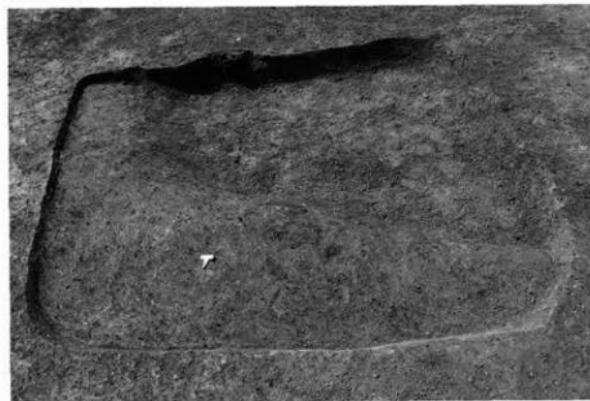
SX2943完掘状況(東から)



SX2999完掘状況(北から)



SX3000完掘状況(南から)



SX3002完掘状況(東から)



SX3003土層断面(南東から)



SX3003完掘状況(南から)



SX3009～3012完掘状況(南から)



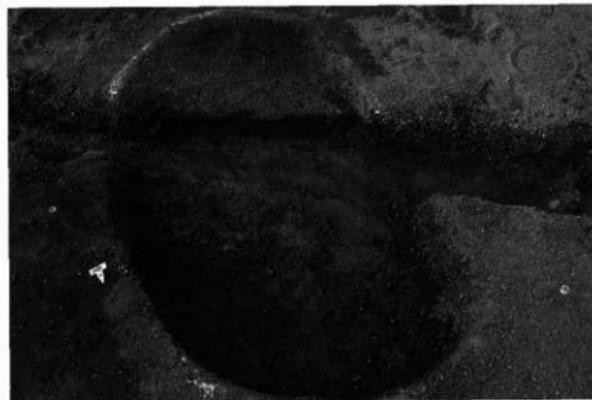
SX3015完掘状況(東から)



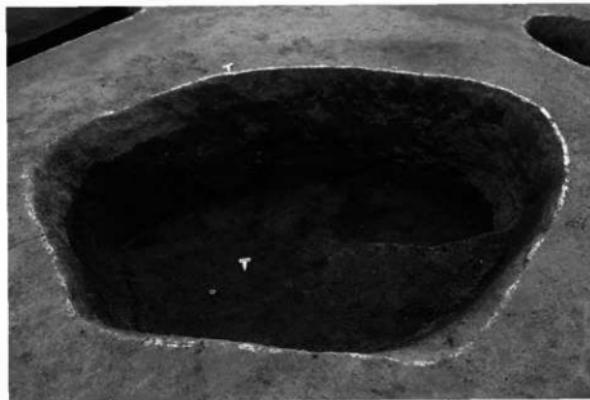
SX3018完掘状況(南東から)



SX3019完掘状況(南東から)



SX3020完掘状況(南東から)



SX3025完掘状況(南東から)



SX3041・3042土層断面(東から)



SX3041完掘状況(南から)



SX3042完掘状況(南から)



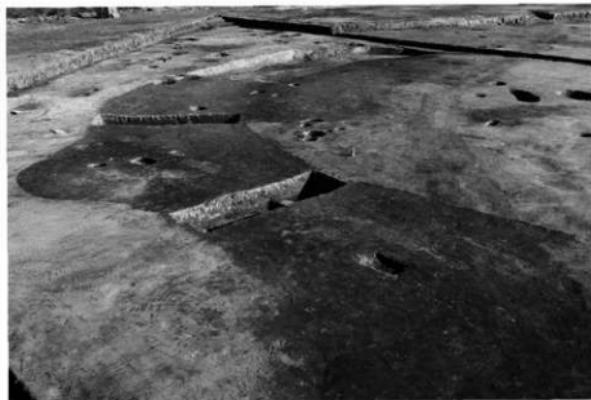
SG2755河川跡北トレンチ土層断面
(南西から)



SG2755河川跡中央トレンチ土層断面
(南西から)



SG3026完掘状況(南東から)



SG3026完掘状況(北西から)



SG3026土層断面(南から)



SK2806完掘状況(東から)



SK2891土層断面(東から)



SK2892完掘状況(西から)



SK2952完掘状況(西から)



C区遺構検出状況(北西から)



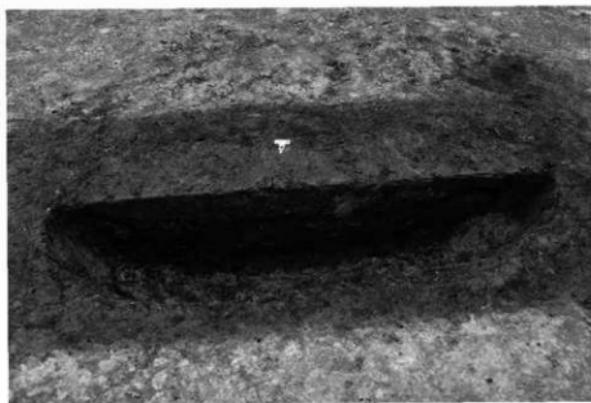
C区遺構完掘状況(北西から)



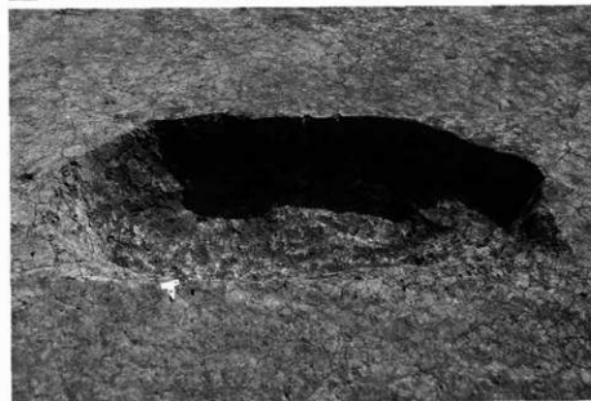
SD3152完掘状況(南から)



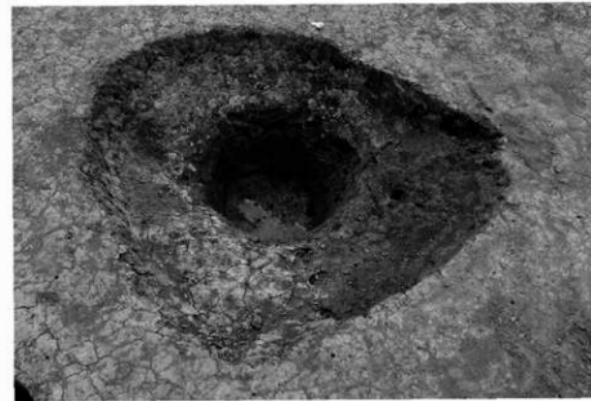
SD3152完掘状況(北から)



SK3578土層断面(北東から)



SK3578完掘状況(北東から)



SK3314完掘状況(北から)



SD3152-3751土層断面(北から)



SD3179完掘状況(東から)



SD3305完掘状況(北から)



SD3674土層断面(南西から)



SD3315完掘状況(西から)



SD3674完掘状況(北から)



SD3753土層断面(南から)



SD3753完掘状況(西から)



SD3755完掘状況(東から)



104-24G柱穴群(北から)



104-26・27G柱穴群(東から)



105-29G柱穴群(西から)



106-26-27G柱穴群(西から)

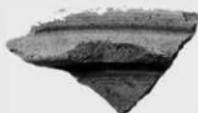


101・102-26・17G柱穴群
(北東から)



南端低地部完掘状況(北から)



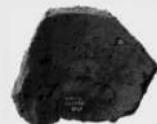


1~3,5~7,13



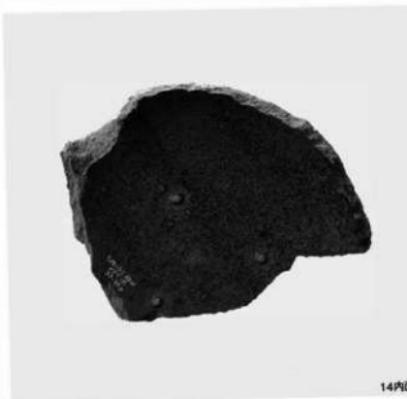
8,9外面

8,9里面



8,10外面

8,10里面





56



60



56底部



60底部



61



62



61底部



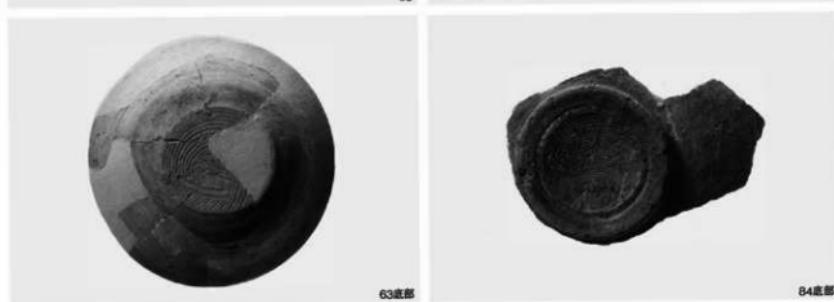
62底部



63



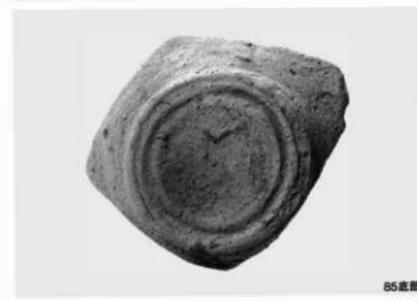
64



63底部



64底部



65



95



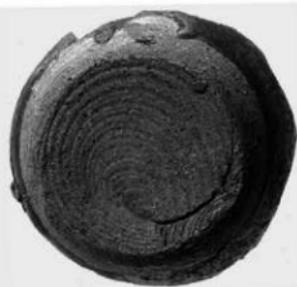
98



144



98底部



144底部



152



153



152底部



153底部



75



77



78



79



80



81



82



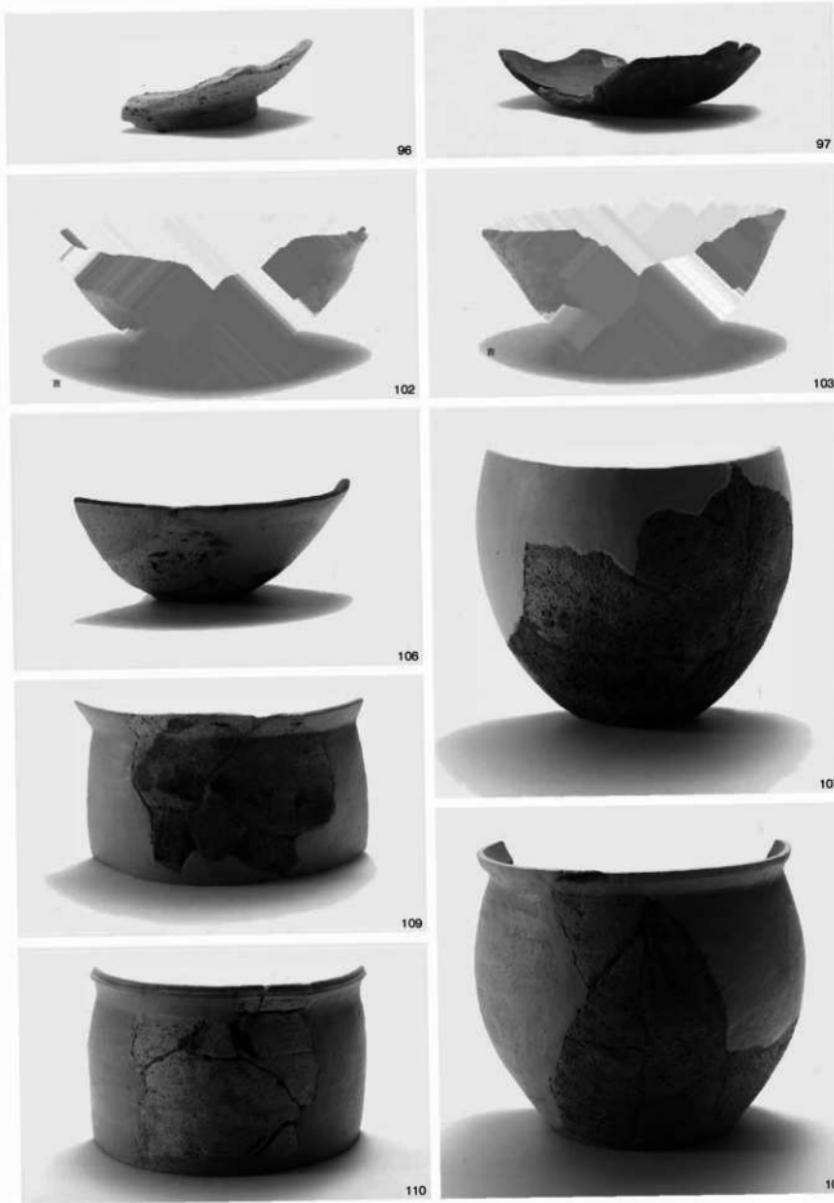
92

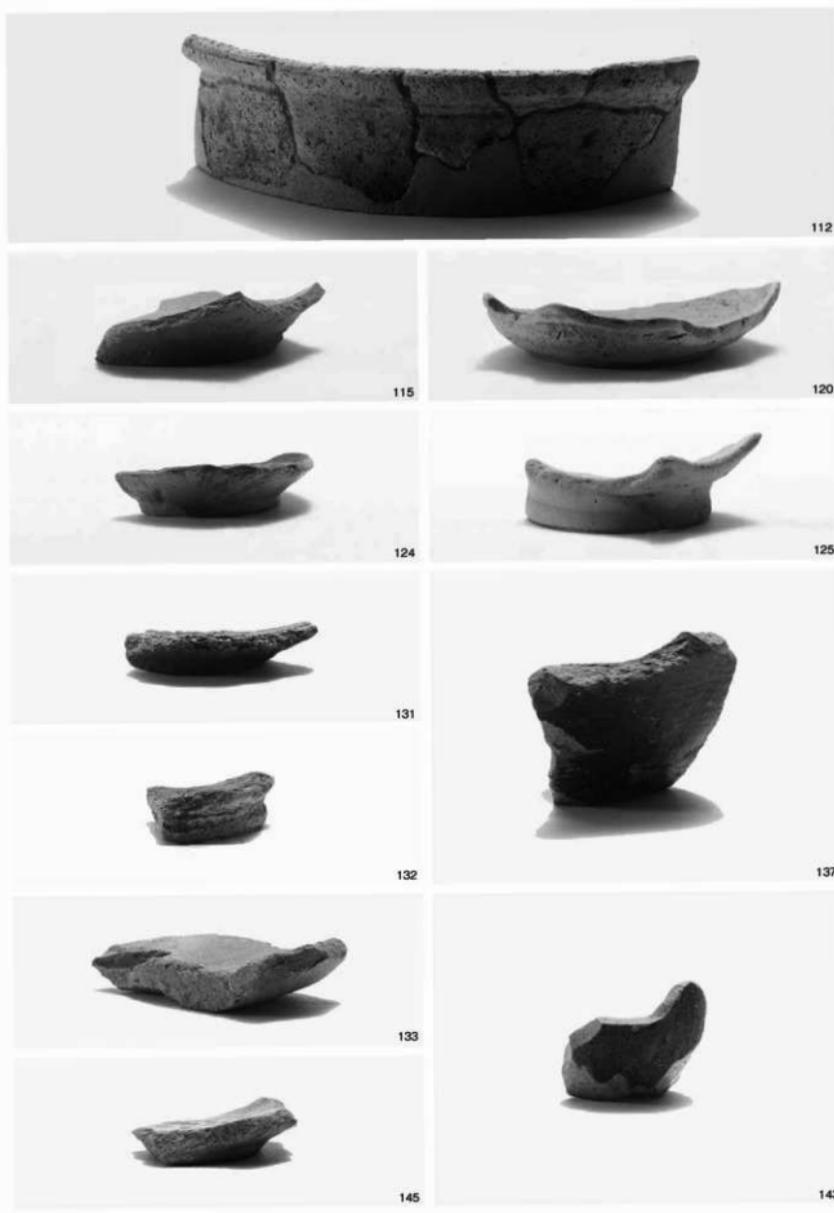


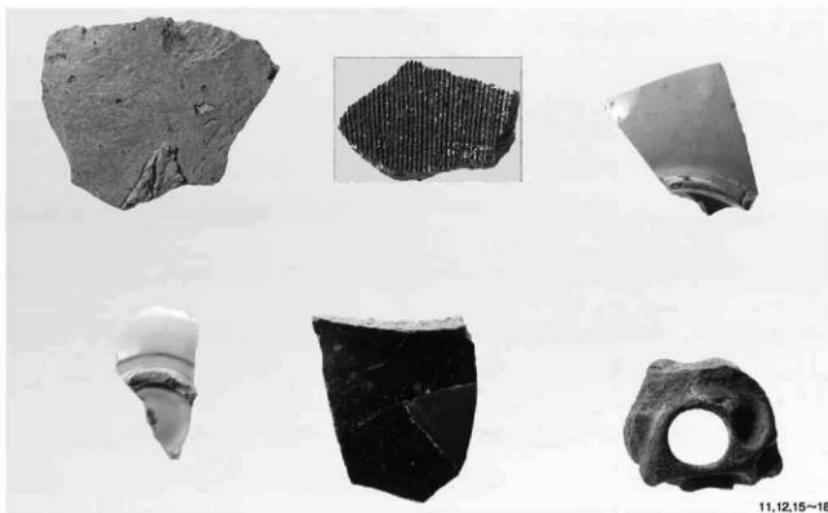
83



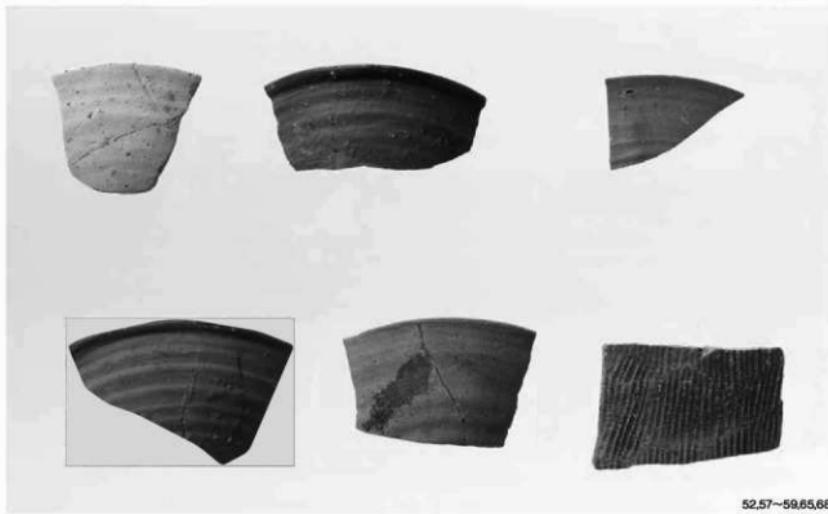
93







11,12,15~18



52,57~59,65,68



69,70

74 外面

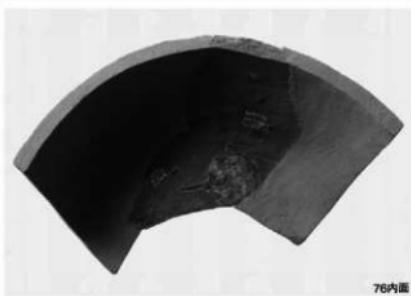
74 内面



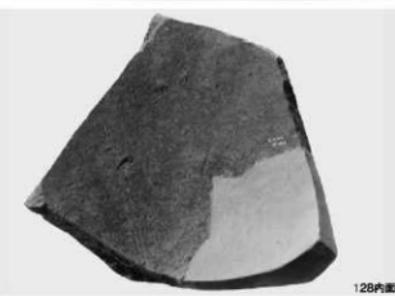
76



128



76内面



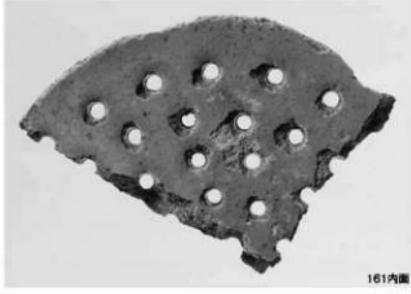
128内面



161



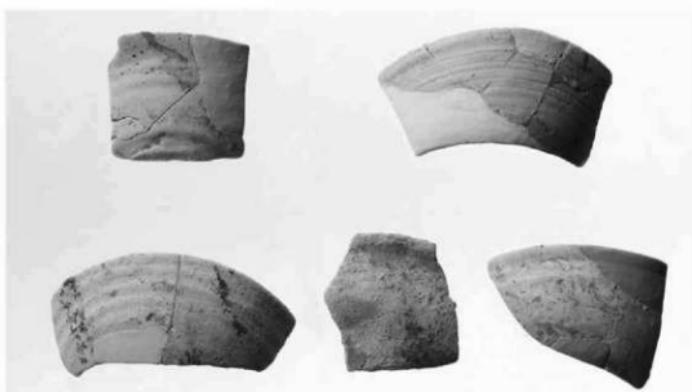
165



161内面



165上面



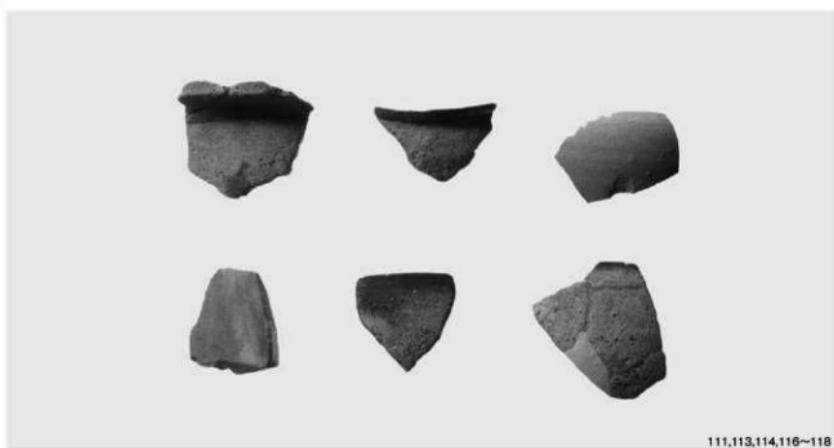
86,88~91



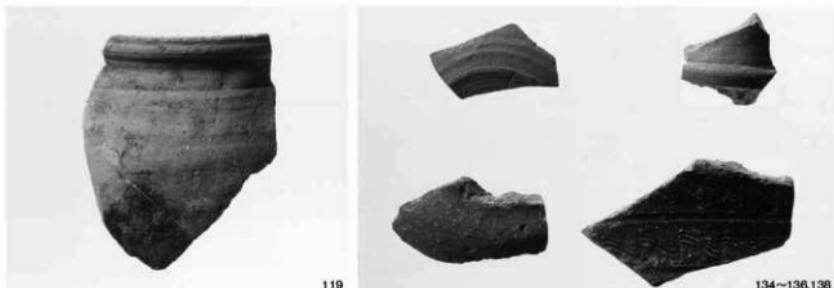
99~101,104,105外面



99~101,104,105内面



111,113,114,116~118

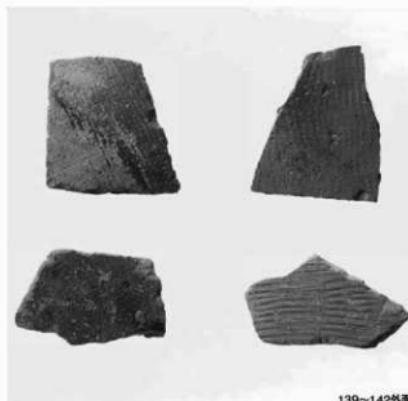


119

134~136,138



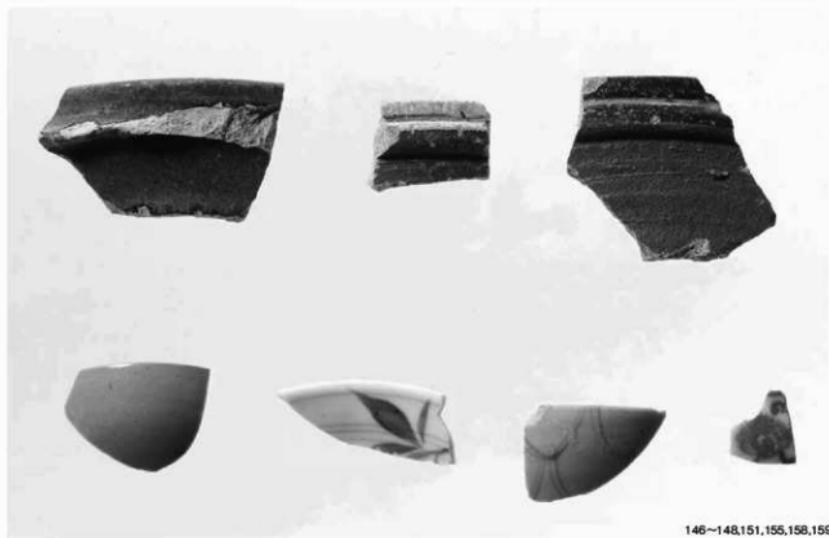
121~123,126,127,129



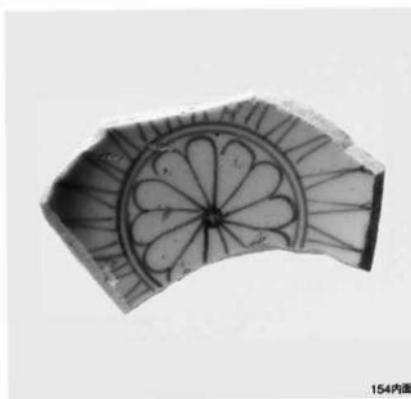
139~142外面



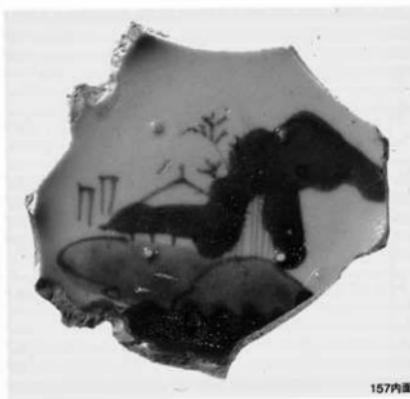
139~142内面



146~148,151,155,158,159



154内面



157内面



154



157



154底部



157底部



156



149



156底部



150



162



160



163



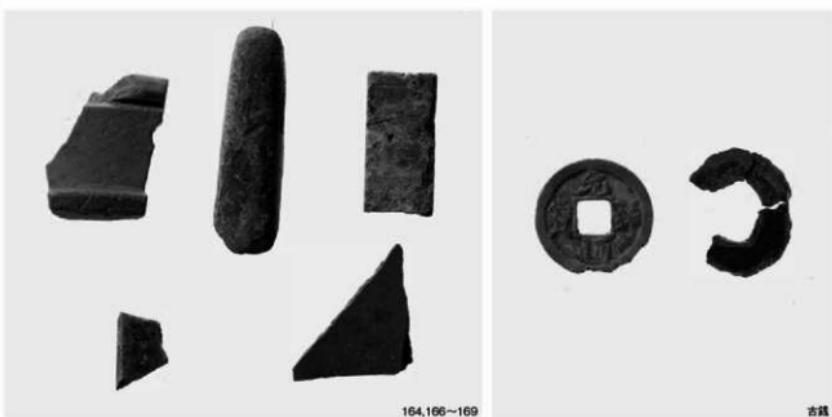
172



173

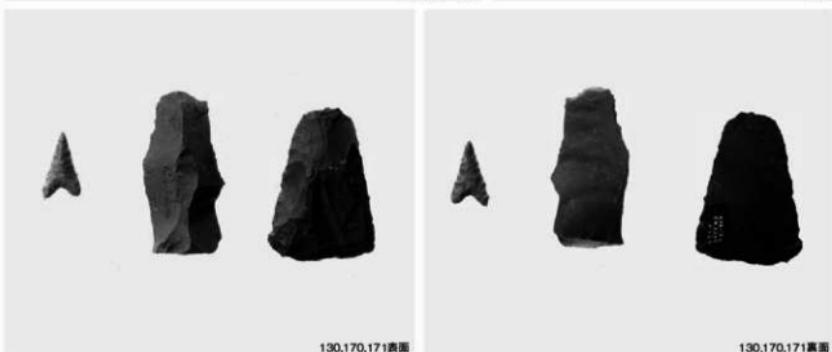


180



164,166~169

古錢



130,170,171表面

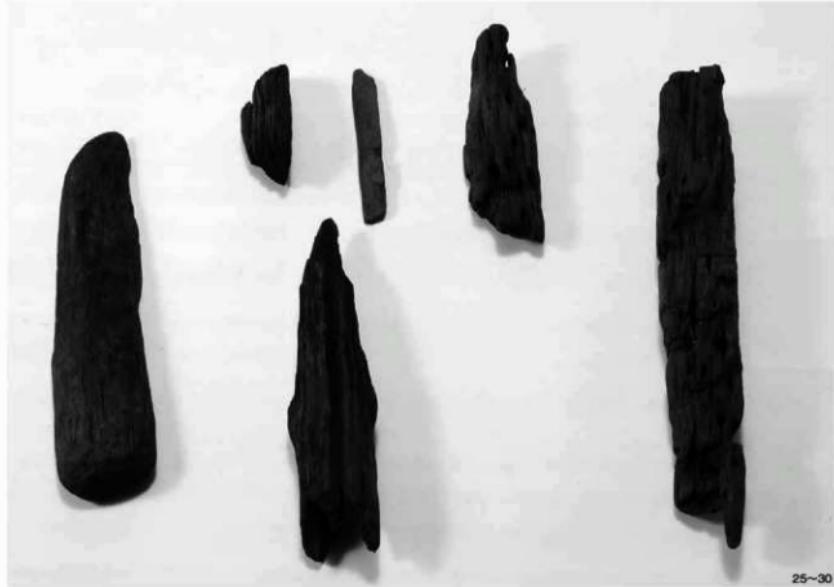
130,170,171裏面



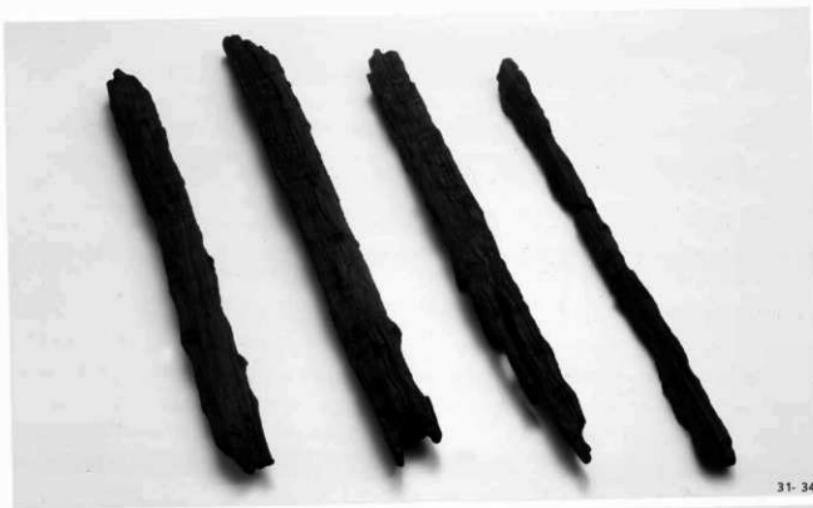
174~179,181



19~24



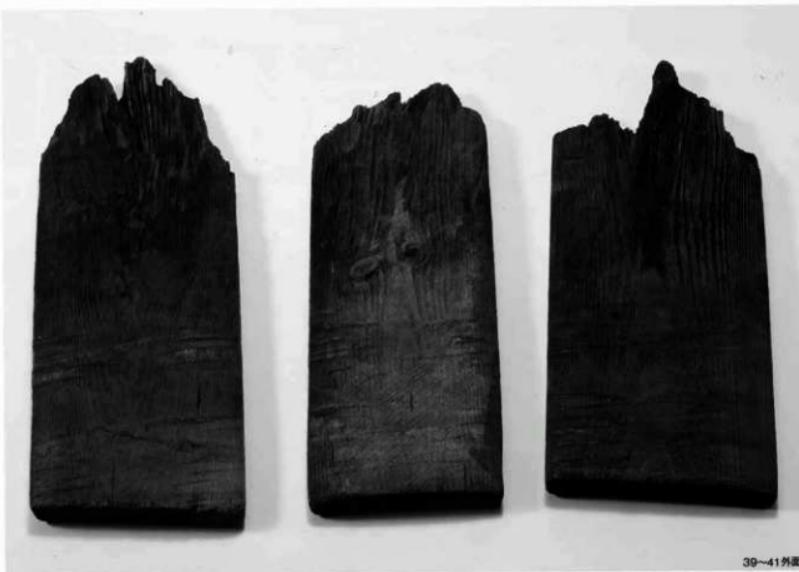
25~30



31- 34



35- 38



39~41外面



39~41内面



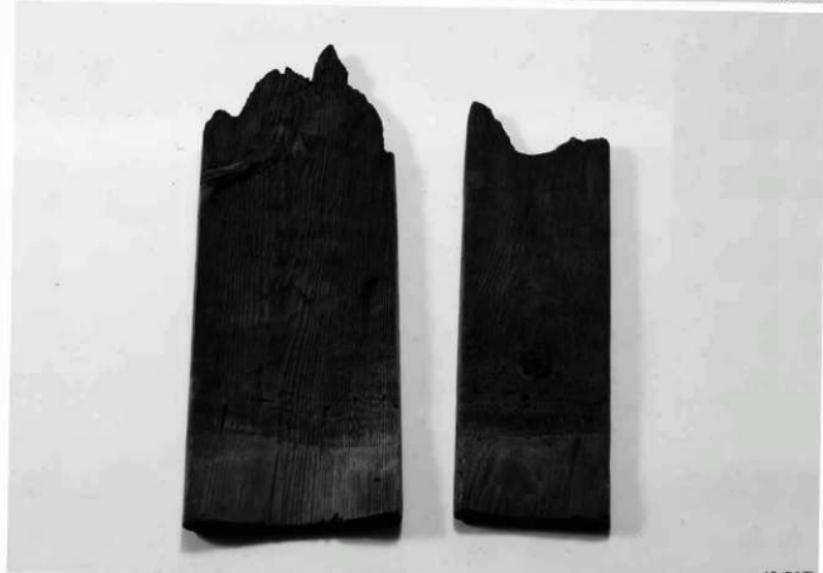
42~44外面



42~44内面



46,47 外面



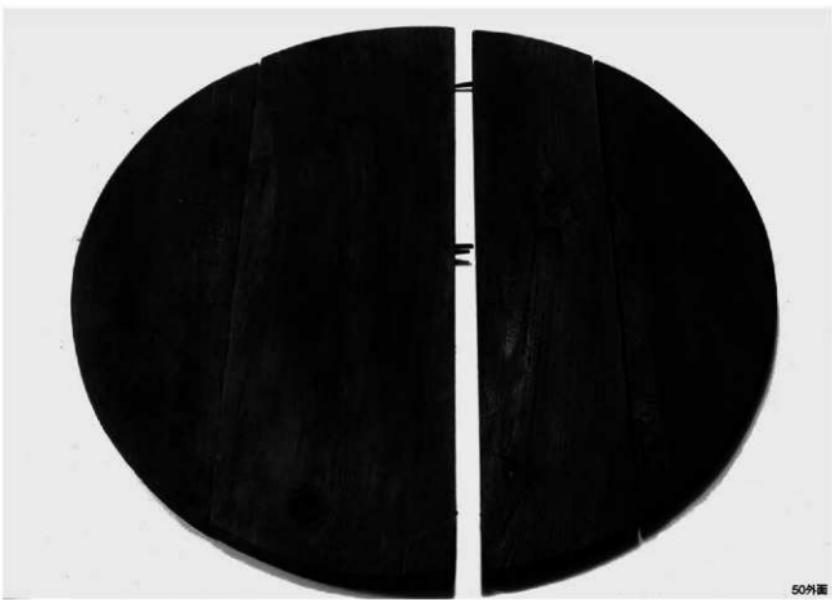
46,47 内面



45,48,49外面



45,48,49内面



50外面



SX2001完搬状況

報告書抄録

ふりがな	ひのきばらいせきだい2・3じはくつちょうさほうこくしょ						
書名	檜原遺跡第2・3次発掘調査報告書						
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第185集						
編著者名	伊藤邦弘						
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301						
発行年月日	西暦2010年3月31日						

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因		
		市町村	遺跡番号							
ひのきばらいせきだい 檜原遺跡	やまとがたけん 山形県 南陽市 おおあざなかあらあい 大字中落合 あざなからいはい 字檜原	6213	平成8年度 新規登録	38° 3' 7"	140° 7' 47"	20060509 20060922 20070515 20070731	7,400m ² 4,500m ²	一般国道113号 赤湯バイパス改 築事業		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
ひのきばらいせきだい 檜原遺跡	集落跡	平安時代	堅穴状遺構	4	土師器 須恵器	方形を基本形とする壁が焼 けた掘り込みを20基検出す る。出土遺物の内容から、 平安時代の所産と考えられ るが、性格は不明。 (文化財認定箱数: 21)				
		中世	掘立柱建物跡	5	井戸跡					
		近世	溝跡	22	川跡					
			柱穴		陶器					
柱穴										

要約	A～C区の各々が平安時代、中世、近世と異なる時代を主体とする。A区は13世紀前後の屋敷跡で、板塀により区画された中に、掘立柱建物と井戸が配置される。2～3回の建て替えが想定される。第1次調査でも同時期と考えられる屋敷跡が確認されており、関連がうかがわれる。
	B区では、壁が焼けた堅穴状の遺構がまとまって検出された。平面形は方形あるいは長方形を基本とする。出土遺物から、平安時代の所産と考えられるが、用途は不明である。
	C区では、南東側に古代の遺構が見られるものの、主体とすることは、近世と考えられる。大小の溝跡が、ほぼ南北方向と東西方向に掘られる。複数回の掘削が行われた痕跡も見られ、近世に入ってから農地へ開削されたことがうかがえる。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第185集

檜原遺跡第2・3次発掘調査報告書

2010年3月31日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 株式会社アサヒ印刷
〒990-2251 山形県山形市立谷川二丁目486-14
電話 023-686-4331